
転生NEXT

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生NEXT

【Nコード】

N6798Y

【作者名】

虹鮫連牙

【あらすじ】

真っ暗な世界から神様の導きでやって来た場所は、テレビアニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界。転生者となった男は、原作に介入して悲しい運命に立ち向かう。「俺の名前は、碎城院聖刃だ！ 合言葉は、絶対原作介入主義！」 ※この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

NEXT1…転生者、誕生

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

俺は絶対に認めない。

そうだ、運命ってやつは自分自身の手で切り開いていくものなんだ。だって皆もそう言っているじゃないか。

幸せになる権利は誰もが持っているものだ。

でも、不幸になる義務は誰にもない。

だから、“俺はここにいる”。

「俺は……………」

意識が覚醒した瞬間に解ったことは、俺に形が無いということだった。

今俺がいる場所、というよりも俺の意識が存在する場所は、端から端まで真っ黒な場所。上下が分からないとか、どこまでも広がっているとか、そういう三次元的感覚さえも感じられない。

見渡せないし、澄ます耳も探る手足も無い。呼吸することさえも忘れてしまっているかのよう。

だから俺は、自分に形が無いのだと思った。

「俺は、何？」

「あのお……聞いていただけますか？」

「はい？」

突然の声。耳なんて無いはずなのに、確かに聞こえた。

そう思っていたら、無いはずの目で見ているみたいに、声の主がそこにいた。

「こんにちは」

「うおおっ！ いつの間にい！？」

無造作に波打つ金色の天然パーマを右手で掻きながら、頬を赤らめた少年がそこにいた。真っ黒な世界なのに不自然なほどはつきりと見える素肌は色白。身に纏う衣服だって本当の意味での純白だ。まあ、衣服と言っても一枚布をすっぽりと被っているだけのような簡素なものだけだ。

「驚かせてすみません」

「え、ちょっと……あんた誰？」

少年は俺の質問を聞いていないのか、なにやらモジモジとした様子で、だけど真っ直ぐに俺のことを見ながら言った。

「実はですね、あなたには『転生』していただきたいなと思って」

「……………はい？」

用件を言うより先に、言うことってのがいっぱいあるんじゃないのか。そう思いながらも、彼の言葉が俺に届いた瞬間、何か妙な温かさを感じた。

それは体の無い俺の隅々を駆け巡る、波紋のように広がっていく何か。それを感じ取ると、俺はある変化に気が付いた。

動いた。

無いはずの体が動いた気がして、俺は自分を見ようとした。

そう、形が無いはずだったのに、俺は自分自身を目で見ようとしたのだ。

「どういうことだ……これ？　俺、どうなってるんだ？」

「今、あなたには転生するための準備が始まっています。もうすぐで転生が完了しますから」

「テンセイって一体なんだ？」

「転生が完了すれば自然と分かるかと思いますが——」
少年は続けた。

「——あなたには、これから『魔法少女リリカルなのは』の世界に誕生していただきます」

その言葉を聞くのと同時に、全身を駆け巡っていた異変が更に慌

しさを増した。

広がっていた波紋はやがて、命を感じさせる脈となり、肉体を描く輪郭となり、存在を示す色となって、俺を完成させていく。

「……………転生？ ……………リリカルなのは？」

「はい。また向こうの世界でご案内しますので、もう少しお待ちください」

少年の言葉を聞きながら、俺はどんどん完成していく自分の体に意識が繋がっていくのを感じ取った。

そして、最初に抱いていた気持ちを思い出していた。

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

「お前って……………誰だ？」

次の瞬間、真っ黒だった世界は無数のヒビにまみれ、そして音も無く割れて砕けた。

目が覚めた。という表現は正確なのだろうか。

俺は、部屋の真ん中に立っていた。

フローリングの床から伝わる冷たさ。開け放たれたカーテンの向こうには青空。壁に掛けられているものは、黒い学ラン。

ここが誰の部屋なのか。そんな思いが一瞬だけ浮かんだが、それをすぐに忘れるようなことに気が付いた。

体がある。あの真っ黒な場所で徐々に出来上がっていた自分の体が、実在しているのだ。両手で顔や胸や腿を触てみると、確かに温かさがあった。

しかし、何故か全裸だ。

「転生は無事に済んだようですね」

声のした方向に振り向くと、ベッドの上に腰掛ける人物がいた。その声も、姿も、あの真っ黒な場所で出会った彼そのものだった。だけど、彼の名前が分らない。

いや、というよりも何故少年がこの部屋に？

とりあえず俺は、股間を両手で隠した。

「あの、どうなってんの？」

「徐々に頭で認識し始めるはずですよ。間もなく事情を飲み込めると思います」

その言葉がきっかけだったのかは分からないが、何だか頭の中の更に奥の方から、じわりじわりと滲むように広がるものがやって来た。

俺は一体誰なのか。俺がこの世界にどうやって降り立ったのか。

俺の今いる世界がどういった場所なのか。

「ここは……リリカルなのはの世界？」

「あ、そうですそうです！ 良かったあ、ちゃんと転生出来てるう！」

『魔法少女リリカルなのは』と言えば、とらいあんぐるなんちゃらとか言うゲームのファンディスクが元となっている、脚本家都築真紀の代表作とも言えるテレビアニメ作品だ。

主人公は高町なのは。優しくて一途な女の子である彼女が魔法の力と出会うことから始まる、ハートフルでガチガチバトルもあってとにかく可愛い子がいっぱい出てくるアニメだろ。

俺は知っている。全十三話の第一期放送を皮切りに今でも続いているこのシリーズ作品は、様々なメディア展開を繰り広げている奥深さがあることを。そして、多くの二次創作作品が生まれるほどたくさんの人に愛されていることを。通称『SS』と呼ばれる二次創作小説が数え切れないほどあるのも、このシリーズの人気を物語っている。

そんな、現実ではない世界の中に、今、俺はいる。

そして先程から聞いている言葉、『転生』。

ということとは？

「ま、まさか俺は………転生オリ主と言うやつか！」

「はあい！ 理解していただけて嬉しいですよ！」

やっぱり。さっきこいつが言っていたみたいに、時間が経つにつれて、自分の現状を理解出来た。

転生オリ主と言えば、二次創作作品において目にするこの出来る設定で、もはや“ジャンル”と言っても良いぐらいメジャーなもの。

オリ主というのはオリジナル主人公の略、だと思う。

よくあるパターンとしては、神様の手違いで死亡した現実の人間が、お詫びということで神様に好きな世界へ生まれ変わらせてもらう。そうしてアニメ世界に転生した人物が主人公となって物語を紡ぐから、転生オリ主と呼ばれるわけだ。

これらの設定はよくSSに使われているが、まさか自分がその転生オリ主になるとは。

いや、そんなことよりも思ったのは。

「こんなことって本当にあるんだな」

「まだ信じられませんか？ ってか、服着ませんか？」

「いやあー、正直SSでしかこういうのって知らなかったからさ。

まさか俺の身にこんなことが起こるなんて………あ、ってことは、あんたが神様か？ なあ、神様だろう？」

「いえいえ、僕が神様だなんてそんな」

「全くテメエ様の不手際で俺を殺すだなんてとんでもない話だよ」

「え、殺すって……あの」

「でもま、俺は許しちゃうよ。うん………だってさ、転生オリ主と神様ってきたらさ、アレしかないじゃん？ ましてやここはリリカルなのはの世界。もうアレしかないじゃん！？ なっ！」

「うわあ……絡みづらいなあ、このキャラ」

正直に言って、俺は胸をときめかせていた。

だって転生オリ主と神様の邂逅と来たら、次の展開は既に読めて

いるのだから。

神様の不手際で俺は死に、お詫びとして新たなる命を授かった。しかし、人の死をそんな簡単に償おうだなんて虫が良すぎる。失った命には、俺の人生があったはず。生まれてから死ぬまでに積み重ねた歴史があったはず。それをたかが新しい命一つで賄おうなんて、そんな話があったてまるか。

そうだ。俺にはもっと多くを要求する権利がある。

俺がこの世界にやって来たということは、すなわち、それなりの生き方をしなければならない。

「神様」

「あの、だから僕は」

「俺に」

「はい？」

「俺に、チート能力を寄こせ」

「……………くるとは思っていました、本当にきた」
当然の要求だ。

ここはリリカルなのは世界だぞ。魔導師達が活躍する世界だぞ。そんな世界にやって来たからには、俺だって魔法が使いたい。

そして、俺が主人公となるに相応しいほどの力が欲しい。チート反則と呼ばれるような、恐ろしいまでに圧倒的で高性能で都合の良い能力が、俺には必要だ。

主人公って言うのは、誰よりも優れていなくちゃ駄目なんだ。

「さあ、寄こすんだ」

「実はですね」

「まあ、魔導師ランクSSSってのは当たり前だよ。そんなもって俺の相棒となるデバイスは、やっぱり剣タイプってのがオーソドックスなのかな。それとは別に何かもう一種類あってもいいけど、そっちは神様に任せるよ。センスいいの頼むぜー。あとバリアジャケットって言ったら見た目が」

そこまで言って気になった。

見た目？ そうだ、俺自身の容姿って大事じゃないか？

すぐさま部屋の中を見渡して、俺は鏡を探した。姿見らしきものは見当たらないが、机の引き出しとかには手鏡くらいあるだろう。やっぱりオリ主と言ったら中性的な顔立ちがデフォルトだろう。整った目鼻口は当たり前、髪はさらさらストレートで、ワンポイントとして目立つような色だと良い。鏡が無くても体は見る事が出来るが、俺が思う限りではとりあえず太っていない体型。しかし、実は超人的な力を秘めていたりするものだ。

「あの……実はですね。ちょっと言い難いんですけど」

「なんだよ、早く言ってくれ。もしくは能力をくれ」

「本当に申し訳ないんですけどお」

あった、鏡。

俺は一度深呼吸をしてから鏡を覗き込んだ。

すると、そこには。

「ふ、普通だなあ。ちょっと普通過ぎるっていうか、もろに日本人だな」

「ま、まあここも、なのはの世界での日本ですから」

「ちょっと目え細くないか？ それに髪も黒だし………ってか何でメガネなんだよ？」

「メガネは外してもいいから、服着ませんか？」

あれ、何で俺って全裸なんだっけ？

その時だった。

「ちよっと、起きてるの？」

部屋の外で声がした。

誰の声だ？ 女の人？ しかし、この家には俺と神様以外に一体誰が？

「ひろしい？ 起きてるのかって訊いてるのよ？」

ひろしって誰だ？ いや、それよりも待て。

女の声が近づいてきているが、このままでは間違いなくこの部屋にたどり着くだろう。

誰なのかは分からずとも、俺の今の状況は人に見せられるものではない。だって全裸だぞ。赤の他人にこんな姿を見られたらまずいだろ。

ベッドに潜り込んで隠れるか。

しかし、そこで俺は立ち止まった。

「ちょ、ちよっとお！ どうしたんですかって、それより服！ 服！」

ベッドには神様がいるが、彼の容姿と言ったらよく見てみれば美少年。絵画に描かれる天使が抜け出てきたような、それこそ俺が憧れた中性的な顔立ちをしていて、しかも金髪碧眼。日本人離れしている。

そんな少年と共に裸でベッドインとか、そっちの方が変態的じゃないか。むしろ犯罪的だ。

「まずい！ どうすればいい！？」

「え！ だから服着れば良かったのに！」

「さっきから何騒いでるのよ、まったく！ 開けるわよ！？」

そしてドアが開かれた瞬間、俺の視界には中年の女性が映っていた。

時間にして約コンマ数秒と言ったところ。しかし、女性の硬直した姿がやたらと長く目に映っていたのは気のせいだろうか。俺の出来上がったばかりの心臓は、早くも止まりそうになっていた。

俺の全裸を見た彼女は短く悲鳴を上げた後、慌ててドアを閉めながら、「そういうのは一人の時にしなさいよっ！」と言って立ち去っていった。

全身に鳥肌が立ち、股間もきゅーっと縮まった。

それを見て一言。

「ちっちゃ……………」

そして俺は続けた。

「神様、これは一体」

「ぼ、僕はあなたにしか見えませんか、大丈夫です」

「あつそ…………じゃあ、あの人は？」

「お母さん、ですね。この世界における、あなたの」

じゃあ、今夜は出会ったばかりのマイファミリーで家族会議かな。
俺はパンツを探し出し、そつと穿いた。

「どうしてそういうことは早く言ってくれないんだよ！」

「僕は言おうとしたんですよ？　で、でもひろしさんが」

「ひろしって呼ぶな！　俺はもっとイカした名前がいいんだよ！」
部屋に掛けられていた学ランに着替え、俺は神様と一緒に家を出ていた。

家を出たと言っても、家出をしてきたという意味ではない。気まぐずい空気のままではあったが、母さんの用意した朝食をおいしく食べて、俺は学校に向かうため家を出たのだ。

俺以外の人には姿が見えないという神様を引き連れて、俺は晴れ空の下をイライラしながら歩いていった。

「俺を転生させるんだったら、もっと気の利いた境遇にしてくれなくちゃ駄目だろ！？」

激しい口調で責め立てると、神様は目を潤ませて鼻頭を赤くしながらも反論してきた。

「だ、だって！　僕だっていろいろ考えたんですよ！　ご飯の心配も要らない、社会人みたいに忙しさに時間を取られることもない、だけど親の躾や拘束にもそれほど縛られない、人生の中でも最も自由ではないかと思われる時期にあなたを転生させतんです！　そう、十五歳に！」

「十五歳って言ったら受験生じゃねえかよ！　めっちゃくちゃ忙しいよ！　原作介入どころじゃねえよ！」

本当に気の利かない神様で困る。

俺が望んだ転生オリ主ってのは、両親は既にいないか離れて暮ら

しているかで、身を寄せる場所や安息の無い悲しい宿命を背負った男だ。しかも過去に、決して人には言えない秘密があったりして、それ故に全てを悟っていて、しかし、なのは達原作キャラと出会うことで大切な人を守るためという目標を見つけて。笑いかけたらポ、頭撫でたらポ。そんな素敵でダンディーでクールでギャグもやっちやってそんなでもって俺のために原作キャラがニコニコホロリで。

「あ、あの」

「何だよ！？　今良いとこなんだよ！」

「僕、素敵だと思いますよ、ひろしって名前」

「フォローはいいんだよ！」

「確かご両親は、心の広い人に育ってほしいという想いを込めて」

「だからいいんだよ！　……………それより、今って原作で言うところの辺なんだ？」

「何がです？」

「時代って言うか時期、時間って言うか……………要するに、原作はどこまで進んでるの？」

そこは肝心だ。とにかく、俺の身の回りに対する不満はこの際無視するとして、原作介入が出来るかどうかが大切なんだ。

俺が神様の答えを待っていると、彼は「えーっと」と言いながら視線を宙に泳がせた。

「確か、高町なのはは現在九歳で、私立聖祥大附属小学校の三年生です」

「じゃあ原作で言うと一期か二期ってわけだ。それにしてもなあ、なんで俺となのはを同級生にしないかなーこの神様は」

「予定では今日の夕方、なのはは塾に行く途中の公園でユーノと出会いますね」

「じゃあ一期か……………って今日かよ！？」

なんだなんだ、この慌しさは。

転生オリ主の初原作介入っていうのは、タイミングが大事なんだよ。間が悪くてなのは達といつまでも出会えずに、気が付いたら放

送終了してましたじゃ意味ねーだろうが。

これから起きる事柄としては、シリーズ一期の第一話において要とも言える展開。なのはが初めてユーノに出会う場面。

何としてでも、ここに俺という存在をねじ込まなくてはならない。そして魔導師としての俺も初お披露目というわけだ。

「こうしちゃいらんな。さっさと公園に行って張り込みだ」

「え、学校は行かないんですか？」

「アホか。おとなしく学校で受験勉強するオリ主なんて聞いたことねえよ。何事も早め早めが肝心だ。今のうちに公園と周辺地理を把握して、俺となのはの邂逅を絶妙のタイミングでクリアするんだ」

「でもひろしさん」

「ひろしってゆーな。俺の名は………そうだな、『さいじょういんせいば碎城院聖刃』
とでも名乗っておこうか」

「……………いいんですか、それで」

何故か顔を引き攣らせている神様。圧倒されているって感じだな。しかし、そんなものに構っている暇も無い。とにかくリリカルなのは一期の世界にやって来た以上、この物語の舞台となる海鳴市についてよく知っておかなくてはいけない。まずは一番肝心な、なのはとユーノの出会いの場所だ。

幸いなことに、市内に点在する地域マップを見つけることが出来た。海鳴市はかなりでかい市ではあるが、俺の家から公園までは歩いていけない距離でもないことが判明。その点だけに関しては、神様を褒めてやってもいいなと思う。

走り続けること二分ほど、息が上がってしまった。

なんだこの体。チート能力で空とか飛べるといいのにな。ま、そういう能力のお披露目も後にとっておくか。

時間もたっぷりあるし、歩いていこう。

ただ歩くだけというのも退屈なので、俺は神様に言った。

「なあ、何で俺を転生させるって時に、俺の家族までも用意する必要があったんだよ？」

「またその話ですか………まあ、一言で言えば、原作内にごく自然な形であなたを転生させるため、平凡な設定を用意したからです」
平凡な設定？ その言葉の意味が分からなくて、俺は首を傾げて神様の方に顔を向けた。

すると、神様は俺の顔を見て理解したのか、真顔で言ってきた。

「要するに、あなたには原作に影響が出ない程度の人物として、この世界に入り込んでいただきました」

「それっておかしくないか？ 俺、原作介入目指しちゃってるんだけど。神様の言い分だと、俺は原作に影響を与えちゃいけないみたいじゃん」

「スムーズなスタートを切るためですよ。あなたが原作介入をするにしても、出だしからぶっ飛んだ介入をしてしまうと、もはやそれは原作介入ではなく、オリジナルになってしまうからです。なるべく原作に沿った展開で、でも、あなたには介入していただく、と」

「なんかピンと来ないなあ。最初っから設定改変済みで始まるSSだってあるくらいだぞ？ 何でそんなに気を遣うんだよ？」

そこまで言うのと、神様の顔が更に真剣さを増していることに気が付いた。その気迫に押された俺は、思わず歩みを止めてしまう。

そんな状態の俺を待っていたかのように、神様は更に一步、俺に近づいて言った。

「あなたにお願いがあるんです」

「な、何？」

「救ってほしいんです」

「は？」

「救ってほしいんです。この作品に待ち構えている、悲しい展開を。あなたの手で助けてほしいんです」

それは、俺にそうしろと頼んでいるのか？

無論、原作介入をするからには、俺はなのはの物語を公式とは違う方向に持っていくつもりだ。

原作介入だぞ？ しかも俺が主人公。自分の望む展開にならない

でどうする。

そんなことを改めて言われても、俺は頷くさ。

いや、違う。頷くことしかできなかった。

そうすることしか出来なかったのは、神様の言うことが当たり前過ぎて言葉が出なかったからじゃない。

怖かった。神様の切羽詰まった顔が、俺に有無を言わせないくらいの、余計な言葉を発すると言わんばかりの、それほどまでの氣迫に満ちていたからだ。

一体なんだと言うのだろう。神様の望みを俺が叶えるということが、俺の目的みたいに言われている。

これではまるで、神様のために俺が転生させられたみたいじゃないか。

いや、本当にそうだろうか。

俺は湧き起る記憶の波を感じ取った。

そして思い出してきた。あの、真っ黒な世界で俺が抱いていた氣持ちを。

俺だって神様と同じで、悲しい結末を望んでなんかいない。

ハッピーエンドこそが至高。誰もが悲しまない終幕こそ、物語には相応しい。

お前の思い通りには、絶対させない。

お前？

「あ、ひろしさん。公園が見えてきました」

「ひろしじゃねーって。セイバと呼んでくれていいぞ」

辿り着いた公園は、緑が豊かで遊歩道があちこちに伸びている穏やかな場所だった。今はまだ陽が高い時間帯ということもあって、あちこちで見られる公園の利用者はお年寄りがほとんど。ストレッチをしたり、ベンチに腰掛けてお喋りをしていたり、公園内の池で釣りに興じる人もいる。

ふと思いついた。確かなのは達は、塾の帰りにこの公園の中で、近道をしようとしてユーノを見つけるんじゃないかってっけ。

更に、アニメの放送内容を振り返る限りでは、ユーノは既に小動物状態で横たわっているはず。

ならば、その場所をきっちり正確に把握しておかないといけない。

俺は遊歩道から外れて、草を掻き分けながら傷ついたユーノを探した。

そうすること一時間以上。腹が減ってきて力も出なくなっていた時、ようやく俺の目の前に、希望の光が見えてきた。

「おお、見つけたぞ！」

草に身を隠しながら、俺は小さな声で神様に告げた。

「あそこにフレットモードのユーノがいるぞ」

「本当だ。うわあ、結構傷だらけなんですね」

神様の言う通り、そして原作の通り、ユーノは体の至るところが傷ついていた。見ているだけでもなかなか痛々しい。

「どうでしょう？」

「どうするも何も、場所も把握出来たし、今はとりあえず無視だよ」

「え！ あのまま放っておくんですか！？」

神様がそんなことを言うので、俺は小さくため息をつきながら言い返した。

「スムーズなスタートで介入するって言ったのはあんただぞ？ そ

れに、ユーノだって男の子なんだし、どうせ夕方には助けが来るんだ。ちよつとぐらい我慢させといっても大丈夫だ」

「なんかシビアっすねえ……………」

俺は神様と共に、そつとその場から離れた。

少し離れたところまで行き、低くしていた姿勢を起こすと、体のあちこちに付いた葉を払い落とす。

ユーノの倒れている位置は確認できた。あとは時が来るのを待つだけだ。

その時に俺は、『魔法少女リリカルなのは』の物語に介入する転生者としての人生をスタートさせるわけだ。

待っている。必ずや原作の悲しい結末を変えてみせる。

碎城院聖刃の名にかけて。

「ちょっと君い」

「え？」

突然声を掛けられて、視線をくると変えると、そこには正義を守る日本のおまわりさんが立っていた。

「学生だろ、君。こんなところで何しているんだ？」

「あ、いや、俺は別に怪しくなんてないぞ」

「もうとっくに授業が始まっている時間だろう？ それなのにこんなところで堂々とサボりかい？ 君、名前は？」

「さ、碎城院！ 碎城院聖刃だ！」

「……本当の名前は？」

「山田ひろしだよ！」

ちくしょう、本当に原作介入してやるんだから。

俺は、背後から注がれる神様の刺々しい視線を浴びながら、固く誓った。

See you next time.

NEXT 2…魔法少女、変身

公園でおまわりさんに補導されてしまった俺は、家に帰り着くとすぐに母さんから呼び出しを受けた。

「どうやら、あのおまわりさんは俺の家にまで連絡を入れてしまったらしい。」

「ひろし！ ちょっとそこに座りなさい！」

「え、なんで？」

「なんでじゃないでしょう！？ あんた、学校サボって補導されるだなんて、何してんのよ！？」

普通に怒られている。

だがしかし、ちよつと待ってくれ。はっきり言うが、今の俺って、転生オリ主としてのあるべき姿なのだろうか。お母さんに怒られるオリ主なんて聞いたことがないぞ。

「母さん、あんたをそんな子に育てた覚えなんてないわよ！？」

「そりゃそうさ、俺は転生オリ主なんだから！ 俺だって育てられた覚えなんかないよ！」

本当にもう、ちよつと待ってくれ。はっきり言うが、俺のように怒られているキャラってリリカルなのは世界観に合っていないだろうってか浮いていないだろうか。

「今夜は父さんにも怒ってもらうからね！」

「おかしいだろう！ 何で転生オリ主なのにこんなに怒られなくちゃいけないんだよ！」

「さっきから言ってるテンセイナントカって何なのよ！？ だいたい、あんたが怒られるようなことするからいけないんでしょうが！」

「ずっりー！ 他所の転生オリ主はそんなに怒られてないのに！」

「あっそう！ じゃあ他所の子になっちゃえば！？」

「他所の子？ ……………そうか、それは俺が高町家に居候するフラグか」

なるほど、そういうことか。これは何とも、意外なところから原作介入のチャンスを得たものだ。

“ 棚から牡丹餅 ” とはまさにこのこと。これで俺は、“ 今日から高町 ” だ。

原作介入のチャンスを手にした俺は、思わず神様に向かって微笑んでいた。

しかし、神様は何も言わないままため息をついて俯いている。何故だ、俺の原作介入が嬉しくないみたいじゃないか。

まあ、何はともあれ、これで俺もオリ主らしくなれるというわけだ。

「怒られてるのに、何をニヤニヤしてるのよ!？」

「母さん、ありがとう! 今日から他所の子になる!」

「なっ……………」

俺は部屋に戻ると、クローゼットの奥にしまってたあったボストンバッグを見つけ出して、荷造りを始めた。

さあて、せっかくのチャンスを無駄には出来ないな。

肝心なのはどうやって高町家の一員になるきっかけを得るか、だ。まあ、これに関しては神様にも一緒に考えてもらおうとしよう。

俺の心はまるで遠足に行く子供のようにだった。荷造りがこんなにも楽しいとは驚きだ。

「待てよ……………高町家に行くんだったら、木刀とか必要かもな。士郎や恭也と戦うことになりかねんからな」

高町家の男共は戦闘民族だ。なのはの父である士郎と、兄の恭也は剣術御神流を操る強敵。転生オリ主である俺でさえ、少しばかり気合いを入れないといけない程度には手強いはず。

木刀って何処で買えるんだろう？

俺はバッグを肩に下げてから、玄関に向かっていった。

「ひろし、あんた」

「じゃあ母さん、元気でね」

顔を見たら別れが辛くなるかも知れない。特に母さんが。

俺は精一杯の優しさを捧ぐつもりで、あえて後ろを振り返ることなく玄関を出た。

さようなら、俺の家。

「ひろしきーん」

公園の草むらの中、ユーノの様子が窺える位置に身を潜めていた俺は、横で話しかけてくる神様の方を向いた。

「だから、俺のことはセイバと呼べって」

「お母さんに謝ったほうがいいですよー」

「何言ってるんだ。これはチャンスなんだぞ？ それを手放す理由なんてないだろう」

もうすぐなのは達の通う小学校は下校時刻になるのではないか。アニメの描写通り、公園にはだんだんと傾いた陽の、オレンジ色の光が掛かり始めていた。

事が起こる前に予習をしておこう。俺は、頭の中にある原作知識を掘り起こした。

なのはと、同級生のすずか、アリサの三人は、塾に向かうため近道としてこの公園を抜けようとする。そして、ユーノが発する念話をキャッチしたなのはは、傷ついたユーノを保護し、榎原動物病院に連れて行くのだ。

ここまでの流れの中で、俺が介入出来る隙を見つけられるかは分からない。しかし、たとえこの場ではそれほど大きな介入を果たせなかったとしても、チャンスはまだあるから大丈夫。

原作通りに行くならば、なのはは今夜、ユーノから魔法の力を授かることとなっているのだから。むしろ、俺が介入する上で最も重要な場面は今夜だと言っても過言ではない。

そうだ、俺が今までユーノに対して何もしなかったのは、なのはがユーノと出会って魔法少女になるきっかけを無くさないため。い

くら原作介入がしたいからと言って、なのはが魔法少女にならないければ、俺の求める展開にはならないからだ。

「ねえ、ひろしさんってばあ」

「くどいぞ、神様。もう少しでなのは達がやって来るはずだから、おとなしく待ってて」

その時だった。

「たぶん、こっちの方から！」

夕暮れ時の公園を走ってくる足音と共に、聞き覚えのある子供の声が聞こえてきた。

会ったことがあるわけではない。しかし、俺はこの声が誰なのかを知っている。

聞き間違うはずなどない。俺は、この声の主が紡ぐ物語に介入するため、転生してきたのだから。

ついに来た。

ついに時がやって来たのだ。

「神様！」

「き、来ましたね！」

傷だらけのユーノに近づいていく、学生鞆を背負った女の子。

白いワンピースタイプの制服を揺らし、頭の上のツインテールを跳ねさせ、不安げな視線でユーノを見ながら走ってくる。

満身創痍のユーノが必死に送った救難信号を受け取ったから、彼女はここへやってきた。

そう、彼女の名は。

「あれが……“高町なのは”」

なのはは、ユーノを優しく抱きかかえた。

どうする。

どうする、俺。

何かするべきじゃないのか。

原作主人公が今、俺の目の前にいる。物語の始まりとも言える重要な場面に遭遇している。

ここで俺が何かして、原作に介入するべきじゃないのか。
何をするべきなのだろうか。

「神様、俺は何をしたらいい？」

「ええ！　そういうの考えてなかったんですか！？」

「何て言って飛び出したらいいのかな！？」　台詞が分からないぞ！」

「台詞なんて決められてるわけじゃないじゃないですか！？」　あなたは
原作キャラじゃないんだし！」

くそ、くそう！

このままでは俺の存在など無いかのように、物語が進んでしまう。
一体どうしたらいい。

その頃、肝心のなのは達と言うと、ユーノの容態を心配してい
ろいろと意見を出し合っているようだ。

「あつ、見て……動物………怪我してるみたい」

「う、うん、どうしよう？」

「ど、どうしようって………とりあえず病院！？」

「獣医さんだよお！」

いよいよまずい。

このままでは、このままでは物語が進んでしまう。
三人が焦っている時、俺は別の理由で焦っていた。
刻々とタイムリミットが近づいてくる。

「この近くに獣医さんってあったっけ？」

「ああえつとお………この辺りだと確かあ………」

「待って！　家に電話してみる！」

ええい、ここでもたもたしていたら出遅れる！

俺は、意を決して草むらから飛び出した。

「ちょ、ちょっと待たんかあ！」

「えっ！」

「ひ、ひろしさん！　どうするんですか！？　どうするんですかあ
！？」

ここで、何が何でも俺の存在をアピールしておかなくてはいけな

い。

俺が何故ここにいるのかを示さなくてはいけない。

気付け、高町なのは。今、この瞬間の俺とお前の出会いは、今後ののはシリーズにおいて紡がれる新たな物語の原点となるのだ。

俺は、転生オリ主。

「ま、まき！ まきひゃ！」

「まき？」

「榎原動物病院ってのが……あ、あるんじゃないのかなあ？」

それだけ言うと、俺の頭は真っ白になっていた。

次に言うべき言葉が出てこない。何を言ったらいいのかも分からずに立ち尽くしている俺の膝は、面白いぐらいに震えていた。

しばらく沈黙が続いた後、さすがに携帯電話を取り出しながら、なのはとアリサに言った。

「とにかく！ 榎原動物病院ってのがあるのかどうか、家に電話してみる！」

その言葉を合図にして、なのは達は電話を掛けながら走り去っていった。

三人がいなくなった後も、俺はしばらく動けなかった。

顔がやたらと熱い。緊張のせいもあるだろうが、今の自分を振り返ってみると凄く恥ずかしくなってしまったのだ。

何か出来たのか、俺。

名前は名乗れなかった。印象付けられるような強烈な台詞も吐けなかった。それどころか、緊張し過ぎてなのは達と全然目を合わせなかった。

何やってるんだ、俺。

「………すずか、結局電話してましたね。原作どおりに」

「うん、そうだね」

「どうしますか？」

「………そういや、この後確か、アイキャッチが入るんだっけ？」

「ひろしさんの出る幕じゃないですよ」

「あっそ……………」

今出来ることなんて、夜を待つこと以外に無い。

そうして俺と神様は、夜が訪れるのをひたすら待った。

一応周辺地域の地図を確認して、榎原動物病院が何処にあるのかは確認済みだ。この病院の場所が分からなければ意味がないのだから。

しかし、俺達が進められる段取りと言ったら、その程度しかない。町が夜闇に包まれるまで、それほど時間は掛からなかったはず。だが、何もすることの無い、ただ時が流れるのを待つだけの俺達にとっては、あまりにも退屈な時間だった。

「今更家に帰るわけにもいかねえしなー」

「完璧に家出のノリで出てきちゃいましたからねー」

「腹減ったー。そういや今日は朝飯しか食べてないや」

「お小遣いも充分持つてるわけではないですからねー」

まあ、これも俺が物語の主要人物として原作介入するためだと思えば、まだ耐えられる。

リリカルなのはへの介入をするにあたって、最も物語に密接に関わることが出来るポジションは何処か。それを考えた時、俺は高町家への居候がベストだろうという結論に達した。

そうすれば、原作主人公であるなのはに四六時中張り付いてられるし、必然的に俺も魔法絡みの事件に関われるからだ。

だからというわけではないが、神様が俺をなのはの家族に、せめて同級生にでも転生させなかったことが悔やまれる。本当にこいつ、解ってないんだから。

「あ、ひろしさん。そろそろなのはが榎原動物病院に向かう頃ですよ」

「何！？ それじゃあ俺達も移動するか」

ようやく時が来たようだ。

今はおそらく、異世界の住人であるユーノが、魔法の石ジュエルシードの暴走体に襲われようとしているところ。そしてユーノの救難信号を受けたのはが、榎原動物病院でユーノに魔法の力を授かり、暴走体と対決するという展開が待っているはず。

ここで介入しない手はない。しかも、転生オリ主である俺の反則能力をお披露目する絶好の機会でもあるわけだ。

何としても間に合わなくては。

空腹であることも忘れ、俺は精一杯走り続けた。

全ては原作介入のため。全ては物語を新たな道へと誘うため。

そうだ、全ては“俺”という主人公のため。

繁華街を抜け、人通りもめっきりと減った住宅地にやって来た俺は、事前に確認しておいた地図を思い出しながら幾つもの曲がり角を抜けた。

相変わらず体力の無い体だ。既に息があがっている。

だが、目標はすぐ目の前。止まれるわけがない。

「ひろしさん！ もうすぐです！ あの角を曲がれば病院が見えますよ！」

返事をする余裕も無く、俺は前だけを見ていた。

その時、周囲の空気がいつの間にか変わっていることに気付いた。先程から見ていたはずの光景。誰の姿も見えない、静かで暗い、住宅地。

そのはずなのに。

「何か……違う世界みたいだ」

「ジュエルシードの暴走体がいるんです。分かりますか？　なのはが戦う時にも、こんな風になったはずですよ」

そうだ。ジュエルシードの暴走体と戦う時、まるで町の中から人が消えてしまったみたい、景色だけを残して他の気配が消え去っていた。“見慣れた未知の世界”が、そこに広がっていた。

「ってことは……」

次に起こる展開を予想していた時、すぐ近くで爆発音にも似た轟音が鳴り響いた。

「ひろしさん！ 来ましたよ！」

神様の指差す方を見ると、砂煙が高々と舞い上がる建物の敷地から、小さな小動物を抱えた少女が飛び出してこちらに向かってきた。高町なのはと、フレット状態のユーノだ。

「どうやら、魔法の力はまだ手にしていないらしい。」

「か、神様！ どうしたらいい！？」

「だからそういうのは考えといてくださいよ！」

駆けてくるなのは。どうやら彼女は暴走体から逃げることに必死のようで、前方にいる俺を見ているのかどうかも怪しくらいに緊迫した表情を浮かべていた。

「ええい、今はもたもた考えていられるか。」

「き、君い！」

「あ、あなたは！？」

「何、何、何をそんなにあわわわてているのかね！？」

後ろで神様が「白々しい……」と呟いた。

「早く逃げてください！ 今、あっちから変なオバケみたいなのが！」

「オバケだって！？ そいつは大変だ！ ああ大変だ！ ところで、俺に出来ることはないですか！？」

今、俺ってすごく一生懸命に介入しようとしている。

あれだな、カッコイイ台詞って咄嗟には出てこないんだな。

「無いです！ 早く逃げて！」

「本当に無いですか！？ なんか、なんか無いですか！？」

今、俺ってすごく鬱陶しいんじゃないのかな。

思わずそんなことを考えてしまうほど、俺はテンパっていた。

「ああ、もうそんなこと言ってる場合じゃあ」

その時、ふと、頭上に嫌な気配を感じ取った。

空が夜闇よりも黒い。アレは、雲なんかじゃない。

揺らめく輪郭を寄せ集めて、そいつは一つの巨軀を形成していた。

出た。ジュエルシードの暴走体。真っ黒な巨大マリモにも見える体の中ほどで、目を二つ真っ赤に光らせているそいつは、俺達を見つけたと思った瞬間、上空から急降下してきた。

「あぶね！」

すぐさま横に飛んで回避すると、暴走体が地面を揺らしながらコンクリートに身を沈めていた。爆風が俺の髪の毛を全て逆立たせるほどにぶつかってきて、思わず尻餅をつく。

怖い。こいつって確か、なのはが最初に倒す敵のはず。それがこんなにおっかない奴だったなんて。

なのは？

「そ、そうだ、なのはは！？」

見渡すと、電柱の影でユーノを抱えたままの彼女が、ユーノから小さくて赤い宝玉を差し出されているところだった。

それはまさしく、が望んだ展開。

高町なのはが、レイジングハートを受け取って魔法少女に変身する瞬間だ。

「神様！」

「何ですか！？」

「録画とか出来るか！？」

「無理！」

実に惜しい。魔法少女の変身シーンなんてそうそう見れるものでもないのに。

しかし、そんなやましいことを考えている場合ではない。

なのはがとうとう魔法少女に変身するのだから、俺ももういいだろう。

原作キャラの誰もが持ち得ない、唯一無二の絶対能力。全てを蹂躪する無敵の魔法。

転生オリ主、碎城院聖刃のチート能力。

それを解き放つ時が来た。

「ついに」

そう、ついに。

「ついにこの時が来たか」

それっぽいポーズをとってみた。たぶん要らないんだろうけれど、カッコイイだろうし。

ユーノに教えられるまま、変身の呪文を唱えるなのは。そんな彼女の隣で、俺は同じ呪文を口にした。

——我、使命を受けし者也——

瞼を閉じ、心を澄まし、全身の血流を感じ取るように集中する。

——契約のもと、その力を解き放て——

祈れ。抱いた願いを叶えるために。

覚ませ。眠った力を呼び起こせ。

唱え。魂より囁く、魔法の言葉。

——風は空に、星は天に——

「ひろしさん！」

——そして、不屈の心は………この胸に！——

見ている。

これが転生オリ主、碎城院聖刃の、魔法の力！

——この手に魔法を！ セットアップ！——

唱え終えたのと同時に、とてつもない力の波が俺の全身を打った。

「うおおおおおおおおおっ！」

風ではない。熱とも違う。しかし、爽やかで温かい。

そんな力が、桜色の閃光となって俺の。

「お、俺の………隣から！」

俺にはなんの変化も訪れていなかった。

桜色の魔力は柱となって、なのはの全身からほとばしっていた。

しかし、俺には何も起きていない。

もう一度言う。何も起きていない。

「か、神様！」

「説明しなくちゃと思っていたんですが！ ひろしさんには……
…魔力がありません！」

「なん……だと………」

なんか知らんが、ものすごく裏切られた気分だった。

俺は一步も動けなくなっていて、その場で立ち尽くしてしまった。

「あぶない！ 逃げて！」

「……………へ？」

声に反応して振り向くと、そこには魔法陣のシールドを開いた魔導師姿のなのが、暴走体の攻撃から俺を助けてくれている姿があった。

これが、魔法の力。

すごく羨ましかった。

「ひろしさん！ ここはもう退きましよう！」

その言葉を聞いて、少しだけ我に帰ることが出来た。
と言うより、湧き起こる怒りを思い出したみたいな。

「ば……ばかやろう！ ここまできて退けるか！ 大体なんで俺に魔力がないんだよ!？」

「最初に説明しようとしたんですけど、すみません！ あの……………
…すみません！」

「なに謝ってるんだよお！ くそおっ！」

「でも！ 一応原作とは違う展開になってるでしょ!？」

「だからってこれじゃあ、エンドロールで『襲われる少年』くらいにしか名前付かねえよ！」

これじゃ俺があまりにも哀れだ。

ふざけるな。こんなんで原作介入とか、情けなくて仕方が無い。

ジュエルシードの封印呪文だってちゃんと考えていたのに。

ちくしょう。

そんなことを考えていると、俺の苦悩なんかに気付くことも無く、
なのはとユーノが物語を進めていた。

「心を澄ませて。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずです」
ユーノがそう言っているのを聞いた。

その台詞が出てきたってことは、まさにこれからなのはが、暴走するジュエルシードを封印しようとしているところじゃないか。

俺の、俺の役目だと思っていたのに！

「くそう！」

「ひろしさん！ まだチャンスはありますから！ 退きましょう！」

「駄目だ！　せめて……せめて呪文を唱えるだけでも一緒に！」

俺となのはの方向に、暴走体が突っ込んできた。

そして、なのはが魔法の杖、レイジングハートを構える。

封印魔法、発動の合図。

よし、行くぞ。俺の考えたワードを付け足して、一緒に封印しよう！

「リリカル……マジカル………」

「ポテンシャルウ！」

次の瞬間、レイジングハートから放たれた光が暴走体を捕らえると、暴走体は苦しそうな呻き声を上げながら徐々にその体を消滅させていった。

この後、高町なのはは転がるジュエルシードを回収し、ユーノと共に家に戻っていくはず。

しかし、俺は何故だか、これ以上彼女の側にいるのが辛くなった。だから、なのはが初めての封印をこなしている最中に走り出した。

疲れも忘れたまま随分と走ってきた時、後ろから神様が言った。

「あの……リリカル、マジカル、ポテンシャルって」

「うるせえ！　俺だって……俺だって魔法が使いたかったんだから！　別に呪文くらい一緒にいいだろうがよ！」

酷く凹んだ夜だ。魔法は使えないし。高町家に居候という計画ど

ころか、原作介入すらまともに出来なかったし。それに、お腹が空いた。

「俺だって、俺だって魔法が使いたかったんだもん」

「……………おうち、帰りましようか？」

「……………うん」

その後、俺は父さんと母さんの待つ家に戻り、こっぴどく叱られた。

でもその後で出された晩御飯の温かさに、「転生先の家族もいいもんだ」としみじみ思ったりした。

See you next time.

NEXT3…僕らは皆、生きている

『魔法少女リリカルなのは』は、平凡な小学三年生だった少女から始まる物語だ。

きっかけは、異世界の住人であるユーノ・スクライアが地球にやって来たこと。彼は、自身で発掘した古代遺物^{ロストロギア}である、“ジュエルシード”という名の願いを叶える石がこの世界に飛散してしまったことに責任を感じて、石の回収をしに来た。

そして、回収作業中に危機的状况に見舞われた彼を助けたのが、物語の主人公である高町なのは。

ユーノは彼女に魔法の力を授け、なのはが魔法少女に変身することで危機は去る。

そしてなのはもまた、ユーノのジュエルシード集めを手伝っていくことにした。

物語が大きく動きを見せるのは、ジュエルシード集めが中盤に差し掛かったころ。ジュエルシードを集めているのが、なのは達だけではないことが判明するのだ。

そう、なのはとユーノに対抗する魔法少女、フェイト・テスタロッサの登場である。

フェイトは、ジュエルシードを必要とする母の命令に従って、この世界にやって来た。

そして衝突を繰り返すなのはとフェイトの間に、時空管理局という組織までもが介入してくる。

時空管理局は、幾つも存在する次元世界を文字通り管理しているという巨大組織。ちなみに地球も、そんな次元世界の一つ。

ジュエルシードによって引き起こされる、次元世界の危機を止めたいと言う管理局。

狂気に塗れてしまった母のため、傷つきながらもジュエルシードを集めるフェイト。

ユーノのため、自分のため、平穩のため。そして、瞳に悲しい光を宿したフェイトのために奮闘するなのは。

これは、彼女達の成長と絆と勇氣の物語なのだ。

「……………以上が、『魔法少女リリカルなのは』という物語のあらすじだ」

語り終えた俺は腕を組み、ゆっくりと目を閉じて余韻に浸っていた。あらすじを話してから改めて思ったが、これ、やっぱり介入したいなあ。

そんな俺の前には、黒い学ランに身を包んだ同年代の男二人が、俺と向かい合ったままじっと耳を傾けていた。

「で？ そのリリカルなんとかってのに、お前が関わってるわけ？」

「その通り！俺はこの物語に介入し、本来は歩むことの無かった道へ物語を誘うためにやって来た転生オリ主、碎城院聖刃なのだ」

一つの机を囲み、俺達はそれぞれの給食を箸でつまんだ。

なのはとのファーストコンタクトが散々な結果に終わってしまった昨日。色々と考えてみた結果、少し落ち着いてみようということになったのだ。とりあえず、介入行動を起こす時以外はおとなしく日常生活を営んでいくことを決めた。

まあ、家出の件で両親にコテンパンに、ボロクソに、メツタメタに怒られたのが堪えた、というのも理由の一つだが。

そういうわけで、俺は学校にやって来ていた。

校門を潜ったときは、見覚えの無い奴等から挨拶をされて少し困惑した。俺自身には転生してからの意識しかないが、この体にはリリカルなのはの世界に組み込まれるための、十五年間の人生設定があるから仕方が無い。

正直な話、一時限目から四時限目までの授業はやったことがあるようなないような、中学生ってこんな難しいことやってたっけ？と、首を傾げたくなる内容だった。

それにしても昼飯が給食かよ。なのは達は屋上でお弁当とか優雅

な学校生活を送っているのに。俺のいる中学って公立なんだな。何
度も思うが、俺はなのは達と同じ学校の同級生にしてほしかったん
だよなあ。

教室の片隅に佇んでいる神様を睨んでみた。すると彼は、慌てた
様子で視線を逸らして口笛を吹き出す。

「サイジョウインセイバって、お前の名前？」

「そうだ。これからはそう呼んでくれ、絶対にな！」

「あれか？ 難しい苗字とか書けない名前に憧れてるみたいなもの
か？ まあ気持ちは分かるけどな」

そう言ったのは、友人の小島だ。こいつも普通の名前だよな。

「あー俺もちょっと憧れるなー」

と、同意したのは淀橋だ。こいつはちょっと珍しいな。

「違うっつーの。憧れとかじゃなくて、本来はそういうもんなんだ
よ。頼むぞ、ちゃんと俺のことはセイバって呼んでくれよ？」

転生オリ主って言ったたら、やっぱりかっこよくてインパクトある
名前ってのが定番なんだよ。

神様が、俺を在り来たりな少年として転生させてしまった以上は
仕方が無い。呼ばれたい名前、辛い過去設定、チート能力の有無。
そういった俺の叶わなかった願望は、もう後付け設定としてこれか
ら徐々に修正していくしかない。

名前はこれから呼ばせればいいし、過去設定は捏造出来るし、チ
ート能力に関しては少しだけ考えがある。

勝負はこれからだ。俺は、自分の理想を自分の力で作り上げてい
くことにした。

そうだ、諦めてたまるか。

昨日のことで懲りるわけなどない。こうなったら、何が何でも原
作介入を果たしてやる。

「…………でも参ったよなあ。転生オリ主ともあろう俺の敵が、ま
さか原作とは」

「あ、ところで山田さあ」

「その名前で呼ぶなっつーの！」
先はまだまだ長そうだ。

学校の授業が終わると、俺はすぐに教室を出た。俺という人物は、幸いなことに部活動はしていないし、仮にしていたとしても受験生であるから引退が近かっただろう。

ということで、気兼ねなく海鳴市散策が出来るわけだ。

「神様、俺が今どこに向かっているか、分かるか？」

「えーっと、神社ですかね？ ほら、原作でジュエルシードに取り込まれた子犬となのはが戦うでしょう？」

「ピンポーン。今日こそは、なのはに俺の存在を認識させる」

「どうやるんですか？」

計画としてはこうだ。

まず原作を振り返ってみると、子犬と飼い主のお姉さんが神社に散歩に来た際、暴走したジュエルシードが子犬を取り込んだらしい描写であった。

それが分かっているならば話は簡単。

俺が先回りして、子犬が取り込まれる前にジュエルシードを回収してしまえばいいんだ。

そして、神社にはなのはとユーノがやって来る。当然ジュエルシードを手にした俺と対面。

あなたは、誰？ その手にあるものは？

君の探し物はこの石だろう。危ないところだったよ。もう少しで暴走しそうだった。

ジュエルシードを知ってるの？ あなたは一体……。

俺の名前か………。碎城院聖刃だ。ニッコリ。
惚れました。

「っっておっしやああああっ！ これで決まったああああああっ！」

「大丈夫なんですか!？ 本当にそれで上手くいくんですか!？」
そうと決まればさっそく神社へ向かおう。

今頃、学校から帰ったなのは、ユーノと手分けしながら町中を走り回ってジュエルシード探しをしているはず。

そして気が付くはず。神社にあるジュエルシードを察知して、駆けつけてくるんだ。

先回りをするのは簡単だ。何故なら、俺は転生オリ主だから。

原作キャラであるなのは達と、転生者である俺との明確な違いは何か。

それは原作知識の有無。この先何が起こるのかを把握している俺は、未来が見えているのも同然のような存在。

そう、俺の持っているこの原作知識こそが、俺のチート能力と言える。

もう仕方が無いから、そういうことにしておこう。

あとは舞台となるこの町を、如何にして効率よく立ち回るかだけの問題。

大丈夫、今度こそ上手くいく。

「よし、神様！ 神社へ向かうぞ！」

俺と神様は、神社へ向かおうと駆け出した。

しかし、十数メートルも進まないうちに俺は、自分の視界に映ったものに注意を奪われて、足を止めてしまった。

「ん？ ひろしさん、どうしました？」

「なんでだ？」

「はい？」

見てしまったのだ。俺の目は、決して見過ごせないものを見てしまった。

しかし、何でこんなところで？

町の中を行き交う人ごみの中だったから、一瞬、見間違いかとも思った。何故なら、その人物の特徴的な部分が隠されていたから。

しかし、その考えもすぐに拭い去った。

“ あいつら ”だ。俺の直感が、頭の中にある遠くの記憶が、そう言っている。

一般人と同じ服装を身に纏い、帽子を深く被って頭を隠してはいけるけれど、間違いない。

俺は体の向きを変えて再び走りだした。後ろには、慌てた様子で追いかけてくる神様の姿。

向こうは気が付いていないのか、こちらを振り向くことも無く歩き続けていたので、すぐに追いつけた。

突発的に駆け出してきた勢いのまま、俺は二人の目の前に立ち塞がった。

「待て！」

「……………あんたは？」

目の前にいるのは二人の少女。小さな鼻も、瞳の色も、二人の幼い表情は瓜二つ。互いの体で違うところと言えば、髪長さぐらいなもの。

「リーゼアリアと、リーゼロッテだな？」

俺の言葉を聞いた二人の表情には、隠し切れない動揺が窺えた。やっぱり、間違いない。

この二人は、原作アニメ第二期『魔法少女リリカルなのはA's』に登場する、ギル・グレアム提督の使い魔であるリーゼ姉妹だ。

深く被った帽子の下には猫耳を隠しているはず。その帽子を取って確認してみるべきだろうか。

考えを巡らせていると、ロングヘアーの少女、リーゼアリアが言った。

「誰かと間違えているんじゃないか？ 私達はそのような名前ではないのだが」

「とぼけるな。だったらその帽子を取ってみろ」

こいつらは原作二期に登場するキャラクター達。時空管理局員でありながら、二期で起こる事件の原因を作ったギル・グレアムの共謀者。

なぜこのタイミングで二人に出会うことになったんだ？

とにかく、ここで見過ごすわけにはいかない。

神様が言っていた。悲しい展開を救ってほしいと。ならば、こいつらの謀を食い止めるのも、俺の役目ではないのか。

「初対面で人違いの上に、いきなり帽子を取れとは失礼な奴だなあ。何者だ？」

「俺は、碎城院聖刃だ」

今度はショートヘアのリーゼロッテが言う。目付きは、素体となった猫のごとく鋭い。

「悪いが、私達は陽射しが苦手なんだ。帽子は取れない」

「だったら尻尾を出してみせてもいいぞ。その服の下に隠しているんだろう？」

俺は二人の穿いているミニスカートを指差した。

ミニスカートを。

その生足覗かせるミニスカートを。

「ん？ この下のか？」

「ははあ、こんな白昼の中で、私達にスカートを脱げと言うのか？ リーゼ姉妹の生足ミニスカート。

良い。実際に目の前にしてみてもすごく良い。

それを脱ぐ、だと？

「ひろしさん！ 気を確かに！」

脱ぐのか！？ そんなことをしたら人の目というものが！

しかし、ここでこいつ等を見逃すわけにはいかない。

そのためにも、こいつ等がリーゼ姉妹である確かな証拠を掴まなくてはならない。

どうしたらいい。どうしたらいいんだ。

「それとも——」

ロッテが意地悪く微笑んだ。

その笑みには明らかな悪意が込められていた。こいつらは使い魔だ。元が動物なだけあって、野生的な面は人間よりも色濃いのだろ

う。それはそれで納得のいく話。

そんな彼女が俺に向けた視線は、まさに狩る者の目。本当ならば恐怖するべき目。

それなのに。

俺は何かを期待していた。

彼女の「それとも」という言葉の先にある、もしかしたら情欲を駆り立てるかも知れない選択肢に、大きな期待を寄せていた。

来い。その先は何だ。

来い。早く教えてくれ。

来い。俺に何をさせるつもりだ。

「————お前が直接確かめてみるか？」

き、来た！　そういうのを待っていた！

「何だったら、お前が自分の手で脱がして確かめてもいいんだぞ？」
そうだろう！

転生オリ主なんだし、ハーレムとかセクシーハプニングとか。

エ、エロ展開とかあってもいいだろう！

主に原作キャラとの絡みで！

「ひろしさん！　駄目ですよ！」

「黙れ神様！　ここでこいつらを逃がすわけにはいかないんだ！」

「でも！　絶対に罠ですよ！」

「確かに罠かも知れない！　しかし男って生き物には、罠だと解っているても、あえてその中に飛び込んでいかなきゃならない場面ってのがあるんだ！」

「こ、今回は明らかにそんな場面じゃない！」

「さっきからお前、誰と喋ってるんだ？　神様とか何とか、危ない奴だなあ」

神様が何と言おうと、俺は罠に飛び込んでいく。

いいぜ、覚悟は出来ている。

やってやる。

俺は、転生オリ主。

そして俺は。

「俺は……男だあ！」

爪先で地面を蹴り、リーゼロッテの方に向かってジャンプした俺は、両腕を思いっきり伸ばして彼女の腰に手をやった。

その瞬間。

「きゃああああああああっ！」

「え？」

「この人が！ この人が突然私のお尻をー！」

「えええええ！？」

ロッテが、彼女らしくも無い声を出して悲鳴を響かせると、周辺にいた人々が俺の方を向いた。

ひょっとして俺の現状って、非常にアレなのでは？

「そこの、砕城院聖刃という男が私のお尻をー！」

こいつ、名前までわざわざ叫びやがって！

「神様！ 一旦退くぞ！」

俺は一目散に駆け出すと、リーゼ姉妹を振り返ることもしないまま、すぐに別の路地へと入って逃げた。

たいした距離も走っていないのに、汗が噴き出してくる。顔がやたらと熱くて、心臓が爆発しそうなくらいに大きく脈打っていた。

「やはり罠だったか！」

「目に見えてたじゃないですか！ ……………それにしても、このままリーゼ姉妹は放っておくんですか？」

神様が不安そうに尋ねてきた。俺同様に原作知識のある彼も、やはり二人のことは気がかりみたいだ。

「ああ。とりあえず原作一期には、奴等が介入する余地は無い。まだ当分の間は放っておいて大丈夫だろう」

「そんなに言い切るなら、最初っから手え出さなきゃ良かったのに！」

「お尻、柔らかかったなあ」

今日は手を洗うのを止めよう。

俺と神様は、進路を神社に変えたまま、ひたすらに走り続けた。

神社に辿り着いた俺と神様。

俺は肩を大きく上下させて息を切らしながら、石段を上りきって周囲を見渡した。

お姉さんと子犬は、まだやって来ていないようだ。その代わり、随分とあっけなく見つけてしまった。

「ひろしさん、ほら。ジュエルシードです」

鳥居の脇に、草木に隠れるようにして転がっているのは、蒼い光を放つ魔法の石だった。

「こんなところに落ちてたんじゃあ、子犬も拾っちゃうよなあ」

などと言いつつ、俺はジュエルシードを拾い上げた。

まあ、何はともあれ目的は達成した。子犬を取り込んで暴走するよりも早く、俺が回収出来たのだ。あとはなのはとユーノが、このジュエルシードを察知して神社にやって来るのを待つだけ。

そうすれば、俺はジュエルシードを手にした謎の少年として、堂々と原作介入が出来るというもの。

途中、トラブルに見舞われることもあったが、何だか今日は順調じゃないか。

神様の方を向くと、彼も小さく頷きながら「やりましたね!」と言っている。

「やっと原作介入が出来るぜ。まあ、後は俺の辛い過去を考えとかないとな」

「そんなに辛い過去設定は必要ですか? 別に無いなら無いでも」「アホか。主人公と言ったら辛い過去は王道だろう。まあ、なのは達が来るまでの間で適当に考えとくさ」

そう言って俺は、ジュエルシードを覗き込んだ。早くなのはとユーノ、来ないかなあ。

ん？

「あれ、神様？」

「はい？」

「このジュエルシード、暴走しないとなのは達に察知されないんじゃないね？」

「あ」

冷たい風が、俺達の足元を吹き抜けていった。

そうだよ。原作では、なのはとユーノはジュエルシードの暴走を察知して駆けつけるんだよ。

ジュエルシードがおとなしくしていたら、ここに来るわけないじゃん。

まずいな。だからと言って故意に暴走させるのは何だか気が退ける。

「参ったなあ。なあ神様、どうしたらいいんだ？」

俺はそう言いながら、石段に腰掛けた。

「そんな、僕だってどうしたらいいのかなんて……………」

すると、石段を誰かが上ってきた。

それはスパッツとジャージ姿の女性。頭にはヘアバンドをつけていて、ランニングシューズを履いたその姿には、見覚えがあった。

確か、原作で子犬を連れて散歩していたお姉さん。

「神様にお願いごとをしているのかな？ 受験生みたいだね」

「えっと……………」

「どうしたらいいんだって、声が聞こえてきたからさ」

原作では台詞が無いキャラクターだったから印象も薄かったけれど、声を聞いてみると大人っぽい人だなと思った。

ってか綺麗だな、おい。

ちらりと神様を見ると、彼もどう対処したらいいのかわからずにおどおどしていた。

まあ、ジュエルシードは既に俺が持っているし、なのは達がここに来ないのなら、後日会えばいいだけだ。ここは普通に接しておく

べきだろうな。

「ま、まあ、受験前の神頼みってやつですよ」

「そっか。頑張ってたね」

そう言えばさっき、リーゼ姉妹に会った時もあったんだけど、改めて俺は転生してきたんだということを思い知った。

テレビアニメで放映されていた部分ってのは、視聴者からすれば確かにその作品の世界そのものなんだけど、こうしてアニメの世界に入ってみると、画面には映らない奥深さを感じ取ることになる。テレビ画面に放映されていないところでも、やっぱりこの世界には生きる人達がいて、生活をしていて、営みがあるんだ。

だからこのお姉さんだって、放送時には台詞なんてなかったのにこうして俺に話し掛けてくるし、リーゼ姉妹も原作一期の時から存在しているんだ。

映っていないからと言って、無いわけではない。

考えてみたら当たり前のことなのかも知れないけれど、それに気が付くことが出来て、何だか物語の深さを垣間見た気がした。

「でも、神様にお願ひし終えたら、早くおうちに帰って勉強したほうがいいんじゃない？」

「え、ええ。そうですよね」

もうちょっと、この人と話をしたいな。

下心とかじゃなくて、俺がこの世界にやって来たという事実を噛み締めたいと思った。

「よ、よければお姉さんのお名前が知りたいっす」

「あら、なあに？ ナンパ？」

お姉さんが笑っていた。

「そういう時は、自分から名乗ってくれると嬉しいかな？」

「あ、すいません。俺は碎城院せい」

その時、石段の下を通りかかったパトカーが、拡声器で何かを報じているのが聞こえてきた。

『この付近で痴漢被害が発生しております。サイジヨウインセイバ

と言う名前にお心当たりのある方は、ご連絡をお願いいたします』
おのれリーゼ姉妹。俺の名前を明かしやがって。

「俺、山田ひろしって言います！」
神様が呆然として口を開け放した。

「良い名前ね」

そんな神様を無視して俺とお姉さんが一緒に笑っていると、突然、足元から大きな鳴き声が聞こえて驚いた。

お姉さんの子犬が吼えたみたいだ。近くで見ると、もこもこしていて可愛らしい。

俺は身を屈めて撫でていると、子犬は尻尾を振って手を舐めてきた。

本当に可愛いな。こいつがジュエルシードに取り込まれると、あんな凶暴な姿になるのか。

俺は原作を思いながら、手の平を差し出した。

「よしよしよし。お手、お手をしてごらん？」

そう言うと、子犬は右足を持ち上げて俺の手の平に乗せた。

よしよし、賢い賢い。

ん？

「ひ、ひろしさん！」

俺が差し出した手の平には、さっき拾ったジュエルシードが乗ったままだった。

ひよっとすると、これは非常にアレなのでは？

子犬の体はジュエルシードと共に光を放ち始めた。

「あ、あれ？」

そして次の瞬間、体を真っ黒に染め上げて子牛ほどの大きさにまでなった子犬が目の前に現れた。ってか子犬じゃねえ。背中や頭から生える角のような突起は禍々しく、四つの眼は俺とお姉さんを見睨み、胴より長い尾が石畳を度々打つ。

「きゃあああっ！」

お姉さんが、原作通りに子犬の変わり果てた姿を見て気絶してし

まった。

「ひろしさん！ 逃げましょう！」

「しかし、お姉さんが！」

「原作通りになのはが来るんだから、大丈夫ですよ！」

そうだ。原作では、なのはがやって来てこの犬の暴走を止めて、お姉さんと子犬は夢を見ていたとでも思って無事帰る。

だが、だからと言ってここで、俺だけ逃げるのか？

さっき思い知ったじゃないか。

この世界にだって、テレビアニメでは分からない奥行きがあることを。

この世界にも人々が生きていることを。

この世界だって間違いなく営みがあることを。

そんな中において、この場面で何もせず逃げるのか？

「ちょ」

そうだ。

「ちょっとそれは出来ないだろ！」

「ひろしさん！？」

俺はお姉さんを庇うようにして、犬の前に立ち塞がった。

何が出来る？ 今の俺に何が出来る？

魔力も無い。体力も無い。

そんな俺に、何が出来る？

頭をフル回転させていると、突然目の前に何かが迫ってきているのが見えた。

なんだ、これ？

鞭？ 違う、犬の尻尾だ。

それが？

何？

次の瞬間、視界が真っ暗になって、意識も遠のいていった。

神様が名前を叫ぶ声は聞いた気がするけれど、正直そんなことはどうでもいい。余裕がなかった。

とりあえず、メガネが壊れたなあ、ということだけは分かった。

そして、気が付くと俺は夕暮れの神社の石畳に寝転がったまま、誰かに肩を揺すられていた。

「ひろし君、起きて」

「はれ？」

体を起き上がらせると、顔面がひりひりと痛むことに気が付いた。

「顔、大丈夫？」

「ええ、まあ」

俺、どうなったんだっけ？

「何だか、二人してここで寝ちゃってみたい。転んだのかな？」

「寝てた？ 転んだ？」

「不思議だね。君が神様に無茶なお願いでもしたんでしょう？ バチがあたったんじゃない？」

そう言うとお姉さんが笑いながら立ち上がった。

「すっかり陽が暮れちゃったし、もう帰りましょう」

「は、はい」

手を貸してもらい、俺は立ち上がった。

足元にはあの子犬が、何食わぬ顔で擦り寄ってきていた。

もう一度周囲を見渡して、神様の方に視線を向ける。

すると、彼は俺の姿を見てから安心したように微笑んで、そつと言った。

「原作どおり、なのはとユーノが来て、ジュエルシードを回収していきました」

「……………ってことは、また介入失敗か」

「何か言った？」

お姉さんに尋ねられたので、俺は慌てて首を横に振った。

まあ、今回は悔しいという気持ちよりも、ほっとした気持ちが大き

きかった。

何故なら、奥行きがあることを知った世界の中で、そこで知り合ったお姉さんが無事でいてくれたのだから。

原作どおりなら、助かることは解っていたはずだ。

でも、そういう視聴者からの視点じゃなくて、同じ世界にいる者としての視点から湧き起こる感情が、俺の悔しさを少し癒してくれたみたいだ。

仕方ない。原作介入はまた次回だな。

俺はお姉さんと並んで、石段を降りていった。

See you next time.

NEXT 4：早過ぎる登場

ベッドに体を横たえて、俺は天井をじっと見つめていた。日光を遮るカーテンの隙間から光が漏れ、薄暗い中に真っ直ぐな閃が描かれている俺の部屋。外から微かに伝わる雑音以外、耳に届くものは無い。

静寂に満たされた空間の中、俺はそっと自分の右腕を天井に向けて伸ばし、手の平を翳してみる。

目の前にあるのは俺自身の腕。それは間違いなく自分の一部であるはずなのに、何故か違うものに見えた。

おぞましくて、とても邪悪で、酷く冷たい手。

そんな自分の手に、力に、俺は問いかけた。

この手は一体何を掴むことが出来るのだろう。

この手は一体誰を救うことが出来るのだろう。

この手は一体。

「…………俺に、こんな能力があるだなんて」

自然と笑みがこぼれる。

それは明らかに自嘲の笑いだった。

苦しかった。憎悪に塗れた俺の思いとは裏腹に、この能力は大切な

な“あいつ”を救う力となる。

捨て去りたいという願いと、守ってみせるといふ誓いが俺の中で激しくぶつかり合い、心を削る。

一体どうしたらいいのか。そんなことを考えることも苦痛。本当に苦しくて、痛くて。

今なら誰もいない。ここにいるのはたった一人。俺だけ。

そう思った瞬間、抑えきれなくなった感情が静かに溢れた。

雫は、きらきらと光る通り道を示しながら、そっと枕を濡らしたのだ。

今だけ、少しだけ、俺は安らげる。

「何で泣いているんですか？」

「……………練習」

部屋の片隅にひっそりと立っていた神様が質問してきたので、俺はぽつりと呟いた。

「練習って、なんの？」

「シリアスシーンの」

神様が大きくため息をついている。なんだその反応は。

俺は上半身を起こし上がらせると、神様の方を向いて訊いた。

「どうだった？　今のは結構ぐつときたろ？」

「いや、その……………能力って言ってもひろしさんには」

「解ってるよ！　俺に能力が無いってのはもう知ってるよ！　でも

一応さ！　いざって時に必要になるかも知れないじゃん！」

「何ですか、そのいざって時というのは」

最初は部屋の中で原作介入の方法を考えていたのだが、途中、自分の背負う辛い過去設定を練りこむことに没頭し始めた。そうしたらだんだん雰囲気が出てきたので、孤独に耐えながら葛藤する自分というものを練習することにしたのだった。

それにしても今のは良い出来だったな。涙が出るくらいまで入り込めるなんて、俺って役者でもやっていけるんじゃないか？

しかし、だからと言って喜んでばかりもいられない。

こういった努力も俺がきちんと原作介入を果たさなければ、結局無駄な努力に終わってしまうのだ。いくら宿命に泣く孤高の戦士になりきれても、リリカルなのはの物語に関わらなければ没設定で終わってしまうのだから。

「やっぱり、なのは達に関わるためのきっかけが必要か」

「でも、どうやって関わるんですか？」

そこだよなあ。一体どこに原作介入の余地があると言うのか。

リリカルなのはの世界に転生して初日。なのはが初めて魔法少女になった時、魔力が無い俺は、なのはの姿に羨望の眼差しを向けることしか出来なかった。

翌日の神社だってそうだ。なのはよりも先にジュエルシードを見つけておいたにも関わらず、ちよつとした手違いから展開はやはり原作どおりに。あれは大きなチャンスだったと思っていたので、非常に悔やまれる。

だが、実はその後も失敗の連続だった。なのは達がプールに行った時も、夜の学校でひっそりで行われていたジュエルシードの封印劇も、結局俺は介入することが出来なかった。

極めつけは、海鳴市を襲った巨大樹木の回。原作の第三話に相当する話。ジュエルシードの暴走によって人の願いが形を成し、巨木となって町を襲った事件の時だ。なのはが自分の甘さと油断を悔いるという、物語としても一つの節目であった回なのに。

そんな大事な時だと言うのに、俺は一切関わることが出来なかった。何故ならその日、連日の介入行動によって疲弊しきっていた俺は、うっかり居眠りをしてしまっていたのだ。

どうして起こさなかったのかと神様に問いたとしても、「あれほど大きな被害が出てしまうようでは、ひろしさんの身が危ない思ってたから」と、言い訳をするばかり。

まったく、こんなんじゃあ本当に、俺が介入するよりも先に物語が終わっちゃうよ。

「仕方ない、ちよつと町に出てみるか」

「出てどうするんですか？」

神様が不思議そうに訊いてきた。

俺はクローゼットから適当に私服を取り出して、着替えながら返事をした。

「リーゼ姉妹と会ったみたいにな、何か介入のきっかけを得ることが出来るかもしれないだろ？」

「……………またリーゼ姉妹に見つかったらどうするんですか？」

着替えの手を一瞬だけ止めて、俺は考えた。確かにまた痴漢扱いされてしまったのは困るな。

「ま、まあ今度こそ気をつけるさ」

「大丈夫なんでしょうね？」

ものすごく疑わしいような視線を向ける神様。俺はその目に気が付かないフリをしながら、着替えを済ませた。

それでもまだ見てくるので、違う話題を振ることにした。

「そ、それにしてもあの時、リーゼ姉妹って何してたんだろ？」

そう言うと、神様はようやく視線を天井に逸らしてから言った。

「んー。たぶん、八神はやての様子を監視してたとかじゃないですか？」

「はやての？ だってはやての登場は二期からだぞ？」

八神はやてというのは、アニメ第二期『魔法少女リリカルなのはA's』から登場する主要登場人物だ。

『闇の書』と呼ばれるデバイスが巻き起こす事件において、最も重要なポジションにいる車椅子の少女。俺の会ったリーゼ姉妹やその主も、時空管理局と共に動くのは達も、新キャラクターとして登場する四人の守護騎士達も、全てははやてを中心として動くことになる。

そんな八神はやてだが、現在の一期には全くもって関わらない人物。それなのに、リーゼ姉妹がこんな早くから動くというのはおかしくないのだろうか。

「二期からの登場と言っても、彼女達が一期終了まで存在しないわけではないですから。たとえアニメの世界と言っても、ここにはこの時間が存在します。きつとリーゼ姉妹は、二期における自分達の役割のため、既に準備を進めていたってことでしょ？」

「そうか。いくらアニメとは言え、こうしてこの世界が存在する以上は、テレビじゃ分からないところにもそれぞれの動きがあるってことか」

「そういうことです。こないだの神社の時にも思い知ったじゃないですか」

言われれば納得出来ない話ではないんだけどなあ。俺は腕を組みながら小さく唸り声を上げた。

まあ、そのうち慣れてくる感覚なのだろうか。

「ところで神様」

「はい？」

俺は気を取り直して、もう一つ訊いた。

「大事なことを確認しておきたいのだが」

「何でしょうか？」

「フェイトって、何時頃出るんだ？」

フェイト・テストロッサ。一期シリーズから登場する、リリカルなのはには欠かせないキャラクターの一人である。

なのはやユーノとは別に、ジュエルシードを集めるもう一人の魔法少女として登場する彼女は、実に悲しい運命を背負った美少女だ。自身の研究のためにジュエルシードを必要とするプレシア・テストロッサに命じられ、酷い仕打ちを受けながらも健気に頑張る彼女。リリカルなのは第一期は、ある意味でフェイトが主役とも言える物語である。

そう、フェイトは悲しい運命の元に生まれた少女だ。

それはつまり、俺が救うべき存在ではないか。神様にも言われた通り、悲しい運命を変えて救うのだとすれば、フェイトが思い浮かぶ。

そんなフェイトは、原作の第四話で初登場。なのはと敵対する立場で現れる。

俺が原作介入を果たすのであれば、必然的にフェイトとも関わることになる。だからなのはとフェイトが一緒にいる場面こそ、介入するにもってこいの場面なのだ。

「えっとお、確かなのはがすすかの家でお茶会をする回に登場だからあ……………」

神様の視線が宙を泳ぐ。

「いつだ？」

「あ」

「何だよ？」

「……………うっかりしました。今日です」

「今日って……またそういうタイミングかよ！」

初めて介入行動を起こした時もそんなタイミングだったな。いきなり当日ってのは慌しいから止めてほしいものだ。

とにかく、今はつきりしているのは、もたもたしていられないということだ。

「ごめんなさい！」

「謝るのはいいから、すぐにすずかの家へ向かうぞ！」

俺は急いで自分の部屋を出た。

玄関へと駆け足で向かい、靴を履いて外に飛び出ると、後ろから神様が慌てて言ってきた。

「す、すずかの家に行くんですか!？」

「そりゃあそうだろう!　じゃなきゃフェイトに会えない!」

「だって、お茶会に呼ばれるどころか、すずかとの接点なんて何もないのにどうやって!？」

「口実なんて何でもいいんだよ!　入っちゃえばこっちのもんだったの!」

「そ、そんな無茶苦茶な!」

何が無茶苦茶なもんか。

俺は転生オリ主だぞ。主人公って言うのは、ぼーっと突っ立ってたって事件に巻き込まれるものだど相場が決まってるんだよ。

よーし、待っているよ。フェイトを救うのはこの俺だ。

熱い想いを胸に抱き、俺は勢いよく玄関を出ていった。

高町なのはの親友の一人、月村すずか。

彼女の実家は所謂超大金持ちであり、なのはの家が何個も入ってしまうような敷地の中に建てられた欧州風建築の家に住んでいる。その家には月村家に仕えるメイドさんだっている。

まさに、絵に描いたようなお嬢様なのだ。

今日は、高町なのはとアリサ・バニングスがすずかの家でお茶会を開いている日。

そして、発動したジュエルシードに導かれてフェイトがやってくる日。

つまり、なのはとフェイトが初めての邂逅を果たす日。

これは介入しないわけにはいかない。介入しなくてはいけないのだ。

「……………ひろしさん？」

と、思っていたのだが。

「……………すずかの家って、何処だ？」

勇んで出てきたのはいいが、肝心なことを俺は知らなかった。

何てことだ。そりゃあ、各キャラクターの住んでいる住所なんてアニメ本編じゃ語るわけないよな。放送された部分に関しては丸分かりだが、それ以外のこととなるとさっぱり分からん。原作知識を持つところそが俺のチート能力だなんて思っていたけれど、それだけだとやはり苦しいな。

「あーあ、空でも飛べたら楽に探せるのになあ」

ちらりと神様を見ると、彼は慌てて視線を逸らしながら鼻歌を歌い始めた。

それにしても参ったな。この後、どう動けばなのは達に追いつけるんだろう。

「アニメだと、月村家に向かうのはと恭也はバスに乗っていくんだよな」

「ってことは、結構遠いんですかね」

「かも知れな」

そこまで言いかけた時、俺は道路を走る一台のバスに視線を奪われた。

おそらく市内を走り回っているであろう巡回バス。その中ほどの座席に、前後に分かれて座っている二人の人影を見た。

「神様！ あれ！」

「え？ ……あっ！ ウソ！」

高町なのはと、兄の恭也だ。

そんなまさか、こんな偶然があるだろうか。今、俺と神様の目の前を走り去っていくバスに、なのは達が乗り込んでいる。

迷いなどしなかった。俺はすぐさま駆け出して、バスを懸命に追いかける。

次のバス停に先回りしなくては。乗り込むチャンスはその時だ。

「すごい偶然ですね！」

「偶然なもんか！ こういうのを神様のおしめぼしって言うんだ！」

「おぼしめしですね！」

このチャンスは絶対に逃すわけにはいかないぞ。

なかなか都合の良い展開になってきたじゃないか。オリ主なんだし、少しくらいこういうのもいいだろう。

ってか、今までが報われなさ過ぎるんだ。

道路を走るバスはなかなか止まらない。途中、赤信号にでも引っ掛かってくれればいいのだが、こういう時に限って信号がタイミン
グよく青になりやがる。

ちくしょう。なんて流れの良いバスなんだ。

「ひろしさん頑張って！ バス停が見えてきました！」

よっしゃあ！ チャンス！

俺は返事が出来ないほどに息を荒げながら、必死の形相で前を見つめ続けた。

やはり車と人間の足。互いの距離差は開いていくばかりで、決して縮まることはない。

「もうすぐです！ ファイトオツ！」

前から気になってたんだけど、神様って俺にぴったりついてくるんだよなあ。軽く走っている様子でも速度は俺と一緒にだし、でも疲れてないし、俺以外の人には見られないから自由だし。正直なところ、彼こそが一番のチート能力者なのではと思ってしまふ。

「がんばれ！　がんばれ！　ひ、ろ、し！」

うるさい。涼しい顔して言いやがる。

そうこうしている内にも、バス停がどんどん近づいてきた。

よし、ようやく追いつける！

しかし。

「……………なっ!？」

「ええ!？」

そのバス停には乗車待ちをしている人がいなかったことに加え、降車する人もいなかったのだろう。バスはそれほど速度を落とすこともなく、バス停をすんなりと通過していった。

「俺が走ってるのが見えてねえのかよ!」

間違いない。あのバスの運転手こそがオリ主の敵だ。悪意を感じる。

絶対許さん。追いついて乗り込んだら、すぐにでも説教してやるのに。

真後ろから砲撃魔法をぶちかましてやりたい気分には駆られながら、俺は尚も足を動かし続けた。しかし、だんだんと足の動きが鈍ってきて、腿の辺りの感覚が薄れてくる。

ちくしょう、止まれ！　止まれ！　止まれ！

「止まれええええええええっ!」

その時だった。

バスのブレーキランプが光るのを見た。

まさか、俺の叫びが届いたのか。

「ひろしさん！　信号が赤ですよ!」

「うおおおおっ!」

最後の力を振り絞り、俺は全速力で駆け出した。

バス通りからは海が近く、潮の香りが俺の疲れを少しだけ癒してくれるようだ。風向きも俺に味方してくれているみたいだし。

今度こそ。

そして俺は、遂にバスの乗降口に辿り着いた。

がくがくと震える膝を押さえつけながら、俺は乗降口のガラスを叩く。車内を覗き込めば、なのはと恭也が何事かこちらを見ていることにも気が付いた。

バスの運転手が俺の方を向く。

早く、早く開けてくれ。

しかし、運転手は白い手袋を嵌めた手で前方を指し示し、届かぬ声を発しながら口を動かしていた。

「……バス停から……乗ってください？」

信号が青になり、三百メートル先にあるバス停へ向けて、無情にもバスは発進した。

間違いない。あのバスの運転手こそが俺の宿敵だ。敵意を感じる。絶対許さん。俺に力があるのならば、今すぐにも断罪してやるのに。

真後ろから大型集束魔法をぶちかましてやりたい気分には駆られながら、俺はその場で呆然としてしまった。すると、先のバス停で停車していたバスも動き出して行ってしまった。

「ひろしさん……お、お疲れ様です」

「お、おお、おおおお………」

家の近くの公園。空はすっかりと夕暮れ模様だ。

「今日という日が、終わった………」

「切ないっすねえ」

ベンチに座りながら、砂場に残された遊具を見つめる俺。

もしかして俺って、原作介入をしてはいけないんだろうか。ここまで原作に拒絶されるとは。

今頃、なのははフェイトとの初バトルを終えて、傷ついた体を介抱されているところなのだろう。

「ひろしさん、次のなのはとフェイトのバトルなんですけど」

「いいよ、もう。俺、しばらく休もうかな」

そんなに原作に嫌われているなら、いつそのこともう、この世界で普通の人間として生活しちゃうかな。

普通に学校行つて、普通に進学して、普通に就職して、普通に年老いて。

彼女とか出来るかな。出来るといいなあ。

フェイトに似た子がいいなあ。金髪のツインテールで、綺麗な瞳に悲しさを抱いていて。

母親と上手くいってなくて。でも、俺が相談に乗ってあげて、その子のお母さんに頭下げて、交際を認めてもらって。

お互いに名前で呼び合っちゃったりして。

フェイトちゃん。

セイバくん。

結婚して。

子供も出来て。

とりあえず、嫁は九歳で。

「えっへへへえ」

「ひろしさん！ しっかり！」

「ぼおくうのなーまえをよーんーでえー」

神様に肩を揺さぶられながら、俺はベンチの上で妄言を漏らしていた。

そんな時だった。

「サイジヨウインセイバ、だね？」

え？ 誰だ、その名前で呼ぶのは？

俺は驚いていた。いきなり声を掛けられたことではない。俺が呼んでほしい名前前で呼んでくれたことに、動揺を隠せないでいた。神様も信じられないと言わんばかりの表情で、周囲を見渡した。

そして俺と神様の視線が、公園の入り口で止まる。

誰だ。誰かがこちらに歩いてくる。

「いきなり声を掛けてごめん。でも、君にはいくつか訊きたいこと

があるんだ」

夕日を背に受けているせいで、顔はまだよく見えない。しかし、俺は知っていた。神様だって気が付いている。

あの声。あの背丈。あの口調。

間違いない。

「ま、まさか」

「何でこのタイミングで？」

それに、彼の右手に握られた杖状デバイスと、威圧感が凛々しくもある立ち振る舞い。

「僕のこと、知っているかい？」

そいつは言った。

知っているさ。知っているとも。

だが、何でお前が俺を知っている？

「まあ、一応こちらから自己紹介をさせてもらおう………時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

黒いロングコートの裾を靡かせて、俺達の位置から数メートル離れた場所で彼は止まった。しかし、夕日を作る彼の影は、俺達の足元を確実に捕らえていた。

クロノ・ハラオウン。数ある次元世界を管理する巨大組織、時空管理局の局員である。弱冠十四歳でありながら、管理局内でも比較的高位職であるらしい執務官を務める男。

アニメ第一期では、なのはとフェイトの四戦目に割って入る形で物語に関わるようになるキャラクターのはずだ。彼の登場を皮切りに、物語には時空管理局が関わってくるようになる。

なのに、何故、今になって登場するんだ。

「早過ぎるだろう！ 今日フェイト初登場のはずだし、第一なんで俺のことを知っている！？ 神様!？」

「わ、分かりません!」

「君は神様と話が出るのかい？ 誰もいないみたいだけど……まあいい」

そう言ってから、クロノは更に数歩こちらに近づいてきた。

本物のクロノを前にして、俺は思わず後ずさりしそうになった。

「君に訊きたいことについてなんだが、返答次第では、君の身柄を
一時的に僕達で預からなければならぬ」

「身柄を？」

今、こいつは自分が何と言ったのか、解っているのだろうか。

身柄を預かるだと。それはつまり、早い話が俺を捕らえようという
ことか。

「はっ」

「何がおかしいんだい？」

「はははっ」

こりゃあたまげた。時空管理局は、やはり思ったとおりの悪徳組
織だったか。

時空管理局なんて、次元世界の治安維持を唱えてはいるけれど、
実のところ極悪集団であることは知っていたさ。

魔力資質のあるものを半ば強引な手口で自分達の仲間に取り込む
姿は、まさに誘拐犯。自分達の組織が慢性的な人員不足に陥ってい
るからと言って、そういったことを平然とするんだ。高町なのはが
いい例だ。物語としてはまだ先の展開になるが、彼女の素質を見て
使い物になると判断した途端、一般人であるはずのなのはを戦闘に
駆り出す。そして自分達の組織に來いと誘う。

そんな真似を平然とするような組織。そしてそこに属するクロノ・
ハラオウンをはじめ、時空管理局の面々。

「腐りに腐った管理局様のお出まし、ってか？」

「なに？」

「ひ、ひろしさん！？」

「俺が一体何をしようんだ？ 理不尽かつ、貴様等の自分勝手
な理由でこの俺を拉致しようとするその悪行……………ふざけるのも
大概にしろよ」

そうだ。俺は転生オリ主。

悲しい運命を変えるためにやってきた男。

ならば、シリーズを通して悪事を働く時空管理局を成敗するのも、俺の務めじゃないか。

待ち構える第二期も、第三期も、貴様等管理局が根本から腐っているからいけないんだ。

「変えてやる……そうさ、貴様等の曲がった根性から、叩き直してやるよ」

「どうやら、穏便にはいかないというわけか」

クロノが僅かに身構えると、神様が慌てて言ってきた。

「ひ、ひろしさん！　どうしたら管理局が悪者になるんですか!？」

「黙れ」

「クロノが身構えちゃってますよ！　ひろしさんには何も力がないのに！」

「黙れ。ってかそんなにバツサリ言うな」

「でも！」

「大丈夫、俺には力がある」

「え!？」

そう、俺には力がある。それは、クロノの登場が物語っている。奴等管理局は、資質のある人間を自分達の組織に取り込もうとするんだ。

と言うことは、俺を攫いにクロノが登場した時点で、答えは明白だ。

俺には、資質がある。

魔力が無いだなんて間違っていたんだ。俺には、奴等が欲しがる力が隠されているってことだ。

そしてその力が目覚めるとしたら、おそらくこの戦いにおいて。

「信じていて良かった。俺だって、原作介入に相応しいだけの力が隠されていたんだ」

「信じてなかったでしょう！　さっき思いつきり休むとか言ってたでしょう！」

喚く神様を横目に見ながら、俺は数歩前に進み出て、クロノと向かいあった。

見ているよクロノ。お前をコテンパンにしてやるぜ。

「話し合いで済むならばそうしたい。僕は幾つか訊きたいことがあるだけだ」

「お前の話なんてお見通しだ。しかし残念だが、俺はお前達に連れ去られたくはないし、連れ去られる理由も無い」

その通りだ。

そして、俺はビシッと言ってやる。

「俺は、自分の意思にしか従うつもりは無い」

俺とクロノの間を、長い風が吹き抜けた。砂埃が舞い上がり、激突の瞬間を待つ。

奴はどう来る？ 正面からか。いきなり魔法攻撃か。それとも近^ク接戦闘で攻めてくるか。^{ロスレンジ}

そして、俺の力はいつ解放される？ 戦闘中か。いきなり発動する^{リミットブレイク}のか。それとも封印解除には時間が必要か。

心臓の高鳴りが何故か心地良く感じるのは、きっとこの瞬間が俺の待ち望んでいた時だから。

転生者、碎城院聖刃。

参るぞ。

「……………理由が無い、か」

クロノが微笑んでから、鋭い眼光を向けて言ってきた。

「リーゼ姉妹に、痴漢行為を働いたそうだが？」

「なっ!？」

「ひろしさん!？」

その件でしたか。

しかし、ちょっと待て。それならば俺にも言い分がある。

「ち、痴漢行為か。ふん……待て、アレには事情があって、アレだ。誤解というやつだ。触ったと言っても、俺は触るつもりは無かった」

「君は、自分の意思にしか従わないんだろう？」

「ふん……………たまには、他人の意思にも従う」

く、苦しい。どうすればいいんだ。

俺は神様の方を見ると、彼は地面に膝を突いて四つん這いになっていた。

愕然としていないで、助ける。

どうなる、俺。

S e e y o u n e x t t i m e .

NEXT 5：嗚呼、我が転生人生よ

視線は前方へ真っ直ぐに。背筋もピンと真っ直ぐに。周りの空気は張り詰めていて。

俺は今、非常に息苦しかった。

硬めのクッション。無機質なデザインのソファーに座って、“奴等”が来るのを待っていた。

頭上を見上げてみたって、目に映るのは四角い天井に張り付く眩しい照明。余計なものない、おそらく客人を招く時に使われる応接室みたいな場所なんだろう。そういう場所なものだから、余計に緊張感が増してきた。

「ひろしさん、落ち着いていれば大丈夫ですからね」

何が大丈夫なんだよ。神様は俺以外の奴には見えないから、完全に傍観者じゃないか。だからそんな気楽なことが言えるんだっつーの。

一言だけでも文句を言ってやろうかと思った時、壁と同じ硬質素材で造られたスライドドアが開いた。

扉から入ってきたのは、クロノ・ハラウン。

それと、女性が一人。

その女性が言った。

「突然呼びつけてしまつてごめんなさい。でも、あなたにはどうしても確認しておかなきゃいけないことがあつて」

口調は明るかった。敵意が無いことをアピールするためなのだろうか。

俺が突然招かれたここは、時空管理局が所有する次元空間航行艦船の中だ。

そう、原作アニメにおいて、クロノ達管理局員が地球にやって来るために使用していた船、『次元航行艦アースラ』である。

公園でクロノと出会った俺は、痴漢疑惑を突っ込まれているうち

にあたふたとしてしまい、思わずクロノの誘いを承諾してしまったのだ。

原作介入をすればいずれは乗ることになると思っていたが、本当にいきなりだったものだから、心の準備が追いつかない。本物のアースラに乗り込んだという事実だけで、俺は酷く動揺していた。

「お、お、俺は別にリーゼ姉妹のお尻が触りたかったわけではなくて！」

「僕達を知りたいのはそんなことじゃない」

俺が座るソファアの前にはローテーブル。そして向かい側には同じソファアが対となって並んでいるが、そこに座ったのは女性だけだった。クロノは部屋の入り口に背を預け、腕組みをしたまま立っている。

「まあ、そんなに固くならないで。そうね、まずは自己紹介をしましょう」

女性は続けた。

「私はこのアースラの艦長を務める、リンディ・ハラオウンです。提督とも呼ばれてまあす」

知ってるよ。時空管理局の次元航行部隊に所属する原作キャラで、アースラの艦長である一面とは別に、クロノの母親でもある女性だろう。俺の原作知識にあるとおり、ポニーテールのロングヘアとボンキュッボンな熟れたボディ。額に見える四つ星の特徴も一致する。

「えーっと……………碎城院聖刃です」

目の前にいるのがクロノとリンディであることは紛れもない事実。しかし、何故このタイミングなんだ？

クロノ達時空管理局が登場するのは、原作アニメの第七話。なのはとフェイトが三度目の戦いをした際、暴走しかけたジュエルシードのエネルギーを察知したからだ。そして四度目の戦いにクロノが割って入ることで、なのは達と出会うことになるキャラクター達のはず。

それが何故、今なんだ？　しかも目当てが俺って、どういうことだ？

「あ、あの……なんで俺のこと……を？」

公園でクロノと向き合った時はあんなに闘志が漲っていたけれど、こうして落ち着いてから改めて対面してみると、どうも萎縮してしまふ。まあ、いきなり危害を加えようとか、そういうつもりではないみたいだから、俺もおとなしくしておいてやる。

「ええ。ちゃんと説明させてもらうわ」

リンディは続けた。

「単刀直入に言ってしまうと、あなたが何者なのかってことについて知りたいのよ」

「……………え？」

今度はクロノが口を開く。

「数日前に君が痴漢したリーゼ姉妹だが」

「あれは誤解だ！」

「あの二人は僕の師匠なんだが、二人から連絡をもらった。第九十七管理外世界、現地名『地球』に、管理局の存在を知っている者がいる、とね」

リーゼ姉妹が俺の存在をクロノ達に知らせただと？

俺は思わず顔を顰めてしまった。あの二人、なんだか知らんが妙なことをしてくれちゃったみたいだな。

「地球の人達は、魔法や次元空間の存在を知らない人がほとんどだ。それなのに、全く魔力を持たない民間人である君が、何故あの二人を、そして管理局の存在を知っているのか。それが知りたい」

「なに？」

俺の一言に、クロノとリンディがきよとした顔で俺を見てきた。

まあ、そういう顔をしたくなるのも分かる気はするが、今一度俺に確認させてほしい。

今、クロノは何と言った？

「…………俺に、魔力がない？」

「え？ あ、ああ。君には魔力が無いだろう」

ちよっと待て。それは本当なのだろうか。

神様の方を見ると、彼は「だから言ったじゃないですか！」と返してきた。

確かに、クロノが俺の前に現れた理由は、リーゼ姉妹からの報告があったからだ。ってことは、魔力を持つ俺を魔導師としてスカウトしてきたという、一縷の望みは儚く消え去ったわけだが。

クロノが俺を連れて行こうとするから、もしかしたらと思っているたのに。

俺には、管理局が欲しがるほどの力が眠っているんだと思っているたのに。

これでようやく、碎城院聖刃の最強伝説が始まるのだと思っているたのに。

「ほ、本当に無いのか？」

頼む、嘘だと言ってくれ。

「無い」

「ちよっとよく調べてみたらどうだ？」

「無い」

「ちよ、ちよっとぐらい……ちよーっとぐらい何かあるだろ？」

クロノは一度だけ大きなため息をついて、それから静かに話を始めた。

「魔力を保有する人や生物には、魔力の源となる器官がある。これを『リンカーコア』と言うんだけど、ここ、第九十七管理外世界には、リンカーコアを保有している者は極めて少ないんだ」

そんなことだって知ってるよ。俺は転生者なんだから。原作知識があるんだから。

なのはみたいに、魔導師としての素質がある奴なんて、地球じゃ滅多にいない。だから地球人は、魔法が使えないんだ。

だが、俺は転生者だぞ？ 転生オリ主だぞ？

魔法が使えなくちゃ、リリカルなのはの世界に絡み辛いじゃないか。

何のためにこの世界に転生してきたのか、分からないっつーの。

「お、俺にはリンカーコアは……………」

「無い。計測器で測ったわけではないけれど、でも、君と魔力的な接触をとろうとしても一切反応が無いから、おそらくそういうことなんだと思う」

「そんな……………それじゃあ、俺って本当にただの一般人じゃん」

「そういうことだな」

「こんな報われない転生オリ主なんて、はじめてだよ！」

何だかボディーブローを喰らって頭が下がったところで、トドメのアップラーをぶち込まれた気分だ。俺はソファアの背もたれにへたり込んで、天井を見上げた。

そんな状態でも、リンディは相変わらずの明るい声で言ってきた。

「そう。あなたはただの一般人」

「があっふうっ！」

「なのに、私達管理局の存在を知っている。これって、一体どういうことなのかしら？」

ぼろぼろな俺の精神は、リンディの投げかけてきた質問によって少しだけ回復を遂げた。

もう仕方が無い。この際、魔導師としての聖刃は諦めよう。

考えを改めてみる。現状をよく見てみると、原作ではまだ出てくるはずの無いクロノやリンディが俺と出会っている。リーゼ姉妹に出会ったことも踏まえて考えれば、あの猫姉妹は俺の存在を意識しているということで、第二期シリーズ介入への布石もばっちり出来ている。

これはこれで、一つの原作介入と捉えるべきじゃないのか。

そうだ。ちょっとポジティブになろう。原作に関われるんだったら、転生者らしくなれるんだったら、もうなんだっていいや。どうせ転生オリ主としてやって来た以上、悪の組織である時空管理局も

俺が根性叩き直してやろうかと思っていたし、ちょうどいいじゃないか。

そう思ったら、だんだん元気が出てきた。

よし、だったらここから介入しよう。

おめでとう、俺！ 今日から念願叶って原作介入開始だ！

「…………俺が何故管理局を知っているかだって？」

含み笑いと共に言い放つと、クロノとリンディが明らかに緊迫したのが伝わった。

「どうやら、俺の正体を明かさなくてはならないみたいだな」

「正体、だって？」

「そう。俺の正体…………それは、転生者だ」

「テンセイシャ？ 一体それは何かしら？」

リンディの声を聞き終えた後、俺はソファから立ち上がって不敵に微笑んだ。

転生者とは、お前達原作キャラを新世界へと誘う運命の導き手。俺がいるからにはもう大丈夫。お前達を、本来の運命よりもずっと清く、正しく、美しい行く末へと連れて行ってやろう。

「お前達の運命を変える者、とだけ言っておこう」

「どういうことかしら？ はっきりと教えてくれない？」

そんなことをする必要などない。お前達は、俺の手によって真の道へと導かれていればいい。

「訳が分からないぞ。転生者ってのは、一体何が出来るんだ？」

生意気な口だな、クロノ。

まあ、お前のような頭でっかちで堅物で悪の手先である輩を黙らせるには、その身に俺の凄さを刻み込むしかない。

「お二人さん」

「なんだ？」

「良い事を教えてやろう……………近々、地球で小規模な次元震が起ころう」

そう言うと、部屋の中には更なる緊張が張り詰めた。

「次元震ですって？ いや、それよりもあなた……………」

「回避したければ、俺を嘗めないほうがいいぞ。ふっふっふ」

「……………まさか自分を預言者だとしても？」

「転生者だ」

そうだ。俺は転生者なんだ。

持ち得た原作知識を駆使し、この先に待ち受ける出来事を把握し、それを俺の強さとして利用する。

そして俺が正しいと思った道へ、皆を導いてやればいいんだ。

プレシアの言いなりになっているフェイトの目を覚まさせてやるのもいい。

なのは達を利用する外道管理局のクロノとリンディ。この二人に本当の正義を教え説くのもいいだろう。

起こるべき惨事を事前に防ぐことで、自分を周囲に認めさせるのもきつと楽しい。

やりたいことは、やるべきことは盛りだくさんだ。

嗚呼、ようやく俺にも運が回ってきた。

「……………君は」

クロノが険しい顔で言った。

ふん、そんな顔が出来るのも今のうちさ。

俺はこれから、転生者としての務めを思う存分堪能させてもらう。

「艦長！」

クロノがリンディを呼んだ。

なんだなんだ？ 大好きなママにたちゆけてほしいのか？

外道管理局員は、俺にへりくだれ！

「……………そうねえ。確かに、放っておくわけにはいかないかもね」

「え？」

二人の視線が、俺に注がれていた。

その視線から感じる事が出来る気持ちは、敵意に近いものがあった。

「な、なんだ？」

「公園でも言ったとおりだ……………砕城院聖刃、君を自由にさせるわけにはいかない」

「は？」

「どういうことだ？」

「管理局の存在を知っていることだけならまだしも、次元震の発生予告までされてしまったんだ。次元震は、たとえ小規模でも大きな危険を孕んでいる。だから君を放っておくわけにはいかない」

「なんかマズくないか？　まるでこの会話の流れ、俺が次元震を引き起こすみたいじゃないか。さっきのは犯行予告じゃないんだぞ。」

その時、クロノが公園で言っていた一言を思い出した。

“君の身柄を一時的に僕達で預からなければならぬ”。

ちよつと待て。待ってくれ。

こいつらに捕まったままじゃあ、俺はなのは達に絡むことが出来ないじゃないか。

何故そうなる？

「ひろしさん！」

突然、神様が俺に向かって声を上げた。

「そうか！　こういうことだったんですよ！　リーゼ姉妹の狙い！」

「え？」

「朝言っていたじゃないですか！　リーゼ姉妹は何をしていたんだろうって！」

だからそれは、第二期シリーズでの企みの下準備だって。

「下準備だったんですよ！　二期での企みをスムーズに進めるための下準備中だったんです！　だけど、そこにひろしさんが現れた！　知られてはいけない自分達の存在を知っているあなたが現れた！　だからあの二人は！」

「あっ！」

「あなたに企みを邪魔させないため、クロノ達へあなたの存在を知らせたんです！　あなたが邪魔さえしなければ、彼女達は原作どおりに裏で糸を引くことになる！」

要するに、彼女達自身は知らずとも、リーゼ姉妹は結果的に俺の原作介入を妨害しているってことか。

俺って、もしかしたらあの二人に余計なことをした？

これはまずい。非常にまずい。

クロノ達と接触することで、原作介入できました。やつほー！
なんて言ってる場合じゃない。このままでは、介入と同時にオリ
主ライフが終了する。

どうしたらいい？ どうしたらいいんだ！？

「艦長、やはりしばらくの間彼の身柄を」

「ちよっと待ってください！」

自然と、気持ちは下手^{したて}に出ていた。

「俺には家族がいるんです！ 生活もあるんです！ 学校にも行か
なくちゃいけないし、この歳でお父さんお母さんを泣かせたくはあ
りません！」

へりくだれ、俺！

「しかし艦長！ 彼から目を離すわけには」

「お願いですリンディ提督！ 何卒ご慈悲を、ご慈悲をおおおお
っ！」

「あらあらー。これは一体どうしようかねえ」

右手を頬に当てながら、リンディ提督がにこやかに言った。

と、言うわけで。

翌日の俺は、なんとか無事に学校に通うことが出来ている。今は
ちょうど、朝のホームルームの時間だ。

昨日、アースラ艦内において、クロノとリンディ提督と俺の三人
で話しあった結果、俺の身柄拘束の話は一応回避出来た。

次元震の発生予告だって、俺自身が引き起こすわけではないこと
を説明したところ、リンディ提督はとりあえず納得してくれた。意

外と話の分かる人で助かった。

それでもクロノからの疑いが晴れることはなく、俺は通常的生活を送ることが許される代わりに、一日のほとんどを監視されることとなった。

その監視役が誰かと言うと。

「今日は転校生を紹介します」

「……………ク、クロノ・ハラオウンです」

黒い学ランがお似合いなこと。

顔を引き攣らせながら教壇に立つクロノを見やりつつ、俺は露骨にうんざりした表情を浮かべた。

この“学生クロノ”というのも、リンディ提督の考え出したことだ。証拠不十分によって身柄拘束にまで至らない俺を、この地球上においてごく自然な形で監視をするためという、至極全うなようにもしかしたら面白半分なんじゃないかというアイディア。

クロノも案外大変なのかもしれないな。

俺の隣に立つ神様が、微妙に困惑しているような顔を浮かべていた。

「なんだか、妙な展開になってきましたね」

「本当だよ。このままだと原作とかけ離れていくんじゃないの？」

「僕としては、そういうのはちょっと嫌なんですけど」

「嫌って何だよ……………そんなこと言ったら、俺だって四六時中監視されるんだから嫌だよ」

こうして、転生オリ主である俺、碎城院聖刃の妙な原作介入がスタートした。

学校内では、何処へ行くにしても、何をするにしても、クロノが俺のことをじっと見てくるのでげんなりしてしまう。しかし、周りの先生や友人達には、どうやら“転校生の面倒を見る山田”という風に映っているらしい。

監視されてばかりというのも癪なので、俺は逆にクロノの様子を監視してやることにした。

数学の時間。弱冠十四歳でありながら執務官を務めるクロノは、やはりお勉強が出来るみたいで、教師の出題する難問もスラスラと解いて、クラス中を驚かせた。

歴史の時間。地球の歴史はさすがに知らないことだらけだったようだが、お利口さんよろしく、休み時間に予習をこなすことで、授業にはばっちりついてきていた。

自習の時間。落ち着いた雰囲気と女受けのいい顔立ち。だけど小柄な体格というギャップが良いらしく、クラスの女子生徒に取り囲まれていた。正直に言って羨ましい。

体育の時間。分かってるよ。こいつは戦闘もこなせる魔導師なんだから、分かってるっつーの。だから女子生徒もいちいち黄色い声飛ばしてんじゃねーよ。

「まったく、艦長の思い付きにも困ったものだよ。こんな僕の状況を見て、絶対に楽しんでるからな」

「はいはい、そうですかそうですか。モテる男は辛いですか」

こいつだけは許さねえ。お前は出来過ぎ君かつーの。なにやらせても完璧で、外見にも恵まれていて、魔導師としても優秀で、お前は何処のオリ主だよ。

放課後になると、俺とクロノは並んで校門を出た。

それにしても妙な感覚だ。なのは達の原作キャラと一緒に登下校することへ憧れを抱いている俺だが、いくら原作キャラとは言えクロノと一緒に登下校するとは夢にも思わなかった。

「さて、じゃあこれからは、約束どおり」

「分かってるよ、分かってますよ！ アースラに行けばいいんですよ！？」

俺の監視はまだまだ終わらない。

学校生活はクロノがこちらの生活圏に介入していたが、放課後は逆で、極力こいつ等の目の届く範囲内にいるという約束を交わしたのだ。その結果、自宅には晩飯と寝泊りだけで帰るようなものになってしまった。まあ、アースラとの行き来は転移魔法で送り迎えし

てくれるということだから、移動時間はあつという間なんだけど。

俺がリンディ提督に弱みを見せてしまったことも悪いのだが、彼女にはすっかり頭が上がりなくなってしまった。

艦内にやって来ると、さっそく彼女が出迎えてくれたことに対して、俺は深く頭こうべを垂れた。

アースラ内にいる間は、目の届く範囲であれば特に厳しい制限もなく、自由に動けることになっている。だが、ぶっちゃけ何もすることがない。

そうしていると、リンディ提督に呼び出された。

「ちよっと付き合ってもらえないかしら？」

「なんでしょうか？」

彼女は艦内のとある一室に俺を招き入れた。

「これこれ。地球のお茶なんだけれど、一緒に飲んでみない？」

やばい。

彼女が用意したもの。それは、抹茶だった。

日本の伝統的な茶室を模したそこには、茶を点てる準備が整っていた。

そう言えばこの人、苦い抹茶にミルクと砂糖をたっぷり入れて飲めるんだよな。

嫌な予感がする。

体が自然と嫌がっているのにも関わらず、リンディ提督は楽しそうに笑いながら俺を導いた。

「真似事だけれど、楽しそうでしょう？」

そう言って彼女は、茶を点てた。

彼女なりの味付けも、もちろん行われた。

抹茶の入った茶碗に、角砂糖が放り込まれる度に、俺は心の中で「真似じゃねえだろう。それはお前のオリジナルだろう」と呟いた。

「どうぞ」

差し出されたそれを、俺は飲みたくない。

しかし、頭が上がる俺には、選択肢は一つしかなかった。

嗚呼、こんな形での原作介入を、誰が想像しただろうか。

「けっ……ごふうっ！ 結構な、お手前で………」

俺はこのお茶の味こそ、俺の転生ライフそのものではないかと思っただ。

See you next time.

NEXT 6…彼等の矛盾

「なあ、頼むよお」

「駄目ったら駄目だ」

俺は両手の平を合わせ、顔の前に立てた。

それなのにクロノは俺と目を合わせることもしないまま、机の上に広げた教科書とノートを使って、次の授業の予習をしていた。

俺が朝から一生懸命頼み込んでいるというのに、クロノは一向に首を縦に振ってくれない。

「いくら俺の監視をしなくちゃいけないからって、何で学校が無い日までお前と一緒に過ごさなくちゃいけないんだよ」

「僕だって本当ならこんなことはしたくないんだ。でも、君の素性のはつきりとするまでは、こうして監視をするべきだ。最初にそういう約束で落ち着いたじゃないか」

「俺は別に監視されるほど怪しい奴じゃないって。だから今度の連休くらいは俺を解放してくれよ」

俺がさっきから何を頼み込んでいるのかと言うと、それは数日後に控えている連休のことだった。

学校でもクロノの目があり、学校が終わればアースラに顔を出さなくてはならない。今の俺にはのんびりと気を休めることの出来る時間が少な過ぎるので、今度の連休期間ぐらいは監視を外してくれと頼んでいるのだ。

だって今度の連休と言えば、そう、“アレ”が待っているのだから。

「お前だってたまには休みたいだろ？　いつつもそんなカチカチ頭でお仕事ばかりしてたら疲れるだろ？　だからゆっくり羽を伸ばしてこいって」

「今、僕の悪口を言っただろ？」

今度の連休は本当に大事なんだ。少なくとも、管理局に動きを制

限されたままでいるわけにはいかないんだ。

と言うのも、これには転生オリ主らしい理由がある。

実は数日後に待ち構えている連休は、原作における第五話の話が繰り広げられるタイミング。温泉に行った高町なのはと、ジュエルシード探しをするフェイトが二回目の戦闘を繰り広げるのだ。

それを事前に知っていながら、転生者が動かない理由なんぞあるものか。

いや、それよりも何よりも、俺には絶対になのは達についていなくちゃいけない理由がある。

「さつきからやたらと連休に拘っているけれど、何かあるのかい？」
ようやく顔を上げたクロノが、俺に訊いてきた。

あるんだよ。あるから言っているんだよ。

「……………温泉があるんだよ」

「はあ？」

「温泉に行きたいんだよ！」

そうだよ、なのは達と一緒に温泉に入りたいんだよ！

原作知識があると言うのは、時として転生者に恐ろしいまでの苦悩を与えてくる。

君は知っているか？ リリカルなのはシリーズにおいて地味ながらも受け継がれる“お風呂エピソード”の伝統を。

君は知っているか？ 第一期の温泉エピソードには、なのはとすずかとアリサの幼女三人があられもない姿で湯に浸かるということ。

君は知っているか？ 幼女ばかりか、なのはの姉やすずかの姉、それに月村家のメイド二人もお風呂でポヨヨンムフフだということ。

「いいか、クロノ。よく聞け……………アニメの世界にやって来た転生オリ主ともあろう俺が、そういう極めて重要かつビッグなイベントに参加しないなんて有り得ないんだよ。『主人公』と『美少女』と『温泉』。こんな要素が揃ったら、もういくしかないんだよ。そ

れがオリ主だろ？ いや、男だろ？ 主人公がロマンを追わないなんて、そんな物語がこの世にあって良いわけがないんだよ。そんなことをしてみろ。俺は、“シナリオ殺しのセイバ”となってしまう」
「……………君」

「掴めるチャンスはこぼさず掴めよ！ 拾える幸運は逃さず拾えよ！ 望める願いは余さず叶えろ！ それが転生オリ主、碎城院聖刃なんだよ！」

クラス中の誰もが、こちらに視線を注いでいた。

ちよつと待てよ。今の台詞、すげえ良かったな。主人公っぽいゲキアツワード満載だったじゃないか。見てみるよ、クラスの誰もが俺の言葉に胸を打たれているみたいだぞ。

なんかもう一回ぐらい熱弁したいな。今の台詞は家に帰ったら復唱して覚えとこう。絶対にいつか使える。

「あのなあ……………アニメとか、主人公とか、オンセンとか、君が何を言っているのか、僕には全然分からないんだけど」

なんだよー。確かに事情を知らない奴には説明するのも難しい話ではあるんだけどさあ。ちよつとぐらい解ってくれたっていいだろーがよお。

だからお前は「空気読め！」って言われるんだろーが。

ああ、それにしてもさっきの台詞やっぱり良かったな。俺ってばようやくオリ主らしさが出てきたんじゃないの？

「とにかく！ 俺は温泉に行かなくちゃいけないんだ！」

「許可は出来ない」

こいつは！

その時、予鈴が鳴り、教師が教室に入ってきた。仕方ない。この話は次の休み時間にもう一回するしかないな。

席に座り、机の引き出しから教科書を取り出していると、神様が近づいてきて言った。

「なかなかクロノもオーケーしてくれませんか」

「んー、もういつそのこと、あいつも一緒に温泉に連れて行こうか

と思ったんだけどさ」

「あ、考えてたんですか？ そんなこと」

「まあな。でも、神様は嫌なんだろう？」

「え」

「原作が大きく改変されること」

そう言うってから神様の顔を見ると、しばらくポーっとしたまま固まっていた神様の表情が、徐々に明るくなっていった。

「ひろしさん……」

俺に氣遣われるのがそんなに嬉しいのか？ 変な神様。

もちろん俺にだって、原作に介入して存分に自分の人生を堪能したいという欲求がある。

けれど、転生した俺には原作キャラを圧倒できるような力があるわけでもないし、今までのことを振り返ってみても、原作に嫌われているとしか思えないくらいに、俺の思惑はことごとく失敗している。

もしかしたら原作そのものには、本来の流れ通りに進もうとする意志があったりするのかなと思ってしまうほどだ。

それに、神様の言う「極力原作の流れを崩したくない」という考えも、分からなくはないのだ。

矛盾しているということは自覚している。原作介入を熱烈希望する一方で、原作改変に対して抵抗を感じている自分自身はおかしいだろう。

実を言うと、何故そんな抵抗感があるのかはよく分からない。

不思議な感覚だった。改めて考えてみても訳の分からないことなのだが、俺はこの“原作尊重主義”とも言えるような考えを、失いたくない。

心ではなく、もっと根幹の部分に。まるで細胞一つ一つに刻まれた記憶であるかのように、原作尊重という想いが俺の中にあることを自覚していた。

そして俺は、そんな自分に似ている人物を知っている。

それは、今、目の前にいる神様本人だ。

原作の流れが大きく変わること嫌い、そのために俺を凡人として転生させた神様。

しかし、彼は言った。物語に待ち受ける悲しい運命を変えてくれ、と。俺に原作介入をするように促す彼の言葉は間違いなく矛盾している。

だからだろう。なんだか俺と神様は似ている。最近、そう思ったりするのだ。

この不思議な感覚は、一体なんだろう。

あれ？　不思議な感覚と言えば、もう一つ。

俺の中のずっと奥にいる、真っ暗な世界の先にいる、もう一人。

お前って……………誰だっけ？

「山田！」

「あ、はい！　え？　あれ!？」

既に始まっていた授業。

俺は、教師に指名されていたらしい。

「何ぼーっとしてるんだ？　答えられんのか？」

なんてこった。まさか問題を出题されているとは気が付かなかった。

先生の出した問題って何だ？

俺は思わずクロノの方を見てしまった。

すると彼は、呆れ顔を浮かべたまま、こっそりとノートを広げて俺に向けてくれた。

まさかそれは回答か？　ナイス、クロノ！

「ほら、松尾芭蕉の代表的な句を一つ、言ってみろ」

「掴めるチャンスはこぼさず掴めよ！　拾える幸運は逃さず拾えよ！　望める願いは余さず叶えろ！」

「芭蕉はそんなこと言わねーよお、山田。廊下に立っとなれ」

教室中から笑い声が聞こえ、俺は唾然としてしまった。

そんな中でクロノを見ると、奴は肩をヒクヒクさせながらずっと

俯いていた。

あんの野郎。

隣を見ると、神様までもがそっぽを向いて腹を抱えていた。

放課後、いつも通りに俺とクロノはアースラ内にやって来た。

「お前は俺のことをバカにしてるのか!？」

「い、いやあ……くつくく! ま、まさか本当にノートの通りに答えるなんてふくぐつははは!」

いつまで笑ってるんだコノヤロウ。横を見れば神様もいまだに笑い続けている。

それにしても、クロノがあんな冗談をかます奴だとは思わなかった。いつもは冷静で堅物人間のくせに、いきなりあんな一面を見せるなんて不意打ちにもほどがあるだろう。

クロノは俺の顔を見る度に笑いがこみ上げてくるようで、授業が終わってからずっと、こちらをあまり見てこない。

そして今でも視線は真っ直ぐと、廊下の先に固定されたままだ。そんな状態のまま、クロノは言った。

「あれ? ……………どうやら艦長に呼ばれたみたいだ。ちょっと行ってくる」

「あっそ! とつとと行ってこいよ!」

クロノが立ち去って行くのを見届けた後、俺はアースラ内にある食堂へと向かった。

ここ、アースラ内にある艦内食堂は、毎日の監視に疲れた俺にとっては憩いの場であったりするのだ。

アースラ内って退屈なんだよな。やることないんだもん。それにリンディ提督がお茶に誘ってくれることはあるけれど、基本的にこの船の中にいる人達は皆仕事だからな。やることなくてフラフラしている奴なんて、俺くらいなものだろう。

そういう時、俺は大抵食堂に行くことが多い。原作アニメでもアイスラ内の食堂は何度か出てきたけれど、実際に食べてみると意外と美味いんだよな、ここの料理。

今日も食欲をそそられる料理に手を伸ばし、次々とトレーに乗せてから席に着いた。

俺以外に食事をしている管理局員がいないので、俺は黙々と食事を始めた。一人だと退屈ですぐに食べ終わってしまうのだが、神様を話し相手にするわけにもいかない。だって人目を気にせずに神様と話していると、独り言をぶつぶつと言っている風にしか見えないから。だから学校などでも、神様と話すときはわりと気を遣っているのだ。

そんなわけで、俺はいつも通りの静かな食事を楽しんでいた。すると。

「この席、いい？」

突然声を掛けられた。

前を見ると、そこにはコーヒールと茶菓子を持った管理局員が一人立っていた。

誰だ？ 周りの皆は一生懸命働いているというのに、暢気に茶をしばこうなどとしている輩は。

俺は眉間に皺を寄せ、思いつきり睨みをきかせながら「てめえ、仕事しろ！」とでも言いたげな顔を上げた。

その視線の先には、若い女性局員がにっこりと笑いながら立っていた。

「ちょっとお邪魔するね」

それは、エイミー・リミエッタ。

彼女はクロノよりも背が高く、そしてそれなりに成長を遂げている若いボディーが“年上の女”を感じさせる。かと思えば、短い髪と眩しいくらいに晴れやかな笑顔には幼さがあって、見ているこっちの胸を温かくしてくれるようだ。管理局員制服の姿というのも、働く女性をイメージさせてくれるのでなかなか良い。

「皆が一生懸命働いてるのに、私はちょっとお茶でもしばこうかなーなんて！」

「息抜きは誰にでも必要でしょう。全然オツケーっすよー。むしろ働いてばかりいたら、いざって時に疲れちゃっていい仕事出来ませんよ」

「さっすがひろし君！ 解ってるねー」

エイミイは可愛い。

実はこのアースラに乗ってみて、その事実が付いた。

エイミイは、それほど魅力的にも感じなかった女性のサブキャラクターだったのだが、今、こうして同じ世界の住人として接してみるとこれがまた可愛いんだよね。それこそフェイトにも引けをとらないくらい。

そもそも、アニメの世界は最高すぎるだろう。

リンディ提督は、子持ちとは思えない色気ムンムンの美人キャラだし。エイミイだって絶対に幼馴染で欲しいと思える人柄だし、そればかりか、神社で出会ったあのお姉さんでさえハーレム要員に加えたくなるほどの美貌だぞ。

おいおい、この世界はどうなってるんだよ、リリカルなのは。って、ちょっと待て。

「……………ひろし、君？」

俺が訊くと、彼女はコーヒークップを唇に近づけながら言った。

「そ！ 君、本名は山田ひろし君なんでしょ？ クロノ君が言ってたよ。学校で出欠確認をしている時、山田ひろしって呼ばれたら君が返事していたって」

さすがは執務官。素晴らしい洞察力だよ、まったく。しかし、それを認めてやるのは悔しい。

「山田ひろしってのは、偽名ですよ」

「でも、君の家の表札には山田って書かれていたみたいだけど」
さすがは執務官。目ざといくらいの観察力だよ、あの野郎。

「そ、そう言えばクロノのやつ、一体どんな話でリンディ提督に呼

ばれたんですかね？」

「ああ、あれ？ それだったらたぶん、クロノ君も今頃話を終えて、私達の方に向かってきてるんじゃないかな？」

彼女がそんなことを言うと、まるで申し合わせたかのようなタイミングで、クロノが食堂に入ってきた。

クロノはいつもよりも険しきの増したような真面目な顔つきで、俺とエイミィの側まで近づいてきた。

どうしたんだ？ 機嫌でも悪いのか？

そう思った矢先にクロノが大きなため息をつくものだから、ますますその憂鬱の理由が気になった。

「何だよ？ どうした？」

一言だけ投げかけると、彼はそれを合図としたのか一度だけ深呼吸をして、次の瞬間には表情から暗い影をきれいさっぱり消し飛ばしていた。

「今度の連休は、温泉だ」

「何！？ ようやく俺の頼みをきいてくれるのか！？」

思わず舞い上がった。

「そういうわけじゃない……………」

「何！？ じゃあ何なんだよ！」

「……………僕と君とエイミィの三人で、温泉へ行くことになった」

三人？ どういうことだかよく分からないな。

俺はエイミィの方を見ると、彼女はまたもやにっこりと微笑んだ。

「えっと……………どういうことですか？」

「実はね」

クロノとエイミィの二人から聞かされた話の流れとしては、次のようなものだった。

まず、次元航行艦アースラは、諸事情により現在いる領域から一度離れなければならないということ。離れなくてはいけない理由を尋ねたところ、別の次元空間において調査任務があるのだと言う。

しかし、俺の監視を中断することも出来ないらしい。リンディ提

督は、俺に対してそれほど大きな危険を感じていないのだが、かと言って目を離しても大丈夫だと判断するには時期尚早ということで、俺への監視行動は継続されることとなった。これに関しては、クロノの意向も強く出ているのだと思う。

そして出された結論が、監視役を地球に残したまま、アースラは一度この領域を離れて調査任務に向かうということだそうだ。

監視役は引き続きクロノ・ハラウンが担当。更に、執務官補佐であるエイミィが地球に残ることで、話は決着したらしい。

クロノはもちろんだが、原作におけるエイミィと言えば、アースラ乗組員の中でも要^{かなめ}として位置づけられている登場人物だ。

そんなクロノとエイミィを欠いたアースラが、果たして任務をこなせるのかと気になるところではあったが、クロノやエイミィから言わせれば、「自分達がいなくて何も出来なくなるのだとしたら、アースラクルーは次元航行部隊として存在する価値が無い」そううだ。

二人が地球に残ることは決定事項であるとして、何故温泉なのか。それに答えたのは、クロノだった。

「実は、僕とエイミィの宿泊先が用意出来ていない」

「そんな理由かよ!？」

困った表情を浮かべながら、クロノは頷いた。

「地球での停泊準備は必要ないと思っていたからね。そもそも、今回の調査任務自体が急な話なんだよ」

「私達の生活空間としては、アースラがあるもんね」

「君は連休を利用して温泉に行くんだろう? 宿泊施設があるのなら、僕達もそこを利用してしまおうというわけだ」

「ちょっと待て。アースラはいつ帰ってくるんだよ?」

「連休明け」

見計らったようなタイミングだな。そういうのをご都合主義って言うんだぞ。お前は何処のオリ主だよって話だ。そういうポジションは本来俺の場所なんだっつーの。

心の中でそうツツコミを入れながら、同時にほっとした。

何はともあれ、これで温泉エピソードへの介入チャンスが訪れる。クロノとエイミーが加わってしまうという点は予想外だったが、まあ仕方が無いだろう。

エイミーがお茶を飲み終わると、二人は揃って業務へと戻っていた。

食堂に残った俺は、食べかけの料理に手を付けながら、神様の方に視線を送った。

せっかく神様に気を遣っていいこうと思ったんだけどなあ。

「神様、平気なの？ 原作とは違う流れで温泉エピソードに突入しちゃうけど」

「ま、仕方ないですよね」

彼は本当に仕方が無いといった様子で、小さく笑った。

その笑顔を見て、俺は改めて思った。

やっぱり、なんか妙なんだよなあ。

俺がじつと神様の顔を見ているせいだろうか、神様はそわそわしながら、尋ねてきた。

「あ、あの……なにか？」

「あのさあ、原作の流れを崩したくないって言うわりには、今回みたいな事態も仕方が無いで済ませちゃうし、そもそも俺を転生させたことだって………神様の言うことやること、全部が矛盾してるなあって思うわけよ」

日中、学校でふと考えていたことを、俺は口にしてた。

だが、それは俺自身も同じはず。俺だって、原作介入を目指して動いているくせに、密かに原作尊重の考えに賛同している。

この、言い様の無い矛盾に明確な答えが見出せない。

そのせいだろうか。

自分に似た存在である神様が、何か答えを持っているのだとしたら、それを自分自身の答えとして当て嵌めたい。そんな風に思っているから、俺は神様にこんなことを訊いているのかな。

「えっとお……………」

神様は、そっと俺の隣に腰を下ろした。

「好きだから、でしょうか？」

「へ？」

「原作が好きだから、それが改変されるということにある種の恐怖を感じているのかも知れません」

「……………自分が好きなものはそのままであってほしい、ってこと？」

「そうですね。そういうことです。原作の、本来の流れそのものに納得をしているから、それが否定されることを恐れている……………でも、原作が好きであるからこそ、自分が悲しいと思う展開を変えたい、救ってあげたい。そういう思いもあります」

「えーっと」

結局それは、ワガママでしかないわけだ。好きなものは好きなんだけど、だからこそ、こうあってほしかった部分を無理矢理自分の思い通りにしようというワガママ。

それは見方を変えれば、好きなものへの反逆とも考えられるじゃないか。

愛するが故の対立、か。

けれどそれは。

「それは、すごく勇気のいる、大変なことだと思うんです」

「……………そうかも、な」

「僕があなたを転生させたのは、きっと一人じゃ怖いからです。勇気が足りない、と言うべきでしょうか」

隣に座っていた神様は、きちんと座り直して、改まった態度を見せた。

そんな彼の様子に少し動揺した俺は、神様の目から視線を逸らせずに固まってしまった。

「だからお願いです……………僕に出来ることは少ないかも知れないけれど、この物語に待ち構えている悲しい展開と一緒に救ってほし

いんです。お願いします」

それは、彼に初めて会った時にも見たことのある、真剣な眼差しだった。そう、神様が初めて、俺に原作を変えてほしいと頼んだ時の眼差し。

成し遂げようとしていることは、自分勝手なワガママだ。結局神様の矛盾に対しても、自分自身の矛盾に対しても、答えなんて見つかっていない。

だけど、俺は不思議なほど自然に、頷いていた。

俺が神様の話に理解を示してしまうのは、俺達が似ているからなのだろうか。

いや、似ているなんていう単純なことではないのかも知れない。ただ、今はいくら考えたってさっぱり分からない。

一つ確かなのは、俺も神様も、原作が好きなんだということ。

今は、それだけでもいいだろうか。

See you next time.

NEXT7..差し伸べられる救済

エイミーさんの柔らかくて優しい手の温もりが、俺の体を滑っていった。

「う、くぁ……！」

思わず背筋が震えた。脊髄を駆け上がって伝わるその感触に、脳が麻痺してしまいそうだ。

「ねぇ、もうすぐで出そう？」

意識を保つことさえも難しい。

息が掛かるほど近いところから、甘い香りと共に彼女の囁きが耳に届く。それがまた新しい刺激となって、俺の体を更に沸き立たせる。

呼吸が荒くなってきた。恥ずかしいほどに大きい呼吸音は断続的で、彼女の手が絶え間なく動き続けることによって、その間隔を徐々に縮めていった。

「はぁ……はぁ……はぁあっ！」

「早く出しちゃったほうがいいよ。すっきりするから」
待ってくれ。それ以上されたら、本当にもう止められない。

「エ、エイミーさん……俺、もう……」

何かが俺の奥底から込み上げてくるのが分かった。

解放感を求めて、爽快感を目指して、細くて暗い道を駆け上がってくる“それ”が、ゴールを目指して一直線に俺の体を突き抜けてゆく。

止まらない、止められない、極限まで堪えた先にある楽園を目指して。

「早く出してスッキリして。ねぇ、ひろし君」

「だめだ……出る！ で、出るうっ！ あ、ああああっ！」

俺は、口にあてがっていたビニール袋の中へ、盛大に“それ”を吐き出した。

「うお！ うおおっ！」

「どう？ 全部出た？ まだ出る？」

「まったく君ってやつは……………酔い止めの薬は飲まなかったのか？」

エイミーさんに背中をさすられる俺の隣で、クロノは呆れたような声でそう言った。

酔い止め薬だって？ そんなものは飲んでいないよ、チクショウ。俺とエイミーさんとクロノの三人は、温泉に向かうバスの中にいた。

先日決まった予定どおり、リンディ提督率いるアースラ一向は任務のために地球を離れていき、俺の監視役としてクロノとエイミーさんだけが地球に残った。そしてアースラが戻ってくるまでの間、俺達三人は海鳴市にある温泉宿へ泊まることとなったのだ。

父さんと母さんには、「友人と一緒に受験前の旅行に行く」と言い訳をして出てきている。その際に両親から突っ込まれたのが温泉の宿泊費だったのだが、それに関しては時空管理局が全額支出してくれたので問題はない。

しかし、アニメの世界も実際に来てみるとシビアだなあ。旅費の心配されるとか、そんなオリ主聞いたことねえよ。

そんなことよりも、クロノやエイミーさんという予想外のメンバーを加えることになってしまったのは確かだが、何とか原作介入のチャンスにありつけたのは素直に嬉しい。

それに原作介入の話は別にして、エイミーさんのような可愛い女性と一緒に温泉旅行に来れたというだけでも、俺としては満足している。

それなのに、まさかバスの中で乗り物酔いを起こして嘔吐するのは、俺の転生人生最大の不覚になり得るかも知れんな。やっぱり浮かれ過ぎていたのが原因か。山道を走るバスの中で、海鳴名産塩大福なんぞをパクパク食べたのがいけなかった。

「……………クロノ、余った大福食べていいぞ」

「そんなもの見せられて、食べられるわけがないだろ」

エイミィさんは苦笑しながらも、まだ背中を擦ってくれていた。

嗚呼、こんなマールイオンみたいな転生者にも優しいエイミィさんとか、どんだけ女子力じょしりょく高いんだよ。

「あ、あとどれくらいで到着なんだ？」

「あと一時間くらいって話だけど」

「じゃあもう一回吐いとこ」

「君、バスを降りてくれないか？」

俺は袋を再び口にあてがった。

そうして出るものもすっかりと無くなった頃、遂にバスは目的の温泉宿へ到着した。

やって来たその旅館は、建物の外観こそ年季を感じさせる古さがあるものの、丁寧な造り込みと隅々まで行き届いた手入れがよく分かる、高い品格を感じさせる場所だった。

入り口を潜ると、仲居さん達が爽やかな笑顔と共に迎えてくれた。エイミィさんが受付手続きをしている間、俺は旅館内をぐるりと見渡してみた。

他の客は少ないのか、それとも外へ出ているのか、あまり人の姿はない。

そして、高町なのは一向の姿も。

しかし待てよ。俺は原作アニメの内容をよく思い出してみた。思い出してみたと言っても、入浴シーンばかりがはつきりと浮かんでくるだけで、あいつらが他に何をしていたのかなんてどうでもよくなってきた。

そうだな、うん。まずは風呂だろう。たまには俺もゆっくりしたいとな。

「部屋はこっちだってよお」

エイミィさんと仲居さんが先頭を歩き、俺とクロノはその後ろに続いて、肩を並べて歩いた。

ちらりと後方を見ると、ちゃんと神様もついてきている。神様は

にこにこと笑いながら、旅館の様子にすっかり心を弾ませている様子だ。

その時だ。ある部屋の前を通りかかった時、襖の向こうから、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

足を止め、耳を澄ませてみると、小さな女の子の声が複数。

「ん？ ひろし、どうした？」

何を喋っているのかは聞き取れないが、声質の聞き分けには確かな自信を持つことが出来る。

「ひろし？」

「この声、間違いない」

しかし、もう一つくらい決定打があってもいいな。

「……………この匂い、なのはかも知れんな」

「よく分からないけれど、なんか気持ち悪いな、君」

よし、なのは達がどの部屋にいるのかは分かった。とりあえず今は、この場を去ることとしよう。

宿泊する部屋へと辿り着いた俺達はそれぞれの荷物を部屋に入れた。と言っても、エイミィさんだけは部屋が別室だった。

何故かとクロノに尋ねたところ、「当たり前だ」と返された。

くそっ。何が悲しくてコイツと同室なんだっつーの。

まあいい。せっかくの温泉なんだし、とにかくまずは風呂を堪能することから始めよう。

俺が荷物を開けて風呂の支度をしていると、クロノとエイミィが不思議そうに見てきた。

「え、なに？」

「これからシャワーを浴びるのか？」

そうか。もしかして、異世界出身だと温泉っていうものに馴染みがないのか。

「シャワーって言うか、温泉だよ。日本の大衆浴場だ。こういうところに来たら、まずやることって言ったら風呂だろ」

「へえー」

すると、俺に倣って二人も風呂の支度を始めた。
待てよ？ 二人ともこの文化に馴染みがないんだよね？

これは使えるぞ。日頃の恨みを晴らすチャンスだ。見ていろクロノ。貴様には絶望を食らわせてやる。

俺は、自分でも分かるほどに意地の悪い笑みを浮かべていた。

支度を終えた俺達三人は、さっそく温泉へと向かって歩く。そして辿り着いたのは、男女に分かれた暖簾が掛かっている、大浴場への入り口。

「じゃあ私こっちだから」

俺達はそれぞれ暖簾を潜り、脱衣場へと向かった。

やっぱり、旅館の入り口で感じたとおおり、宿泊客は少ないのかな。脱衣場には俺達以外の客の荷物が見当たらない。

さっそく服を脱ぐと、クロノも俺に倣って服を脱ぎ始めた。初めて触れる異文化での習慣に戸惑いを隠せないのか、ボタンを外す手が何だかぎこちないみたいだ。

こうしてみると、貴様もまだまだ子供よう。

俺はパンツを脱ぎ捨て、ポコチャン全開状態で大浴場の入り口を開いた。

ふと振り返ると、俺の後ろに続くクロノは、腰にタオルを巻いていた。

「みっともない奴だなあ！ タオルは外せ！」

「そ、そういうものなのか？」

「当たり前だろ！ 男がポコチャンに自信を持たなくてどうする！」
渋々と言った様子でクロノはタオルを外した。

どれどれ。ほう、なかなかのデバイスをお持ちじゃないか。俺は自分のデバイスと見比べながら、クロノに対する復讐の方法を考えていた。

どうしてやろうかなあ？ 真面目でクールだというクロノのイメージを完膚なきまでに打ち砕く良い方法は何かないだろうか。俺の希望としては、クロノを知る周りの連中が、「えー！ クロノ君っ

てそんな人だったのー!?」とか思うような方法がいい。考えとしては、女湯に聞こえるくらいの声で「おいクロノ! 風呂の中でシヨンベンすんなよー!」と叫ぶのが、何気にダメージのでかい方法だと思う。

あれこれと考えを巡らせていると、クロノがさっさと露天風呂の方に向かっていくのが見えた。

「へえー、屋外にも風呂があるのか」

これはチャンス。飛んで火に入る執務官とはよく言ったものだ。俺はすぐさまクロノの後に続き、外へと出て行った。

すると、俺が声を上げるよりも早く、男湯と女湯を分ける仕切りの向こうから、エイミィさんの声が聞こえてきた。

「クロノ君、ロテンプロってすごく気持ちいいねー!」

「僕もこれから入るところだよ。でも確かに、青空の下で風呂というのもいいな」

向こうにはエイミィさんか。よっしゃ。舞台も役者も揃ったぜ。

では、元気よく。

と、その時だった。

声を上げようとした俺は、露天風呂の片隅にある、“禁忌の園”へと続く道に気が付いてしまった。

なんと、仕切りの末端が岩壁になっているのだ。人口素材で出来た仕切りが二分する露天スペース。しかし、その仕切りの末端に天然の巨大な岩で作られた壁がある。

まさか、こんなにも無防備な造りにお目に掛かれるとは思わなかった。

ひょっとして、登れるんじゃない? そんなもって覗けるんじゃない? いや、だが待て。さすがに女湯覗きはまずいんじゃないだろうか。ただでさえ俺は、リーゼ姉妹の策略によって痴漢者扱いされてしまったことがある。

そんな俺の勘が言うのだ。登ってはいけない。登ってしまったら、あの岩壁を越えてしまったら、今度こそ、ただでは済まない状況に

なるぞ。

嗚呼、だがかし。

向こうにはあのエイミィさんが。

ふと、横を見ると、神様が表情を引き攣らせていた。

「あ、あの……つかぬことをお伺いしますが、まさか何か企んでますか？」

「ふっ………いや」

そうだ。リーゼ姉妹の時だって、そうだったじゃないか。

俺は神様の制止を振りきってしまったが故に、リーゼ姉妹の罠にかかってしまったんだ。

それなのにまた同じ失敗を繰り返すというのか？

そんなことになったら、本当のバカだ。

「なあ、クロノ」

「え？」

そうだよ。そんな愚かな行為、俺には出来ないよ。

「あのさ………」

そうだ。女湯覗きなんて、愚かで下衆だ。

「あの岩壁の向こうに、もっと良い風呂があるんだよ」

だから貴様が行けえ！ 貴様がエイミィに嫌われてしまええ！

「あんなところを登るのか？」

「日本は昔からな、“働かざる者食うべからず”と言って、苦勞をしなくちゃ、良い思いは出来ないのさ」

「なるほど、良い言葉だな」

俺がしつこく勧めると、クロノもだんだんその気になってきたのか、遂に岩壁に足をかけた。

よっしゃあ！ これでクロノも痴漢の仲間入りだ！ 『覗き魔ク

ロノ』淫欲の執務官』と題してからかってやる！

疑いもしないまま、クロノは岩壁を登っていき、ついに頂上付近まで辿り着いた。

「ひ、ひろしさん！ あんまりですよ！」

神様の声なんぞ聞いてられるか。今は、覗かれたエイミィさんの悲鳴を聞き取るので忙しいんだ。

期待を胸に、俺はじっと耳を済ませていた。すると。

「え!?! うわわわ! クロノ君何してるの!?!」

「え? あ……う、うわああああっ!」

エイミィの存在に気が付いたクロノは、慌てて岩壁を降りてきた。ざまーみろだぜ。

「ご、ごめんエイミィ! まさかそんな! ……………あ、あの……これはその!」

困ってる困ってる。

「びっくりしたあ……………なんだ、クロノ君もやっぱり男の子なんだねえ」

え、何? その軽いノリ。

「だからそんなじゃないってば! もう出る!」

クロノは、俺を睨むこともしないまま浴室を出て行ってしまった。どうやら相当テンパっているみたいだな。俺の監視任務なんて、全然頭にないんだろうな。

いい気味だぜ、と、言いたいところだが。

エイミィさんの反応が思いのほかアツサリとしていて、こちらがびっくりした。確かに普段から明るい人ではあるけれど、裸を覗かれた女の反応って、ああいうもんなのか? それともクロノだから? いや、後者は違うと思う。違っていてほしい。

そうだ。

きっと、俺が覗いても、同じだ。

「ひ、ひろしさん? ……………ひろしさん!?!」

俺はすぐさま岩壁に飛びついた。

「駄目ですよ! ひろしさん! 何してるんですか!?!」

これだ、これだよ。転生オリ主なんだし、こういうのがあってもいいだろうがよ。

こういうのを待っていたんだよ。こういうのを望んでいたんだよ。温泉、来て良かったなあ。

さあ、いざ行かん。禁忌の園へ！

岩壁の頂上に辿り着いた俺は、ひょっこりと顔を覗かせた。思ったよりも湯煙が濃くて、視界が悪い。

くそ。エイミィさんは何処にいるんだ？ あのプリンのようなスベスベプルプルの体は何処に隠れているんだ？

思いつきり身を乗り出した。ギリギリまで。この体が伸びる限界まで。

その時。

「ひろしさん！ それ以上は危ないですよ！」

「え？」

湯煙で岩壁の輪郭が見えなくなっていた。欲張って更に体を乗り出そうとした瞬間、支えにしていたはずの俺の腕は、何も無い場所を掴もうとして、そして。

「うおお！」

こんな展開になるとは思わなかった。

たった四メートルほどの高さからの落下。だが、それでも死に繋がるかも知れないと思った瞬間、全てがスローモーションに見えた。体が真っ逆さまになって、全裸のまま風を切って落下するなんて。これで頭でも打って死んじゃったらどうしよう。転生オリ主なのに、こんな物語序盤で人生を終えてしまうのか。いや、それよりも、死に様が女湯を覗こうとして墜落だなんて。しかも全裸。

情欲と死の恐怖を同時に味わうなどは、夢にも思わなかったぜ。調子に乗っていた。悪かった。謝るから。

誰か。

誰か助けてくれ。

「うあっ！」

突然、背中が何かに当たるのを感じた。

露天風呂の床じゃないな。すごく柔らかい。それに、何だか浮い

ている感じがする。まだ着地すらしていない。

助かったのか？

目を閉じてしまっていたから、自分が誰かの腕の中にいるのだと気付くまで、少し時間が掛かった。

視界に映ったその人は、俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「あんた、一体何してんだい？」

俺はすぐに周囲を見渡したが、そこにエイミーさんの姿はなかった。なんだ、もう風呂を出ていたのか。

じゃあ、今日の前にいるこの人は。

赤毛の中に隠された、獣のような耳。それと、鋭い両目の真ん中で光る、額に埋め込まれた宝石のようなもの。半開きの口から微かに見えるのは、鋭い犬歯。

「マ、マジっすか……………」

彼女の顔を見て、俺の背中に当たっているものにも見当がついた。大きくて、柔らかくて。

「もしかして、アルフさんでいらっしやいますか？」

「な、何であたしの名前を知ってるのさ？」

彼女が驚くのも無理は無い。だが、原作知識を有する俺には、分かってしまうんだよ。

フェイト・テストロッサの使い魔である彼女の名は、アルフ。狼を素体としており、人型と獣型という二つの姿を持つ原作キャラだ。温泉に入っている今のアルフは人型。ピチピチムチムチな、ナイスバディーのお姉さんである。

「あんた一体、何者だい？」

まさかこんな形で原作キャラに出会うとは。

確かに原作第五話において、アルフは温泉宿に姿を現している。

それは、なのはの様子を窺うためだったはず。

では、今のアルフはどっちだ？　なのはに会う前か？　それとも後か？

くそう、時間軸が分からん。

いや、この際時間軸はどうでもいい。なのはとフェイトが対決するのは、今夜の話なのだから。

むしろこれはチャンスだ。そう考えるんだ。

今、俺はアルフと出会ってしまった。と言うことは、このままアルフと一緒にいればフェイトにも出会える。

よし、原作介入のお膳たてが揃う。なのはサイドからの介入を考えていたが、こうなってしまったからにはフェイトサイドからの方が楽に介入出来そうだ。

それに、今ならクロノ達の目も届いていない。

決めた。俺はアルフについて行く。

「……………お、俺は、転生者だ」

「テンセイシャ？」

「そう、お前達を救うためにやってきた」

その通りだ。リリカルなのは第一期において、救うべきキャラクターと言ったらやっぱりフェイトだろう。

悲惨な運命に見舞われた彼女を救うことこそが、転生オリ主である碎城院聖刃の役目。

「救うためって……………あんた、何を知ってるんだい？」

アルフの目に凶暴な光が宿っていった。

まずい。思いつき怪しまれている。

ここは俺の無害さをアピールしなくては。

「俺を見てみる。敵に見えるか？」

アルフが俺の全身を見回し始めた。

それにしても、こうしてみるとやっぱりアルフも可愛いな。スタイル抜群だし、獣耳だし、尻尾あるし。

それよりも、裸の男女がこんなに密着しているのいいのかな。

「……………どうだ、怪しいか？俺を倒してみるか？」

「“それ”をどうにかしないと、ぶっ倒すよ？」

とりあえず、大きくなり始めていたデバイスは隠しておいた。

「救うって、一体どういうことだい？」

なんて答えるべきだろうか。

そもそも、フェイトがこの物語の中で救われなくてはいけない理由、それは彼女の人生そのものにある。

大魔導師プレシア・テスタロッサは、過去に一人娘のアリシアを事故で亡くしてしまった。その哀しみ故に、アリシアを蘇らせようと苦心する日々を送る。

その過程で生まれたのがフェイト。アリシアのクローンである彼女は、プレシアのもとでアリシアとなる予定だった。

しかし、クローンのはずなのに、アリシアとは違う。外見と記憶以外のあらゆる面において、フェイトはアリシアと違っていた。

プレシアは、そんなフェイトを「ただの人形である」と言い、やがて自身の手駒として利用し、ジュエルシードを集めるのだ。

そんなフェイトは、原作第一期の終盤で全ての事実を知り、それでも母を想い、最後は母と永遠の別れを遂げてしまう。

そんな彼女の運命は、まさに悲劇だ。

これを救わずして、転生オリ主が一体何を救うと言うのか。

そうだ。俺の救うべき運命はこれしかない。

俺は、フェイトを大切に想う使い魔アルフの、心を揺り動かす最も強力な魔法の言葉を発した。

「プレシアの呪縛から、フェイトを救い出してやる」

この言葉に、お前は求めてもいいんだぞ。

救済か。悲しい主人に笑顔を捧げるための救いか。

希望か。優しい主人に安息を捧げるための願いか。

幸福か。愛しい主人に未来を捧げるための誓いか。

どれを望んだっていいんだぞ。

俺は、そのために転生してきたのだから。

「あんた……………」

「どうする？」

さっきまではあんなに猛々しく俺を見ていた彼女の視線が、少しだけ弱くなった。

「救ってくれるって？」

「ああ。なんてったって俺は、転生オリ主だからな」

「ど、どこでそんな事を知ったんだい？ 白状しないと喉を噛み切るよ？」

正直に言って、今までのパターンから言っても、俺みたいな初対面の奴に素性を知られていたら、絶対に怪しんで敵視してくると思っていた。リーゼ姉妹だってクロノだってそうだったから、今回もてっきりそうなると思っていたんだ。

しかし、彼女は疑いこそしているけれど、心が揺れている。

それはつまり、アルフが本当に、心底フェイトを救いたいと願っていた気持ちの表れじゃないだろうか。それこそ藁にも縋る思いでいたのかも知れない。

そんなに追い詰められていたんだ。

こりゃあ助けてやるしかないんじゃないかねーの？

「いろいろな事情の件も含めて、一度話がしたいんだ」

「そ、そんなこと言っただって」

「実を言うと、俺は今、時空管理局に監視されている」

「なんだって？」

アルフが周囲を睨み回した。

「今は大丈夫だ。管理局も、お前とフェイトの存在に気が付いていない。だが、今ここで俺を逃したら、もう俺と協力関係を結ぶのは難しくなるぞ？」

その言葉が決め手になったのだろう。

突然目の前に現れた正体不明の男が、自分達の素性を知っている上で助けてやると言っている。

しかし、男には時間が無い。

ならばどちらを取る。

答えは、決まっているだろう。

「ま、まあ、あんたがどうしてあたし達のことを知っているのかってのも分からないからさ、信用したわけじゃないけれど」

そうは言っても、突然現れた救済の可能性を、易々と見逃すつもりもないのだろう。そういう本音が見えた気がした。

「とりあえず、怪しいから一度フェイトにも相談してみないと」

「そうだな。それがいいだろう」

「じゃあ、まずはフェイトに会ってもらって話をするか」

やった。なんかすげえ上手くいった。

これでフェイトとの接点が出る。

ようし、これからが踏ん張りどころだ。

原作にバシッと介入して、フェイトちゃんをガシッと助けてあげようじゃないか。

「よし、そうと決まればすぐにでも」

「あ、アルフ？ 俺の服が脱衣場にあるん」

「フェイトは……向こうの方角だ。よし、すぐにいくよ！」

俺を抱えたまま、アルフは地面を蹴って飛び上がった。まだ湿った体に当たる風の感触は、全身を刃物で切りつけられるみたいだった。

「ちょっと！ あの！」

俺の悲鳴が聞こえていないのか、それとも無視を決め込んでいるのか、アルフはずっと前を見据えたまま、俺を抱えて海鳴の空を飛んだ。

See you next time.

NEXT 8…説教

俺を抱えたままのアルフは、しばらくの間空を飛び続けてから高度を下げ始めた。

どうやら辿り着いたようだ。これでようやく、フェイトと接点を持つて本格的な原作介入を果たすことが出来る。

今までが長かったようにも感じるが、これから訪れる喜びを思えば、ガチガチと音を立てている歯や濁流のように流れ出てくる鼻水も、なんら気になることではない。

いや、嘘だ。気になるよ。寒いよ。湯冷めした体が重たく感じて、動くのが辛いんだよ。いくら季節的には暖かいと言ったって、風呂上りのまま全裸で空を飛ぶとか、どうかしてるだろう。

それなのにアルフはずるいよなあ。こいつだって露天風呂を出発した時はほぼ全裸だったくせに、魔力ですぐさま自分の服を形成して身に着けちゃうんだから。

俺とアルフがやって来たのは、温泉宿から少し離れた森だった。空から見ると本当に緑一色となる山中へ、俺達は身を隠すように、静かに降り立った。

「ちよつとフェイトを呼んでくる。あんたはここで待ってな」

言われなくても、寒すぎて動けねえんだよ。

そう言っただけだったけど、俺の口は喋ることすらままならなくなっていた。

だが、もうすぐで俺の前に現れる。やっと現れてくれるんだ。

フェイト・テストロッサ。

全裸のまま地面の上で凍えている状態ではあるが、フェイトとの出会いを思うと元気が湧き出てくる。

「ふふ……………ふふっふふ……………」

「ひろしさん…………こ、怖いですよ」

神様が表情を思いっきり引き攣らせていた。つーか、いたんだ。

「それにしても、いよいよフェイトとの出会いですね！」

俺は頷いた。

「まずは第一印象だと思うんですね。ただでさえ第一期のフェイトは、プレシアのためにジュエルシードを集めようと必死な上、アルフ以外の誰にも心を開こうとしない子ですから。こちらが敵意を見せたりしたら、確実に仲良くはなれません」

もう一度頷いた。

が、そこで気が付いてしまった。

第一印象が大事だと？ 俺は、もしかしたら今、すごく怪しいんじゃないのか？ フェイトに敵意を抱かせてしまうんじゃないのか？ そう思ったのは、俺が転生者だからとか、突然現れて救ってやるなどと言っているからではない。

第一印象が大事だと言うのに、俺は今、生まれたままの姿でいるのだ。

そのことを懸命に、神様に伝えようとした。しかし、すっかり冷え切った体はもう俺のものではないようにさえ感じる。

「あ、ひろしさん！」

神様がそう言いながら、ある方向に視線を向けた。

まさか、もう来たのか？

まずい、まずいぞ。まずいって。向こうから来られたら、俺の現在の姿勢から考えると間違いなく肛門で挨拶することになるぞ。

そんなことを考えている間にも、フェイト達は近づいてくる。

「頼むよフェイト、一度でいいから話を聞いてみなって」

「でもアルフ、私達を救うって言ったって、私は別に誰の助けも要らないよ。それに、妙に事情を知っている人なんて、怪しくて信用できない」

どうしようどうしよう。見られちゃうよ。見られちゃうってばあ。

「まあいいからさ、一度見てみてって……………ああああ！ だめだめ！ まだ見ないで！」

「え？ なあにアルフ？ ちょ、ちょっと？」

「絶対こっち見ちゃ駄目だからね！　いいって言ふまでは後ろ向いてて！　あとマント貸して！」

何だ？　もしかして見られずに済んだのか？

そう思っていると、突然俺の体の上に、一枚のマントが掛けられた。そのマントには少しだけ温もりが残っていて、俺の冷たい体にはありがたいものだった。

マントを掛けてくれたのはアルフ。おそらく、フェイトよりも先に全裸の俺が目に入ったのだろう。機転を利かせた彼女は、フェイトのマントを俺に被せてくれたのだ。

俺はすぐさまマントで体を包み、僅かに感じられるフェイトの温もりに身を寄せた。

「あ、あの、ひろしさん？」

そう、フェイトのマントに。フェイトの脱ぎたてマントに。

そしてこれが、フェイトの匂い。

そうこうしているうちに、俺の前にはフェイトとアルフがやって来ていた。

マントの中から顔を覗かせ、二人を見上げる俺。

目に映ったのは、間違いなく本物のフェイト・テストロッサ。レオタードのような衣装と白いスカートを合わせて着る少女がそこに立っていた。トレードマークの黒いリボンと金髪のツインテールだって彼女の証。本来ならば黒のマントも羽織っているはずだが、それは現在俺が拝借しているから、付けていない。

そして彼女の手握られているのは、彼女の身長と同じくらい長さがある戦斧。それこそ、フェイトが操る魔導補助機^{デバイス}、『バルディッシュ』だ。メタリックブラックを基調としたシャープなフォルムと、先端に埋め込まれた黄色い宝玉が不気味に光っている。

遂に、遂にフェイトとの初対面。

俺は感極まって震えていた。しかし、感動しているだけでは、物語は動かない。まずは第一印象を良くしないと。

俺は、そっと笑顔を浮かべていた。

「……………私のマントを着て笑ってる？」

「ごっ！ ごっ！ ごめんよフェイト！ まさかこいつがこんな変態だったなんて思わなくて！」

今、アルフの目が殺意に満ちた瞬間を、俺ははっきりと見た。

第一印象って、大事だなあ。

「というわけで、俺はフェイトを助けたいと思って、やって来ました」

マントを腰に巻いただけの半裸男。それが俺だ。さすがは魔力で構築されたフェイトのマント。これ一枚だけでも、魔力による防護機能が働いているおかげで幾分か温かい。

フェイトには、俺とアルフが出会った経緯を話した後で、俺自身の目的をはっきりと伝えた。

しかし、伝えてはみたものの、正直に言ってフェイトが俺の言葉に耳を貸すとは思えなかった。

「悪いけど、あなたの助けなんて要らない」

ほらやっぱり。まあ、そう言われるのもおかしい話ではないのだ。いくら俺に原作知識があると言っても、何でもかんでも話しているとは思っていない。たとえばそれは、フェイトの出生に関しての話だ。

実はプレシアが作り出したアリシアのクローンであるなんて、フェイト本人に知らせることは出来ない。プレシアは本当の母で、昔はお互いに毎日笑いあっていた親子だった、そんな記憶を埋め込まれたフェイトに、いきなり真実を伝えることはあまりにも酷だ。それ以前に、そんなことを今の彼女が信じるとは思えない。

そこで俺が選んだのは、アルフと同じ立場をとることだ。アルフだって真実を知っているわけではないが、アルフは、フェイトに冷たい態度を取るプレシアを嫌っている。これは原作設定なのだ。

だから俺は、そんなアルフと同じポジションに立つことを思っていた。

フェイトの幸せを願い、プレシアの呪縛から彼女を何とか助けてやりたいと思う存在。

そういった立ち位置ならば、わざわざ彼女の秘密を語ることなく味方につけるし、何よりアルフという同志を得ることが出来る。フェイトに取り入ろうとするならば、この辺りから始めるのが妥当だろう。

「なあフェイト」

「アルフがどうしてもって言うから、話だけは聞いた。でも、私は得体の知らないあなたの言うことなんて信じないし、そもそも何から私を助けると言っているのが分からない。だから、あなたとの話はこれで終わり。帰って」

「だから、お前がプレシアの言いなりになるのは間違っているってことだよ。お前はプレシアに、言い様に操られているんだ」

「母さんの言いなりって？ 私は自分の意思で、母さんの望みを叶えてあげたいって思っているんだ。母さんに笑ってほしいから」

「お前がどんなに頑張ってジュエルシードを集めたって、プレシアは絶対に笑ったりしないぞ？」

「何でそんなことがあなたに分かるの？ 母さんのことを悪く言わないで」

「お前はプレシアに虐待を受けていて、それでもあの女がいいのか？ もっと普通に考えろって。何でそんなに依存するんだ？」

「悪く言わないで」

なかなかしぶといな。何か、フェイトの心を打つような言葉が思い浮かべばいいのだが。

彼女のハートをガツンと叩くような、良い台詞が。

「フェイト！ 君はもっと自分を大切にしたらどうだ！？」

「あなたに言われることじゃない」

確かにな。俺のこんな格好を見れば、そう思いたくもなるだろう。

しかし、諦めない。

彼女の心を揺さぶるような、良い台詞を。

「フェイト、いい加減に目を覚ましたらどうだ？ 自分の過ちに気付くんのだ」

「私の母さんに対する想いは、過ちなんかじゃない。あなたこそ目を覚ましたら？」

言いたいことは分かる。だが、こんな無様な格好ではあるけれど、俺は正気だよ。

まだまだ、諦めない。

彼女の目を覚まさせるような、良い台詞を。

「フェイト、君の気持ちはよく分かるよ。俺にも辛い過去があるから」

「嘘でしょう？ あなたと一緒にされたくない。それに、私はちっとも辛くない」

信じてくれないのか。まあ、辛い過去なんて俺にはないんだけど。どうしたらいいんだ。チクショウ。良い台詞って、難しいな。

その時だった。今までじっとしていたアルフが、突然声を上げた。

「それこそ嘘だよお！ フェイトは、あの女にちっとも想われてないじゃないか！」

「……………アルフ」

「あたしや嫌なんだよお！ なんでフェイトの背中には痣があるのさ！ こんなに良い子のフェイトが何をしたって言うのさ！ それに……………それに何でフェイトはあの女をそんなに！」

とうとう泣き出してしまったアルフが、その場に膝を突いて崩れた。

子供みたいに大きな泣き声を上げながら、顔をくしゃくしゃにして何度も何度も涙を拭う。拭った回数は彼女の悲しみの大きさを表していて、その回数は止め処なく増えていった。

フェイトはアルフの隣に屈むと、そっと彼女の頭を撫でた。やはり、撫でる回数はフェイトの気持ちの分だけ。いつまでも、何度で

も撫でていた。

「アルフ、泣かないで」

「だってえ！」

「アルフが泣いていると、私も悲しくなっちゃうよ。きっとジュエルシードが全部集まったら、母さんと私とアルフの三人で、皆で笑える日が来るから。それまできっと頑張るから。ね？」

「フェイトオ……………」

身を寄せ合う二人の隣で、俺はただ立ち尽くしていた。

しかし、しばらくそのまま動かない二人を見ていたら、俺はいつの間にか踵を返して、背中を向けていた。

真っ直ぐ歩き続け、目の前に立つ一本の樹と向き合っていた。

そんな俺を気にしてか、神様がそっと話しかけてくる。

「ひろしさん？ どうしました？」

「……………なんでだろう？」

本当に、何故だろうか。

「今、すっげえ自分がムカつくんだ」

「ムカつく、ですか」

「なんで俺、フェイトにあんな説教垂れてんだ？」

それは、行き場の無い怒りだった。

自分の言葉が彼女を動かせなかったということではなく、フェイトに向けて一生懸命に話をしていた自分自身に、突然激しい憤りを感じたのだ。

こんな想いをしたのは何故だ？ 俺は一体、何をしたんだ？

そんな疑問が湧き起こって、その答えが分からなくて。だから、更に怒りが増していった。

すると、神様が言うのだ。

「……………人を動かす台詞とか、説教とか、それって、言う人の人生そのものが語るから力があるんじゃないでしょうか？」

「人生？」

「どんなに強力な能力を持っていたても、どんなに的確なアドバイス

だとしても、どんなにその人を想っていても、言う人に何も積み上げたものが無ければ、それはただ空っぽなだけなのかも知れませんが、……なんて言ったらいいのかは僕もよく分かりませんが、あの二人を見ていたら、そう思いました」

俺は、もう一度二人の方に視線を送った。

まだ泣いてはいるが、ようやく落ち着いたアルフと、彼女をまだずっと抱き締めているフェイト。

あの二人が交わした言葉。「あたしは嫌だ」、「泣かないで」、「きつと頑張るから」。

これらの言葉は第三者からすれば、何のことを言っているのなんて分からない。俺には原作知識があって、彼女達のことを知っているから理解出来るだけで、あの二人の心が読めるわけでもない。だけど、端的であった彼女達の交わした言葉には、確かな絆を感じる事が出来たし、人の心を揺さぶるような力があつたと思う。少なくとも、俺には衝撃的だった。何故なら、自分の過ちを思い知ったのだから。

俺の知らない、いや、あの二人以外誰も知らない場所で、知らない時間で、あの二人には積み重ねてきたものがある。

だから互いの言葉は、とても強かった。

神様が言ったとおり、偉い言葉や説教とかつてのは、きっとその人が積み重ねた人生で語るものなんだ。だから人は動くんだ。

誰よりも優れていたって、決して間違いではないとしたって、どんなに想いが強くたって、それだけでは無力だ。

俺が自分に対して怒っている理由は、たぶん、自分が無力だから。

「神様……………」

「はい」

「ありがとう」

俺は決めた。

本気でフェイトを救ってやろう。

そのために積み重ねよう。

時間は過ぎ、空はすっかりと暗くなった。雲に隠れたり、かと思えば顔を出したり。月の無邪気さが窺える夜だ。

温泉宿から少し離れたところ。流れる小川に小さな橋が掛けられた場所へ、俺達三人はやって来た。

ここは、原作第五話でなのはとフェイトがぶつかり合う場所。

とうとう、ジュエルシードを賭けたなのはとフェイトの戦い、第二回戦が始まろうとしている。

俺達三人は橋の手すりに身を預けながら、小川の中で蒼い光を放っているジュエルシードと向き合っていた。

ここにやって来るまでの間、俺はフェイトに散々帰るよう言われたのだが、頼んで頼んでひたすら頼み込んで、ようやく仲間に加えてもらった。

仲間になる条件は、“邪魔をしないこと”、“なるべく近づかないこと”、“極力干渉しないこと”の三つである。

あれ、なんかそれって仲間じゃない気がする。

まあいい。とにかく俺は、今、こうしてフェイトと肩を並べているのだ。

「うっはぁ！　すごいねこりゃあ。これがロストログアのパワーってやつ？」

「ずいぶん不完全で、不安定な状態だけだね」

フェイトとアルフが言葉を交わしている間、俺は周囲を見渡した。たぶん、そろそろなのは達がやってくるんじゃないかと思う。

バルディッシュをジュエルシードに向けたフェイトは、封印の準備に入る。アルフもサポートの態勢をとり始めた。

さて、これからどうしたものか。

おそらくなのはとユーのが、間もなくここにやって来る。そして原作どおりに展開するのであれば、なのはとフェイトの戦いは、フ

エイトの勝利で幕を閉じるはず。戦いの後、なのはに対してフェイトが名乗り、両者は互いの存在を一層強く意識するのだ。

ならば、転生者である俺の出る幕は？

はつきり言って、今回俺の出番は全く無いだろう。介入する余地が無いのだ。

今後のためにも、少しくらい彼女から信頼を得ておきたいとは思ったが、今は我慢の時。あえて出来ることがあるとすれば、掛け声で応援するくらいだろうか。

うん、それでいこう。

まばゆい金色の光を放ちながら、バルディッシュが唸りを上げた。いよいよ封印の時。

「封印するよ。アルフ、サポートして」

「へいへい」

「よっしゃあ気張っていきましょ！ 二人ともアイトアイトーッ！」

「……………黙ってて」

バルディッシュからの光がジュエルシードを包み込み、しばらくの間けたたましい音が轟いた。

しかし、それも徐々に収まると、空中には穏やかで怪しい光を放つジュエルシードが、不気味なほど静かに浮いていた。

それを細い指でキャッチしたフェイトが、ぽつりと一言。

「……………二つ目」

その時だった。

駆け足の音が聞こえたので、俺達は視線を移した。

するとそこには、白いバリアジャケットに身を包んだ高町なのとは、フェレット姿のユーノがいた。

遂にお出ました。

「それを…………ジュエルシードをどうする気だ！？ それは、危険なものなんだ！」

ユーノの勇ましい台詞が聞こえてくる。しかし。

「さあねえ。答える理由が見当たらないよ」

沈黙するフェイトに代わり、アルフが不敵に返事をする。

そして言い終えた後、アルフはなのは達を鋭く睨み付け、殺気を発しながら肉体を狼形態に変身させて、夜空に向かって吼えた。

ここまで原作どおり。ではこちらも予定に沿って、なのはとフェイトが戦い終わるのを待つとしよう。

フェイトとアルフの邪魔にならないよう、俺は橋の片隅に寄って身を縮めた。

しかし、その時だった。

「待て！」

「え？」

「なに？」

なのはとユーノの更に後方から、予想もしていなかった人物がやって来てしまったのだ。

「まさか……………クロノ!？」

何故奴がここに？　しかし、そんな疑問もすぐに解けた。

今思い返してみれば、クロノもこの温泉に参加していたのだ。ジユエルシードの放つ力と、フェイト達の魔力に気が付かないわけがない。

しかもクロノは、黒のロングコートタイプのバリアジャケットに身に纏い、銀の籠手に包んだ手で自身のデバイス『S2U』を握り締めていた。思いつきりやる気マンマンじゃないか。

「君達、武器を捨てておとなしくしてもらおうか!？」

まずい。非常にまずい。

何がまずいって、あいつの登場というだけでも充分原作とはかけ離れた展開だと言うのに、このまま三つ巴の戦いが始まってしまったのは、リリカルなのはという物語自体が終わってしまうかも知れない。

クロノ・ハラウン執務官は、非常に優秀な魔導師だ。

桁外れに魔力値が高い高町なのはと、大魔導師プレシアによって

生み出されたフェイト・テストロッサ。

クロノはこの二人に魔力量こそ劣るものの、それを補って尚余るほどの技術と経験を持っている。実質、総合的な戦闘力言えば、なのはもフェイトも、クロノには敵わない。

それなのに、ここで三人がぶつかり合ってしまったえば、クロノが勝利してしまう可能性は高い。

そうしたらリリカルなのはは今夜が最終回だ。

だから非常にまずいのだ。

「神様！ どうしよう！」

「ど、どうしようって……とにかく、ここは逃げないと！」

それは俺だって真っ先に思いついたけれど。

フェイト達の方を見ると、バリバリ戦闘態勢なんですよ。

「と、とにかく！ このままゴチャゴチャの状態で乱闘はまずいと思うんだ！ クロノは誰かに狙いをつけているわけじゃなくて、この場の鎮圧が目的なんだから！ 好き勝手に動かしたら、まとめて一気に仕掛けてきそうだろう！」

「ってことは、この場は分散しなくちゃ！」

だったらこうするしかない。

「アルフッ！」

俺はアルフに声を掛けた。

彼女は視線こそなのは達から外さないものの、尻尾を一度振って反応を示した。

それを確認した後、すぐさまアルフの隣に駆け寄り、耳元で囁いた。

「アルフ、聞いてくれ！」

「一体何なのさ。戦えない奴は下がってなよ」

「目の前の白い魔導師はフェイトが目的だ。だから、彼女はフェイトに相手をさせよう」

「あんた、何勝手に仕切ってるんだい？」

「聞けって！ そんなもってあっちの黒くてチビで偉そうでリア充

でオリ主みたいな奴は手強い。フェイトなら接戦も出来るだろうが、白いのと二人同時に相手をさせるのは厳しいだろう。だからあいつはお前が食い止める」

アルフがクロノに勝てるとは思えない。しかし、アルフだってフェイトのためなら意地を見せてくれるだろう。

「……………で、あんたは？」

アルフが俺の方をちらりと見た。

「俺は——」

そう、俺にも役割があるんだよ。

「——あのフェレットを完膚なきまでに潰してやるさ」

クールな口調でそう言い放つと、アルフの鋭い視線がますますきつくなった。

「人間のあんたが、あんなちっちゃい奴を、完膚なきまでに」

「え、いや！ 別に相手を見て選んだわけじゃねえよ！ 第一あのフェレットは魔法を使うんだぞ！ 俺からしたらすげえ強いんだよ！」

「ふーん」

チクショウ。俺にチート能力の一つでもありゃあ、ここで無双して解決なのに。

しかし、無い物ねだりをしている場合でもないだろう。

やるしかないんだ。

根性だ、俺！

「まあ、様子を見る限りじゃあ、あんたの言う通りにしたほうがいいだろうねえ……………フェイトにはあたしから念話を送っておくよ」

「おう、よろしく！」

それから俺がフェイトの方に視線を送ると、アルフからの念話を受けたフェイトが頷いて合図した。

「じゃあいけますか！」

「ふん、しっかりとやりなよ。“フェレット相手に”ね」
何とでも言え。

緊張で汗が溢れてくる額を一度拭くと、俺の隣で心配そうに見ている神様の姿が目に入った。

怖いよ。俺だって魔導師相手に戦うのは怖いよ。ましてや俺には魔力が無いんだから。

だが、やるしかない。

この三局の戦い、きっちり終わらせてやる。

See you next time.

NEXT9…転生オリ主として

静かな森の中。穏やかな月光が降り注ぐ空の下。

そんな中で俺達が放つ場違いな雰囲気は、明らかに異質だった。

敵意。殺気。困惑。正義。そして願望。

それら全てが、この場に在る者達から強く溢れ出ている。

先に動いたのは、殺気を放つ者だった。

「あたし達の邪魔をするなら、ガブツといくよっ！」

そう言ったアルフは、身を屈めて両腕を地に着け、四つん這いの姿勢をとった。それと同時に、彼女の体が見るうちに変化を見せていく。

赤い体毛に覆われた四足の身体は猛々しく奮い立ち、白く鋭い歯は山脈のように並び、鋭い眼と眉間の宝玉が月明かりに照らされて怪しく光った。

狼の姿になったアルフは、爪を食い込ませながら地面を蹴って突き進んでいく。

それを迎え撃つのは、正義を掲げる者、クロノ。

クロノは前方にデバイスを構えると、アルフの猛進を正面から受け止めた。

「どうして君達がひろしと一緒にいる！？ 彼はこちらの関係者だぞ！」

「なるほど、あんたがあいつを監視している管理局員かい。仕事熱心なところ申し訳ないけどね……………この場はおとなしくオネンネしてな！」

アルフは咄嗟にクロノのデバイスを咥え、彼の身体ごとデバイスを大きく振り回した。

浮き上がった体を空中で捻り、デバイスを無理矢理振りほどくクロノ。そして着地と同時に、デバイスの先端でアルフに狙いを定めた。

間を置くことなくクロノから放たれた魔法弾は、短い風切り音を奏でながら宙を飛ぶ。

しかし、その魔法弾が彼女に届くよりも早く、オレンジ色の魔法陣がアルフの目の前で壁となり、魔法弾を弾いた。その隙にアルフは再び地を蹴り、獣特有の、獰猛で俊敏で迷いの無い足捌きを見せた。

喉が鳴り、牙が光る。瞬間的な助走からいきなりトップスピードへと切り替わる身のこなしを見せたアルフは、クロノの喉目掛けて、顎に並ぶ無数の刃をぎらつかせた。

その時。

クロノは片膝をたたむと、左掌を地面にあてがって足元に魔法陣を展開。すると、飛び掛かってくるアルフの真下から、青色に発光する鎖がまるで飛翔する龍のように伸びた。

喉、左前足、右前足、左後ろ足、胴を鎖が捕らえ、アルフを宙に吊り下げる。

「んぐっ！」

「観念しろ。君では僕に勝てない」

デバイスの先端に魔力光を集めながら、クロノはアルフに狙いを定めながら言った。

「アルフ！」

思わずアルフのもとに駆け寄ろうと、俺は足を踏み出していた。

しかしそこへ立ち塞がったのは、この状況に困惑しながらも自らの使命を全うしようとする魔法使いだった。

「君達はジュエルシールドが一体なんなのかを知っているのか!？」

自分達以外にジュエルシールドを集める者の存在に、困惑を隠せない彼の名は、ユーノ・スクライアだ。

高町なのはに魔法の力を与えた人物で、地球内では利便性を考えて小動物のフェレットに変身している、少年魔法使い。

彼は高い戦闘力を持っているわけではないが、それでも魔力の無い俺からすれば、充分脅威になり得る男だ。

そんな彼を前にして、俺は逃げるわけにはいかない状況であった。
「答えろ！ あのジュエルシードは危険なものだと分らないのか！？」

「うるさい！ 全部知ってるよ！ だけどこっちにはこっちの都合があるんだよ！」

俺が一気に駆け出していくと、フレットユーノは自分の真下に緑色の魔法陣を開いた。

さっそく魔法攻撃を仕掛けてくるらしい。丸腰同然の俺相手に、よくもまあ容赦無くやって来るもんだと思う。

まあ、向こうからしてみたら、俺の素性を知らないのだから当然なのだろうけれど。

とにかく、明らかに俺が不利である事実だけは変わらないのだから、戦い方の体裁を気にしている余裕は無い。

魔力の無い俺に勝機を見出す方法があるとしたら、まずは奴に魔法を使わせないことだ。

俺は声を張り上げて言った。

「ユーノ・スクライアッ！」

「な、何で僕の名前を！？」

「貴様！ なのはと一緒にお風呂に入ったな！？」

そう言い放った瞬間、ユーノが口をあんどりと開けたまま固まった。しかし、すぐに慌てた様子で弁解を始めた。

「ち、違……！ いや、いや、何でそんなことまで！ あ、いや！ あれは不可抗力という奴で！ それは！」

「自分がフレットであることを良い事に、正体が男の子であることを隠して、なのはやすずか、アリサ達の裸を見たな！？」

「きよ、極力見ない努力はしたさ！」

「美由紀や忍の裸も見たな！？」

「あっ！ えっ！ いや、ああああのそそそれはあ！」

ユーノがますます動揺し始めた。

原作におけるユーノは、なのはと一緒に暮らすことによって様々

な面で非常に恵まれているキャラクターだ。

そして、数ある幸運の中でも、とりわけユーノが恵まれていると思われるシーンがある。リリカルなのはシリーズファンにとって、最も羨ましいと思えるシーンに部類される、「俺と代われ!」と言いたくなるほどのラッキー。

そう、この温泉エピソードにおける、ユーノの女湯入浴シーンである。

ユーノはこの温泉エピソードにおいて、原作第一期に登場する女性キャラクターの約七割の人物と共にお風呂に入っているのだ。

「純朴で真面目そうなキャラクターの割には、やることがえげつないな! いやらしい奴め!」

「僕は決していやらしくなんか」

「黙れ! この……………エッチイッ!」

「う、うああああっ!」

足元の魔法陣を消失させながら、ユーノはがつくりと項垂れた。

その様子を見ていた神様が、ぽつりと呟く。

「ま、まさかユーノを無力化するなんて……………」

スピリチュアルバインド

「精神的に追い込むことで動きを封じる。名づけて精神捕縛だ」

ちよっと前までの俺ならば、このままユーノをボッコボコにしてやりたいと思うところだ。だが、生憎と今は、戦力を失った敵に構っている場合ではない。それよりもアルフのもとに急がなければ。

自責の念に体の自由を奪われたユーノを尻目にしながら、俺は再びアルフの方を見た。と、その瞬間、腰に巻いたマントが大きく靡いた。

何かが俺の横をものすごいスピードで飛んでいったようだ。

大きく捲れたマントを押さえながら、その“何か”を追うようにして視線を動かすと、その先にはバルディッシュを大きく振りかぶっているフェイトの姿があった。

先ほどまでなのはと対峙していたはずの彼女は、大切な友達に危機をもたらししているクロノへの、敵意に満ち溢れていた。

「アルフを助けに行ったのか!?　なのはは!？」

フェイトとは逆の方に視線を向けると、バリアジャケットのあちこちに傷を付けた状態のなのはが、ふわふわとユーノに近寄っていた。

なるほど。なのはとの勝負を投げ出して、アルフ救出に向かったわけか。

間もなくして夜空に甲高く響いたのは、フェイトのバルディッシュとクロノのS2Uがぶつかり合う音。両者のデバイスは、その細身を残像としてだけ残し、驚くべき速度で何度も振り回されていた。フェイトの猛攻はまるで木枯らしのように吹き荒ぶ。身を切りつけるように冷たくて鋭い一閃は、あらゆる角度から容赦なく相手の体を狙っていった。

一撃が届かぬならば、連撃。それでも逃げるのならば更なる追撃。対するクロノの攻防はまさに隙間風。たとえどんなに分厚い壁が立ちはだかっていようと、僅かにある小さな隙を逃さず突く。ぶつかってくるものを流麗な動きで受け流し、確かな道から着実に攻め上げる。

流れる風に乗る蝶のように。そして、仕留めるための一発を重んじる蜂のように。

魔法じゃない、純粋な体術による戦いを繰り広げる二人に、俺は心底驚いた。

特にクロノだ。原作知識の一端として、あいつが“強い”という情報だけは持っていたが、まさかここまでとは。

しかし、クロノの優勢をのんびりと眺めていられるほどの余裕が俺にあるのか？

答えは否だ。

フェイトを助けようと決めたんだ。原作知識を持つオリ主として、この先の運命を知る者として、この先の悲運を救いたいと願う者として、胸を張って彼女を助けることが出来るように。俺は、自分に無いものを積み重ねていこうと決めたんだ。

そう、フェイトを助けるための、悲しい運命を変えるための、精一杯の尽力を。

そんな時、フェイトとの激しい攻防を繰り返しながらも、クロノが俺の方をちらりと見ながら言ってきた。

「ひろし！ どうして君がこの子達と一緒にいるんだ！？ 彼女達は何者だ！？」

「クロノ！ 聞いてくれ！ 彼女達は決してお前の敵じゃない！ だから攻撃をやめろ！」

そうは言ってみたものの、フェイトに攻撃の手を緩める様子がないので、必然的にクロノの動きも変わらない。

それでも、徐々に戦況は変化を見せてきている。

フェイトが押され始めた。いつまで経っても埒の明かない事態を、クロノは何とか抑えたいと考えているはずだ。

だから、少しずつ戦況を変え始めているんだ。

そう、あいつはまだ本気じゃない。

「クロノ！ 頼むから話を聞いてくれ！」

「もちろん聞きたいが、そうさせてくれないのは彼女達の方だ！」
まずい。クロノが本気を出したら、いよいよフェイト達がここで捕まってしまう。

このままフェイトが、誰にも心を打ち明けないまま捕まってしまうたら、彼女は原作どおりの救いにすらありつけなくなるじゃないか。

それだけは駄目だ。彼女の運命を救いたくてやって来たのに、バッドエンドではどうしようもない。

俺は駆け出した。そして、地面に伏しているアルフに駆け寄った。アルフ対クロノの戦いがどうなったのかは分からない。俺は見えていなかったが、たぶんクロノに捕縛された後で魔法弾を撃ち込まれたのだろう。苦しそうに目を閉じながら、アルフは半開きの口から弱々しい息を吐いていた。

「おい！ 起きろ、アルフ！」

体を何度か揺すり、アルフの反応を窺った。

クロノとフェイトの戦いも長期化させるわけにはいかない。そう
なれば、まずフェイトに勝ちはないのだから。

今一番必要な行動は、この場の脱出だ。そのためには、アルフに
はもう少しだけ頑張ってもらわないと。

「アルフ！ 起きろ！ 逃げるんだよ！」

「う、うう……………」

何度か呼びかけていると、なのはとユーノが徐々に近づいてくる
のが見えた。

まずい。俺と今のアルフでは、なのはとユーノに抵抗するのも厳
しいかも。

そう考えていると、なのはが突然言ってきた。

「あ、あの！」

何だ？

「……………ど、どうしてジュエルシードを集めているの？」

なのはが、そう訊いてきたのだ。

そうだよ、そうだったんだ。

「私、どうしてあなた達がジュエルシードを集めているのかが知り
たいの。お互い何もお話出来ないままぶつかり合うんじゃないで、
ちゃんと事情を知りたい」

そうだよ、高町なのははこういう子なんだよ。彼女は、フェイト
と分かち合いたいという願望を抱いた少女なんだよ。無防備な俺達
を見たって、いきなり攻めてくるような子じゃないんだ。

助かった。非力な俺達が無理矢理戦うことにはならないみたいだ。
しかし。

「……………くそっ」

「話を聞かせて。お願い」

駄目なんだよ。今ここで落ち着いてしまうわけにはいかないんだ
よ。

あの時から、俺はずっと考えていたんだ。

アルフに連れられてフェイトと対面した。俺の口から出る説教の安さを思い知り、一体どういったものが人を動かすのか、どういったものが人を救えるだけの力になるのかも思い知った。

そしてそれから、ずっと考えていたんだ。

原作どおりにいけば、なのはとフェイトが分かり合えるだって？

原作どおりに？

原作どおりに進めたら、俺なんて要らないじゃないか。

何のために俺は転生してきたんだ。悲しい運命を救うためだろう。

フェイトの悲しい運命って、何だ？ 彼女が救われていない部分って、何だ？

フェイトとアルフの絆をこの目で見た後、彼女のために本気で尽力しようとした俺は、一体何をするべきなんだって。漠然としていた俺の役割を、俺は初めて真面目に考えた。

原作どおりに進めば、確かにフェイトは救われるのかも知れない。母の呪縛から解放されて、笑えるようになって。

何よりも、高町なのはという友達が出来て。

でも、それは彼女が最初から望んだ展開なのだろうか。

違う。原作どおりの展開は、たまたまフェイトにとって良い方向に向かったという結果論に過ぎない。

フェイトは、もっといろんなことを望んでも良かったんじゃないのか。そしてそれらが叶えられても良かったんじゃないのか。

彼女が本当に望むこと。

大好きな人に傷つけられたいわけがない。

大好きな人に嫌われたくなんてない。

大好きな人にいなくなってほしいわけがない。

そう、原作どおりに進むってことは、フェイトが本当に望んでいることを見離すってことじゃないか。

俺がいるのに。原作にわざわざ介入しようとしている俺がいるのに、そんなこと出来るわけないだろう。

そう思った瞬間、少し前から感じていた俺の中の矛盾が、とても

ちっぽけに見えた。

なにが原作尊重だ。神様に気を遣って、理由も分らない自意識を大事にして、原作の流れをいちいち気にしていたことが馬鹿馬鹿しい。

やるべきことが見つかった。転生オリ主としての、本当の役割が見つかった。

フェイトが幸せになるならば、俺は何だってしてやろう。

そうだよ。

「……………プレシアだよ」

「え？」

「フェイトを救うってことは、プレシアを救うことなんだよ」

そう、だから。

ここでフェイトがクロノ達管理局に捕まるわけにはいかないんだ。もうここまで来ると、この後なのはとクロノはすぐにでも協力態勢に入ってしまう可能性が高い。

そんな状況でフェイトが向こう側に行ってしまったら、管理局はその立场上、フェイトを捕まえてはいけない。

そうになったら、フェイトが望む幸せを作るのは難しくなってしまう。

それを思うと、俺は、なのはの問いに答える気にはなれなかった。こんなところでなのはとフェイトをどうしようなんて考えている場合じゃない。

プレシアさえ救えれば、きっとフェイトを救える。

そんな中で俺は、果たしてなのはに絡む必要があるのかという疑問が浮かぶ。

確かに原作第一期は、フェイトとなのはの物語だけど。しかし、何をするべきかという最終目標が明確なのだから、そこに向かうための道のりは、これから築いていってもいいはずだ。

そして、その道のりの中に、なのはとの接点は絶対に必要なのだろうか。

「アルフ！」

「なんだい！？」

「逃げるぞ！ フェイトと一緒にこの場から離れる！」

選んだ道は、原作の形を大きく崩すためへの第一歩だった。

アニメの世界にやって来たから特別だとか、俺が主人公だったらこうしてやるとか、原作に介入して自分の力を見せ付けたいだとか。俺は、甘かった。

ようやくアルフが起き上がると、彼女はさっそく足元に魔法陣を開いて、魔法発動の準備に入った。

「ここから離れられる程度の場所まで転移するよ！」

「よし、それでいい！」

すぐにフェイトにも知らせないと。俺はフェイトに向かって叫ぶとした。

しかし。

「そうはさせない！」

その声と共に、突然上空から魔法弾が降り注いできた。

思わず頭を低くしてしまったので、叫んでいられない。

空を見上げてみると、そこには魔法弾を放った人物が険しい表情で俺達を見下ろしていた。

「ひろし！ それに君達全員、この場から逃がすわけにはいかない！」

まあ予想はしていたが、あの男がそう簡単に俺達を逃がすはずがないよな。

クロノの動向に意識を向けながら、俺はアルフに言った。

「フェイトに念話で伝えてくれ」

「なんて？」

赤毛に覆われた三角耳の近くに顔を寄せ、そっと囁く。

それを聞いたアルフは僅かに首を傾げながらも、小さく頷いてからフェイトの方を見た。

そしてフェイトが小さな反応を見せた。それは、念話の指示を了

解した合図。

合図を返した後、未だ止まらない攻防の中で、フェイトがクロノに言った。

「あそこにいる白い魔導師は、ロストログアを持っている」

「なに？」

「あなたは、ひろしに予言されたでしょう？　——」

そうだ。クロノならば覚えているだろう、俺が言ったことを。

「——次元震が起きるって」

「なっ！」

クロノの立場から考えても、あいつが最も恐れていること、そして最も食い止めたいことは、目に見えている。

俺からの予言も合わせて考えさせれば、あいつは、自分がやるべき優先事項をすぐに決めるはずだ。

案の定、フェイトの攻撃を防ぎながらも、クロノの視線がちらちらとなのはに向けられ始めた。

「よしアルフ、今だ」

「了解！」

体の周囲に魔法弾を作り出したアルフは、それらの照準をなのはに定めてすぐさま発射した。

「止めろっ！」

そう叫んで飛び出したのは、俺の予想通り、クロノだった。

不吉なキーワードに頭を埋め尽くされたクロノにしてみたら、なのははまさに破裂寸前のダイナマイトと同じなのだろう。

なのはの前まで猛スピードで飛び、彼女を庇うようにして魔法陣を展開するクロノ。

そして、その隙にフェイトが俺達のもとへと降り立つ。

「そんじゃ、いくよっ！」

アルフの合図と共に、俺達は転移魔法の光に体を包んだ。

「待て！　ひろし！」

悪いな、クロノ。

エイミィさんによろしく言っておいてくれ。

転移魔法を抜けてから、俺達三人は少し休憩を取った後で、フェイトの家へと向かうことにした。

と言っても、空を飛べる二人に付いていけるはずもない俺は、狼状態のアルフに運んでもらうばかりなのだが。

しかしアレだな。狼の背中に跨るといのは初めての経験だが、何と言うか、その。

「ケツとかアソコが、チクチクするな」

「何か言ったかい？」

「いや、何も」

アルフに気付かれたら、ソッコーで突き落とされるな。とりあえず、落ち着いたら服が着たいと思う。

「あの」

突然、アルフと並行して飛んでいるフェイトが話しかけてきた。

「え、な、なんでございましょう？」

初めてフェイトから話しかけられた気がする。ちよつと緊張してしまう。

「えっと……」

「あ、名前？ 教えてなかったっけ？ 俺は碎城院聖刃。セイバって呼んでくれればいいよ」

「でも、あの管理局が“ひろし”って」

本当に、クロノと接点を持ったのは失敗だったみたいだな。

「じゃあひろし」

結局そっちかよ。

まあ、この際どうでもいいか。

それよりもフェイトが何かを言い掛けているようだが、俺には彼女の言いたいことが何となく分かった。

そりゃあな。いくら俺が魔力の無い、戦力外の男だとしてもだ。

あの場を逃れたのは、この俺の機転があつてのことなわけで。

でも別に俺は、それを鼻に掛けたりはしないのだ。別に感謝されることぐらい、いくらでもしてやるさ。

気にするなつて、フェイト。

でも、もしかしたらここで優しく笑いながら「いいよ、別に」とかって言っちゃうと、フェイトが俺に惚れちゃったりとか？ マジか、そうなのか！

「あの白い子」

「気にするなつて、別に！」

「気にするよ。大事なことだもの」

ああ、そうですよね。

フェイトは気を取り直したように、再び口を開いた。

「あの白い子も、ジュエルシードを集めているんだよね？」

「あ、ああ。まあね」

「……………また、ぶつからなくちゃいけないんだ」

そう言ったフェイトの顔は、悲しげだった。

原作アニメでは、避けられない衝突を愁うのは、いつだってなのはだった。それは当然だ、なのはが主人公なのだから、彼女の視点がメインだったわけだし。

だけど、やっぱりフェイトも。

「立ち塞がるなら、仕方が無いけど」

口ではそう言っているけど、フェイトが思っていることなんて丸分りだ。

フェイトの側に付くことを選んだということは、フェイトの、原作には映らなかった顔だつて見なくちゃいけないってことだ。

そういう顔を見る度に、きっと俺は改めて誓うんだ。

この子を、フェイト・テストロッサを助けたいって。

長い一日がもうすぐ終わる。

今日という日を俺は、いつかきつと振り返るんだろうな。

その時は必ず、笑って思い出せるようにしよう。

See you next time.

NEXT10…未知なる道へ

フェイトとアルフに連れられてやってきた場所は、街中に聳え立つ、とある高層マンションの中だった。

このマンションは、地球にやって来たフェイトとアルフが住処として使っている場所。しかし、何だか様子がおかしい。いわゆる街の喧騒ってやつが、全くと言っていいほど届いてこないのだ。

フェイトの暮らす階層がもの凄く高い所だから、音が届かないのだと言われればそれまでなのだけれど、そうじゃなくて、もっと根本的な部分でおかしな雰囲気を感じられる。

マンションには他の住人がいないのだろうか。フェイトの部屋をはじめ、この建物に足を踏み入れた瞬間から、ここに満ちている空気が普通のそれとは違うものだと分かった。

この感じ、どこか別の場所でも。そう、それは、俺が初めてなのはとの接触を試みた時だ。榎原動物病院でジュエルシードの暴走体が暴れていた時、民間人に気付かれないための結界が張られていたつけ。あの結界の中で感じた、まさしく異世界の中に放り込まれたような雰囲気、このマンションにも満ちていた。

「フェイト、このマンションって？」

「こういう魔法なの。普通じゃまず気付かれないから」
案の定そうみたいだ。

俺の質問に対してフェイトは、短く答えただけで話を終わらせた。
「ま、まあな。それぐらいはしないと回覧板が回ってきたりとか、受信料の請求とかがくるかも知れないしな」

笑いながらそう言うと、フェイトは一度だけ俺を見て、少し首を傾げてからそそくさと部屋の奥に入っていた。あれ、俺の言っていることは難しかったかな。

そんなところへ、アルフがそっと近づいてきた。

「あんた、本当にフェイトを救ってくれるんだろうね？」

向けられる視線はまだまだ疑念に満ちている。

だが、二人のアジトまで連れて来てもらえたということは、疑われてばかりというわけでもないのだろう。

俺は大きく頷きながら、しっかりとアルフの目を見返してやった。「大丈夫だ、俺に任せろ。フェイトはプレシアに対して盲目的なまでに尽くしている。しかし、今のプレシアはフェイトをただの道具としか思っていないんだ。そんなプレシアを俺が変えてやろう。そうすれば、必然的にフェイトは救われる」

はつきりとした口調でそう言い切ると、アルフは視線を少しだけ和らげた。

そしてそっと声を漏らしたのだ。「うん」、と。

返事をしたアルフは、テーブルの隅に置いてあったドッグフードの箱を抱え込み、ベッドの上であぐらをかいた。

「でも本当に分からないねえ。あんた、何でプレシアのことまでもそんなに詳しいんだい？」

手の平いっぱいに掴んだドッグフードを頬張りながら、アルフが訊いてきた。

まあ、彼女達からすれば当然の疑問だと思う。

「俺は……そうだな。救われるべき者達を救うためにやって来た、運命の神に選ばれし者、とだけ言っておこうか」

嘘ではないはずだ。神様に選ばれた者ってのは、間違いじゃないんだろう？

堂々と言い切った後で、そっと神様の方に視線を向けてみた。すると、神様は顔を赤くしながらそっぽを向いて「よくそんなこと恥ずかしい台詞が」と呟いていた。え、何？ その反応は。

「運命の神様に選ばれた、ねえ………だったら、その神様に直接フェイトを助けてって言った方が早そうだね」

ごもつともなご意見で。俺がもう一度神様を見ると、神様は顔を引き攣らせながら壁の方を向いて「何も出来なくてすいません」と呟いていた。え、もしかして傷ついてる？

しばらくすると、部屋の奥からフェイトが再び姿を現した。彼女は、黒一色のワンピースに小さな体を潜らせている。

そうか、隣の部屋で着替えていたのか。くそ、俺としたことが。何でこんなところでアルフと喋っちまってるんだ。うっかりを装って隣の部屋にでも入ってくれば良かった。

まあいい。あのフェイトと一つ屋根の下にいただけは変わらないのだから、そういうラッキーに出会えるかどうかは今後に期待するでしょう。

「私服似合うな！　かわいいよ！」

「ひろしの服を調達してくる。アルフ、ちょっと留守番をお願い」
無視ですか。原作フェイトってこんなに冷たい娘だったっけ？

フェイトが玄関を出て行き、室内にはアルフの食事する音だけが響き渡った。

リビングを見渡してみても、家具らしい家具は見当たらない。アルフが座っているソファとその前にあるローテーブルぐらいだ。その他に目に付くものは特に無い。

寝室を覗いてみたが、ベッドがあるだけ。フェイトの香りに飛びつきたい気持ちはあるが、アルフに怒られるかもしれないから今は我慢。同様の理由で風呂場も我慢。

窓から外を見てみたが、夜闇を照らす町の鮮やかさが延々と見えるだけで、綺麗だけどずっと見てるだけってのもきつい。

正直なところ、やることに無い。アルフと何を喋っていいのかも分からない。

俺はふらふらと部屋の中を彷徨い始めた。と言っても、狭いわけではないが馬鹿みたいに広いわけでもない。ぐるりと歩き回ったつてもものの数十秒で同じ場所へ戻ってこれてしまう。

「落ち着きの無い奴だね。じっとしてなよ」

やっと話しかけてくれたアルフは、そんなことしか言わない。俺は彼女の言葉は無視して部屋の中をあちこち見渡していた。

そんな時だ。部屋の天井をふと見上げてみると、ロフトが上がっ

た先にある簡素なデスクを見つけた。

そしてその上で、デスクのスタンドライトに照らされている写真立てが目に入る。

アレは、もしかして。

「あ、こら！ 勝手に何してるんだよ!？」

俺はロフトを上がっていき、目に付いた写真立てを手にした。

やっぱり。そこに挟まれている写真は、原作のアニメにも幾度か登場していた一枚の写真だ。

プレシアと、その愛娘が写っている写真。二人とも幸せを絵に描いたような笑顔だ。

「それ」

俺の後を追ってきたアルフが、俺の手の中にある写真を見て言った。

「フェイトと一緒に写っている女が、プレシアだよ」

「知ってるよ。本当に幸せそうに笑ってるんだな。フェイトをただの道具扱いしている人には見えない」

本当にそうだった。

そこに写っているプレシアの笑顔は、本当に幸せそうなものだった。

こんな顔をすることが出来るプレシア。だが、彼女がこの笑顔を見せたのは、フェイトではなくアリシアだ。アリシアのクローンとして作られたフェイトのことは、ジュエルシードを集める道具としてかかっていない。姿だけしか似ることのないフェイトを、彼女は娘と思わなかった。

それは、ある意味で真理を突いているのかも知れない。姿ではなく、形ではなく、その中身にこそ価値を見出すプレシアの想いは、もしかしたら正しいのかも知れない。

しかし、フェイトにとっては間違いないプレシアが母親なのだ。ましてやアリシアの記憶までも転写されている彼女にとって、プレシアに抱いた愛情は紛れも無く本物。

姿も中身もプレシアの娘であると信じているフェイト。

姿ではなく中身でフェイトを拒絶するプレシア。

原作第一期において、最も悲劇的な点はここだと、俺は思っている。

それを一体どう救うべきか。

俺の視線はじっと、写真の中にいる笑顔のプレシアに向けられていた。

「……………どうしたもんかね」

改めて考えてみると、原作って本当に絶妙な具合でやるせない設定だな。俺は写真の中のプレシアを通り越して、原作者に直接問いかけるつもりで呟いていた。

愛する我が子を失った母親の気持ちって、どれぐらいのものなのだろう。プレシアは、自分が失くしたものの大きさをよく知っていて、だからこそその事実が受け入れられなかった。受け入れられなかったんだ。

だからあんなにも盲目的になって、藁にも縋るような思いで小さな可能性に賭けて、ジュエルシードを集めたんだろう。

原作中で、彼女はジュエルシードを集めることがアリシア蘇生に繋がると信じていた。

だけど、本当に信じていたのかな。彼女だって解っていたんじゃないのかな。それに関しては、原作クライマックスでもクロノが指摘していたはずだ。

そういうことならば、彼女がフェイトを娘だと思えなかったことは間違っていないかったのか。

もしそうだとしたら、どうやってプレシアを、そしてフェイトを救う？ どうすることが彼女達を救う答えとなるんだ？

それはもちろん、これしかない。

フェイトは、彼女の娘であると思いたままでもいい。たとえ真相を知らされても、彼女はちゃんとそれを受け入れて、なおもプレシアを母であると信じ続けられたのだから。

そしてプレシアは、フェイトをアリシアだと思う必要なんてない。全てを受け入れてもなお、娘だと言い張るフェイトに、笑いかけてくれればいいんだ。フェイトをアリシアの代わりとする必要なんてないから、せめて彼女の頑張りを認めてあげてほしい。彼女の強さを褒めてあげてほしい。彼女の愛に報いてあげてほしい。

たったそれだけ。言葉では簡単なようで、でも、二人にとってはとても難しいこと。

だけど、二人が救われる展開として俺が思い描くのは、こうなんだ。

やっぱり、これは彼女達の気持ちが一番重要となる問題だよな。俺がどんなに強力な能力を持っていたとしても、どんなに良い言葉を言えたとしても、たぶんそれだけじゃ解決はしない。

二人の気持ちを繋ぐポジションでいようとするのなら、やはり両者を深く知らなくちゃ駄目だ。原作知識としての“知っている”ではなくて、フェイトとプレシアの気持ちを深く、深く読み取った上で、絶妙のタイミングを作り出してやらなくちゃいけない。

それが、俺に出来る二人の救済法だと思うのだ。

だからそのためにも、俺は早い内にプレシアとも接触しておかなくちゃいけない。

「なあ、アルフ」

「ん？」

「『時の庭園』に……プレシアのいる場所に行きたいんだけど」

俺がそう言うと、彼女は少し難しそうな顔をしてから返事をした。

「あたしでも頑張れば行けるんだけどねえ………あそこは次元空間の中でも強力なエネルギーが渦巻くところにあるから、そうそう簡単に転移出来るわけじゃないんだよ」

「そうなのか」

「一番確実で安全な方法は、フェイトに連れて行ってもらうことだね」

俺もそうじゃないかとは思っていたが、おそらくフェイトは俺が

プレシアに会うことを簡単に了解はしないだろうな。

とすると、フェイトが回収したジュエルシードを持ってプレシアに中途報告する時か。

しかしそれまで待てるか？ 温泉エピソードにクロノが加わったせいで、なのはサイドの動きはもう俺にも読めない。そんな状態でフェイトとなのはの三度目の接触を待つのは、不確定要素が多くて不安だ。

物語をハッピーエンドに持っていくならば、やっぱり行動は早いほうがいい。

「近いうちにプレシアのところに戻る予定は無いのか？」

「んー、あと一個ぐらいジュエルシードを獲得したら、一旦報告に戻るとか言ってたかねえ？」

ということはやっぱり、なのはとフェイトの三度目の衝突となる、市外地内での戦いに出るということじゃないか。

だからそれは危険なんだ。今原作どおりに進んでも、向こうにはクロノがいる可能性が高い。

「んあー、どうしよう」

俺が頭を掻いていると、後ろからアルフに肩を叩かれた。

「ん、何？」

「あのさあ、あんたは何故かいろいろと知ってるから、ちょっと訊きたいんだけど」

なんだろう、改まって。

「プレシアは、ジュエルシードを集めて一体どうしようってんだい？ 管理局員まで関わってきたとなるとマズイと思うんだ。この場所だっていつバレるかも分からない。それなのに、フェイトに危ない思いをさせるのは嫌なんだよ……………一体ジュエルシードを集めて、プレシアは何をするつもりなんだ？ どうしても集めなきゃダメなのかな？」

「いや、集めなくちゃいけない理由は……………」
言っただけのものだろうか。

フェイトとアルフは知らないことだが、プレシアは集めたジュエルシードの力を使って、過去に失われた地『アルハザード』の秘術を手に入れようとしている。そしてその術で、死んだアリシアを蘇らせようとしているんだ。

しかし、彼女の目的を伝えるということは、フェイトがアリシアのクローンであることを明かすことに繋がる。

そんな残酷なことを今教えるなんて、やっぱり出来ない。

俺が答えに困っている、その時。

「集める理由はあるよ」

突然フェイトの声が聞こえて、俺は写真立てを慌てて元に戻した。
「フェイト、おかえり」

「…………ジュエルシードを集める理由は、母さんがそれを望んでいるから。そうすれば母さんが喜ぶから。理由はそれだけで充分だ」
それだけ言ったフェイトは、紙袋に入った男物の着替えをソファの上に置いてから、寝室の方に消えていった。

アルフがその後を追っていく。

残された俺は、もう一度だけ写真の方を見た。そして写真の中に、恨めしさを込めて言った。

「分かっちゃいたけど、やっぱり簡単にはいかないよなあ」

それから数日が過ぎたある日。遂にその時がやって来た。

夜、街中にジュエルシードの気配を感知したフェイトとアルフに連れられて、ビルの屋上へと上がっている俺。

眼下には海鳴市の町並み。そう、ここは原作第六話の舞台となる場所。なのはとフェイトが三度目の戦いを繰り広げる街の中だ。

ジュエルシードの場所が大まかなところまでしか特定出来ないということで、フェイトはジュエルシードを強制的に暴走させようと準備を整えた。

アルフがフェイトを気遣い、フェイトがそれに応える。

そんな二人のやり取りの横で、俺は心臓を高鳴らせていた。

結局、なのは達の動きもどうなったのか分からないまま、この展開を迎えてしまった。クロノはどのように動いてくるだろう？ おそらくリンディ提督率いるアースラチームも戻ってきているし、なのはとユーノがどのような立ち位置となったのかも気になる。

気のせいだろうか、何だか嫌な予感がするな。

「な、なあフェイト、アルフ。今日はジュエルシードの回収、止めとかないか？」

「そんな気は無いから。あの白い子に先を越されちゃう前に、私達が回収しないと」

俺の意見を却下したフェイトに、今度はアルフが言う。

「フェイト、本当に無理は止めとくれよ。あの白い奴ならまだしも、管理局まで動いているんだからね」

「大丈夫だよ。私は強いから」

俺の中の嫌な予感が、また大きくなった気がした。

しかし、そんなことを知る由も無いフェイトは、遂に行動を起こした。

空に暗雲が立ち込める。夜の闇を更に濃い黒が覆い始め、海鳴の町を飲み込みそうな勢いで雲が広がっていく。

この暗黒の下では、背の高いビルが立ち並ぶ姿も禍々しい魔城の様相へと変わってしまうみたいだ。

そしてそんな景色の中、目の覚めるような蒼い光が空に上っている、雲さえも貫いた。その様子はまるで、天から垂れる蜘蛛の糸。

ジュエルシードの光だ。

そして、その糸を我先にと掴もうとするのは俺達と、なのは達。

「見つけた」

ジュエルシードの位置を特定したフェイトは身構えた。俺も急いで、狼形態のアルフにしがみ付く。

だがフェイト、気をつけてくれ。欲望のままに蜘蛛の糸を求める

者達は、結局落とされてしまっただよ。

俺達は一斉にビルの上から飛び降りていく。

ビルからビルへ。屋根から屋根へ。風となった俺達は、蒼い光の光源へと近づいていった。

そして。

「フェイト！ 向こうに！」

「うん、見えてる」

なのはとユーノがいた。なのははレイジングハートを前方に構えて、暴走するジュエルシールドを抑えようと砲撃態勢に入った。

そしてフェイトも同じように、魔力を練りながらバルディッシュを構える。

挟まれた宝石は、不気味なほど静かで冷たい光を放ちながらも、成す術もないまま宙に浮き続けていた。

「撃ち抜け、轟雷——」

フェイトの口から紡がれるのは、開戦の合図。

「——サンダースマッシャー！」

バルディッシュから黄色の閃光が放たれるのと同時、遠くにいるなのはからも桜色の光線が伸びてくるのが見えた。

そしてお互いの魔法は、全く同じタイミングでジュエルシールドに辿り着いた。

歯を食いしばるフェイトが、バルディッシュを更に強く握り締める。おそらく、魔力を遠慮なく注ぎ込んでいるのだろう。

誰もが眼下のジュエルシールドに視線を注ぐ中、アルフの背中にいる俺は、ふと思いついたように空を見上げた。

それは、嫌な予感が強まったからだ。

何で、この場にクロノがいない？

しばらく空を見上げ続けると、つつい声を漏らしてしまった。

「あ」

その声を聞いたアルフも、上空に視線を向けた。

そして、俺とアルフはほぼ同時に目を大きく見開いた。

「フェイト！ ダメだ！」

「逃げて！ フェイト！」

俺達の声聞いても、フェイトはこちらを見なかった。何故なら、ちようどジュエルシードが沈静化したからだった。

その瞬間。

「捕まえたぞ」

クロノがそう言った気がした。

上空でずっと魔法陣を開いていたクロノ。その姿を俺とアルフが確認してから間もなくして、フェイトの両腕両足首に、青色の魔力光を放つ捕縛魔法^{バインド}が掛けられた。

「フェイトオッ！」

そして、アルフの四足と、俺の胴にも。

やっぱり、何もしてこないわけが無かった。

「悪いが、君達を拘束させてもらう」

上空から降りてきたクロノは鋭い視線で俺達をじっと見た。

「クロノ、お前……」

「ひろし、君のご両親が心配していたぞ。それに学校の皆もだ」

動けない俺達の下で、こちらをちらちらと気にするようにしながら、なのはがジュエルシードの封印を始めた。

「くっ！」

無理矢理動き出そうとするフェイト。しかし、手足を縛るバインドは、ピクリともしない。

「無駄な抵抗は止めるんだ。君たち三人を、このままアースラに連行させてもらう」

そう言うのとほぼ同時、俺達の真下に大きな魔法陣が展開されていった。魔法陣は白い光を放ち始め、それは徐々に強くなっていき、目を開けることすら困難なほどになった。

耐え切れずにぎゅっと目を閉じると、体が少しだけ冷えていく違和感に襲われた。

しかしそれも一瞬の出来事で、違和感はすぐに消え去っていく。

そして、それと同時に足の裏が固い何かに触れていることが分かった。これは、床の上？

少しずつ目を開いていくと、そこはいつの間にか、次元空間航行艦船アースラのブリッジだった。

動き出そうとしたが、バインドがまだ外されていない。隣のフェイトやアルフも同様だった。

「放せ！ 放せえっ！」

アルフが吼える。フェイトも必死の形相で動こうともがく。

そんな中、一緒に転送されてきたクロノとなのはとユーノが目に入り、俺は一応訊いてみた。

「クロノ、これ、解いてもらえないか？」

「それは出来ない」

そりゃそうだよな、やっぱり。

フェイトとアルフは一生懸命体を動かしていたが、俺は諦めておとなしく立ち尽くしていた。

すると後方から足音が聞こえたので視線を向けてみると、そこにはリンディ提督とエイミィさんが立っていた。

エイミィさんの表情は少し戸惑っているようにも見える。俺もなんだか顔を合わせづらいな。

「さて、訊きたいことは山ほどあるのだけれど………とりあえず、三人には部屋を用意したわ。しばらくはそこに入ってもらいます」

監禁というわけか？

バインドで動けない俺達は、そのまま運ばれ始めた。

されるがままの俺は、リンディ提督の目を訴えかけるように凝視した。

初めて会った頃の不審な俺に良心的な理解を示してくれたリンディ提督なら、何とかしてくれるかも。そんな期待を抱いていた。

だが。

「リンディ提督……」

彼女は固い表情を微動だにすることなく、連れて行かれる俺達を

じつと見つめ続けていた。

「あ、あの！ 話を聞いてほしいんだ！ 頼む！」

俺の叫びに答える者はなかった。

そう、フェイトを目の当たりにしている高町なのはでさえも、何も言わない。

何故喋りかけない。

なのは、フェイトがそこにいるんだぞ。彼女と話をしたがっていいだろう。

嫌な汗が額を伝った。

焦っているか。どうしようもない俺は情けないことに、いつの間にか神様へ視線を送っていた。

しかし。

「ごめんなさい、ひろしさん。僕は干渉出来ないんです」

俺と同じような表情で、彼は俺を見て言った。

何故こうなった？ 俺が原作尊重の意思を破棄して、なりふり構わずにフェイトを救おうとしたからか？

原作を壊す俺に対する罰か？ 報復か？

今までも何度か思ってきたが、改めて感じた。

本当に、原作は俺の敵となって立ちほだかるんだな。

出来ることならば時間を巻き戻したい。しかし、それは叶わない。一度踏み外した道はもう引き返せないんだ。

物語は、誰も知らない道を踏み出し始めてしまったんだ。

See you next time.

NEXT11..腐れ外道のお前達に告ぐ

俺達を拘束するためにアースラ内に用意された部屋は、極めて質素なものだった。硬いシングルベッド以外には何もなく、見ていると退屈になってしまいうほど無個性な照明器具が、だんまりと室内を照らし続ける。狭いわけではないが、本当に閉じ込めておく“だけ”の部屋なんだというのが、率直な感想だ。

まあ、現在の自分の立場を考えれば、こういう部屋に閉じ込められるのも仕方が無いと言える。

ただ一つ、どうしても納得出来ないことがあった。

それは。

「どうして俺だけ部屋が別なんだ!？」

俺は神様に向かって言った。それは明らかに八つ当たりだ。

「ど、どうしてでしょう? フェイトとアルフは同室なのに、ひろしさんだけ……ね?」

「本当だよ! どうせ閉じ込めるなら三人同室でいいだろう!」

「やっぱり男女は分けるものなんですかね?」

「そんなの差別だ! ああ、今頃フェイトは、俺が傍にいないから不安で怖くて寂しくて泣いているかもしれないのに!」

「えっと………そ、そうですね! うんうん!」

「寂しがるフェイトの肩をそっと抱き寄せて、肌と肌を摺り寄せちゃったりなんかして、そんでもって俺がいるから安心しろとか何とか言ったらその後はもう二人見つめあっちゃって世界は誰にも邪魔されないところヘキヤー!」

「……………やっぱ別々で正解かも」

フェイトとのラブチュッチュなイメージに悶々としてみると、神様が少し間を空けてから再び口を開いた。

「あの、ひろしさん?」

「ん? 何?」

「えっと、その……………」

突然どうしたというのだろうか。やたらと改まった様子で声を発した神様は、しかし、なかなか続きを言おうとしない。きよろきよろして視線があちこちを泳ぐ様は、何かを探している風でもあった。いや、実際に探しているのだろう。言いたいことがあるのだけはどうて切り出そうかと考える時、彼はああして周囲を見回して、最初の一言を探し出す。

「ああもう！ 何だよ神様、言いたいことはスパツと言えって！」

「は、はあ、それじゃあ……………」

意を決するかのように、神様は一度だけ深く息を吸い込み、視線を真っ直ぐと俺に定めて言った。

「正直なところ、心配なんです。本当にひろしさんが、その……目的を達することが出来るのになって」

これは痛いところを突いてくるな。

確かに俺はこんな状況だ。フェイトの運命を救ってやると言いながら、今、俺やフェイトはまずい状況に立たされている。

頭の硬いクロノ達のことだ。いかなる理由があろうとも、フェイトを捕まえたら間違はなく、然るべき処遇を宣告するに違いない。そうしなければのとフェイトが分かり合う間もなく、二人は離れ離れとなってしまいかねない。それじゃあ救うも何もあったものじゃない。

目的を達することが出来るのか。その問い掛けに、俺は即答出来ないでいた。

そして、なおも神様の言葉は続く。

「ひろしさんのことを信じていないわけではないんですよ。ただ、何と言ったらいいか……………」

「……………この展開、詰んだっぽいってこと？」

「はい、あ！ いえ！ ………………はい」

結局「はい」かよ。

まあ、確かにせつかく原作介入を始めたのに、その途端この状況

では、そう言われるのも仕方が無い。

少し気まずい雰囲気に含まれる中、俺は声のトーンを若干落としてながら言った。

「でもさ、考えてみたらこれは、管理局が腐ってるからいけないんだよ」

「何ですか？」

「そもそもあいつ等が地球にやって来るのが早過ぎるんだよ」

「いや、それはリーゼ姉妹にひろしさんのことを通報されちゃったから……あ、お尻のことじゃないですよ。次元世界に詳しく過ぎる現地住民がいるってことで」

「そこだよ、問題は。何でそんなことで俺が通報されなくちゃいけないんだ。あいつ等の暮らす世界とは全く違う世界の人間なんだぞ。ましてやここは管理“外”世界。それなのに、何であいつ等はいちいち首を突っ込んでくるんだろうな」

「それが管理局のお仕事だからでしょう？」

「だーかーらー！　なんで生意気に管理なんてしてんだらうって。しかもアレだぜ。この世界に来てジュエルシードの実情を知った途端、あいつ等は自分達で回収すると言っておきながら、ちゃっかりなのはの能力を利用しようと、仲間に引き込んでやがる。最低だと思わないか？　なのははまだ九歳だぞ。そんな子を戦わせること自体が、常識ある大人のすることじゃないよ」

「なんかそれはちょっと筋の違う話ではないかと」

「そうだよな！　やっぱり管理局のやってることは筋が通ってないよな！　あいつ等、自分達の私利私欲のために動くケダモノみたいな連中だよ！」

「いや、僕が言ったのは」

「だいたいフェイトを捕まえることだって意味が分からねえよ。何でジュエルシードを集めているだけのフェイトを捕まえて、なのはは自分達の仲間に迎え入れているんだ？　プレシアの指示とは言え、やってることはなのはと変わらないはずなのに、ああいう扱いだ。」

しかも、原作終了後にはこれまたキッチリと、フェイトも自分達側に取り込んでいるんだぞ。どこまで意地汚い連中だよ」

なんだか言葉にしたせいでだんだん怒りが込み上げてきたな。俺やフェイトの置かれたこの理不尽な状況が、無性に許せなくなってきたしまった。

神様は何か言いたそうな顔をしているが、たぶん俺と同じことだろう。

そうだ。腐った管理局がしゃしゃり出てくるから話がこんな状況になったんだ。だから詰んだとか思われるんだよ。

くそ。やり場のないこの怒りをどうするべきだろうか。目の前にクロノやリンディ提督が現れたとしたら、俺は即噛み付くことだろう。

それぐらい俺の気持ちは今、昂ぶっていた。

「そんなに管理局は信用ならないか？」

「ああ、もちろんだとも！」

投げかけられた質問に俺は力強く答えた。

しかし、誰が質問を投げかけた？

答えてから一瞬だけ動きを止めて、声のした方向へ視線を向ける。そしてその先にいた人物達を確認して、俺はたじろいだ。リンディ提督とクロノだった。

いつから部屋の中に？ 俺に尋問でもしようというのだろうか。

神様に視線を向けると、彼もこちらの方を見ながら、はわはわと両手を震えさせていた。ってか気が付いた時に教えろっつーの。

ベッドに座り直し、尚も二人に視線を向けていると、クロノは部屋の片隅で壁に寄りかかり、リンディ提督は俺の隣に腰を下ろした。「さて、と……………ひろしさん、少しだけお久しぶりかしら？」

「そ、そうですね」

リンディ提督の表情は、不気味なほどに優しい微笑だった。そういう時の笑顔ってのはどうにも嫌なものである。これは世の常だと思ふ。

案の定、改めて見てみればリンディ提督が笑っているのは口元だけ。目はまったく違う感情を映し出していた。

これはまずい。直感的にそう思ったのは、おそらく間違いではないだろうな。

下手な言い訳はしないほうがいい。誤魔化し笑いで流せる雰囲気でもない。

「まず単刀直入に言わせてもらおうと、あなたのやったことは、あなた自身にとって非常に悪い結果をもたらすものです」

「それは、フェイトの手助けをしてクロノを敵に回したこと、ですよね？」

「それ以前に」

「ク、クロノの監視下から勝手に逃げ出しましたもんね？」

「それ以前に」

「……………リーゼ姉妹のお尻？」

リンディ提督は、大きなため息を一つだけついてから言った。

「……………あなたは、私達を裏切ったのよ？」

「裏切った、ですか」

「そうよ。そもそもあなたは、次元の壁を越えた私達の存在や、魔導師という地球上では特別異端である存在に関わる要素が無いはずの人。それなのに、あなたはいろいろなことについて詳しすぎる。

本来であれば、あなたのような人は私達からしてみれば、嚴重に注意をするべき対象なの」

俺は返事することなく、黙りこくったまま下を俯いた。

そして、彼女の言葉を受け取った。

「でも、私はあなたを信じて、現在の生活を受けながらも一時的な観察対象とする程度に留めた……………その判断は間違いだったということかしら？」

リンディ提督の表情からは、いつの間にか笑みが消えていた。なるほど。彼女の言いたいこともそこか。

リンディ提督の話が終わったのを確認してから、俺は俯かせてい

た顔を上げて真っ直ぐに彼女の目を見た。それから、次にクロノの方にも視線を向けた。クロノは相変わらず壁に背をもたれかけさせたまま、腕を組んでじっと俺の方を見ている。

その視線から分かるのは、あいつもリンディ提督と同じ考えなのだということだ。

二人の表情を見て、俺の中には再びあの感情が広がり始めていた。この二人がどこから俺の話を聞いていたのかは分からないが、俺の意見は全く揺らいでいない。ちょうど神様とその話をしていたところだし、この際だから言ってみよう。

「こうなってしまった以上は仕方ありません。やはりあなたのことを自由にすることは出来ません」

やっぱりこいつらは、腐れ組織の時空管理局員なんだな。その認識を確かなものとした時、呆れるあまり今度は俺が笑ってしまった。何もない部屋の中、誰一人として動きを見せないまま、俺の笑い声だけが響いている。

「何がおかしいんだ？」

最初に沈黙を破ったのは、クロノの静かな声だった。

その質問を俺に投げかけるか？ 本当に、どこまでもめでたい連中だな。管理局員というのは。

「お前達は、一体何様のつもりだ？」

そう言ってやった時、クロノやリンディ提督から確かに驚きを感じ取ることが出来た。

「俺を信じただと？ 俺があんた達を裏切っただと？ 随分と勝手な言い草じゃないか。俺はいつからあんた達の仲間になったんだ？」

「ひろし。君は」

「黙れクロノ。俺の話をよく聞けよ……………まず一つ、リンディ提督」

「何かしら？」

「高町なのはとユーノ・スクライア、彼女達の処遇はどうなったんだ？」

俺が尋ねると、リンディ提督はクロノと顔を見合わせた。しかし、二人はしばらく視線を重ねてから、リンディ提督だけが小さく頷いてから言い始めた。

「……………温泉宿でクロノ執務官が出会った兩名には、ジュエルシードに関する話と、魔法との出会いから今に至るまでの経緯を聞いたわ。その後、一度はこの事件から手を引くことを勧めただけだけど、本人達の強い希望もあって、私達の補佐としてジュエルシード集めに協力してもらうこととなりました」

つまり、原作どおりというわけだ。手順は違えど、なのは達に関しては今のところ、シナリオどおりの展開を歩んでいるということになる。

ならば、俺の考えはやはり間違っていないということだ。

「やっぱりな……………だからお前達は何様だと訊いたんだ」

「どういうこと？」

「俺は管理外世界の人間だぞ。それなのに、何故お前達は管理外の世界に首を突っ込んでくるんだ？ しかもなのは達を自分達の戦力として抱え込み、挙句、フェイトに関しても事情を知りもしないうちから捕まえる。そして極めつけはさっきも言ったことだ。俺を信じたとか、俺が裏切ったとか、お前達の気持ちばかり押し付けやがって。本当に腐ってるな！ お前達は『独裁』と書いて『正義』と読んでいるだけに過ぎないんだぞ！」

言いたいことを一気に吐き出していたら、俺はいつの間にか立ち上がっていた。

視線の高くなった俺を、リンディ提督はじっと見上げていた。そしてクロノは、腕を組んだ姿勢は変わらないまま目を閉じて俯いていた。

こいつらのこういう、すました態度がますます苛立ちを強くする。俺にまくし立てられて何も言えなくなるのなら、最初から口を出してこなければいいのに。

「まったく、愚かだよ。お前達は」

最後に、口の中に入った砂を吐き捨てるように言うと、部屋には沈黙が訪れた。

それからあまり間を置くこともなく、クロノが動き始めた。何か反論があるのならぶつけてくれればいいさ。俺は真っ向からぶつかってやる。

そしてお前達の腐れ具合を徹底的に指摘してやる。

壁から背を離し、歩き始めたクロノ。

俺は身構えた。

しかし。

「お、おい……………」

クロノは、何も言わないまま部屋を出て行ってしまった。

何だ？ 凶星を突かれて戦意喪失でもしたのか？

俺は拍子抜けしたまま、立ち去っていくクロノの背中をじっと見ていた。

ふと横を見ると、リンディ提督も同様に、クロノの背中へ視線を送っていた。

意外だな。案外クロノはガキンチョだったみたいだ。逃げずに残っているリンディ提督の方が肝が据わっているじゃないか。

ってことは、俺のこの怒りは彼女にぶつければ？

「……………ねえ、ひろしさん？」

クロノの背中を見つめたまま、リンディ提督はそつと言った。

「あなたは本当に、管理局をそんな風に思っているの？」

リンディ提督の声は、何故か優しげだった。

どうしたというのだろう。俺に凶星を突かれて、参っているんじゃないのか。

「お、思っているも何も、事実だろう！」

「そう……………分かりました」

リンディ提督は、俺と視線を合わせることもないまま立ち上がり、部屋の出口に向かっていった。

「な、何だよ！ あんたも逃げるのか！？ 自分達の非を認めて、

改めて、新しく進んでいこうって気はないのか！？　おいっ！」

しかし、いくら声を掛けてもリンディ提督は戻ってくることなく、俺の視界から消えていった。

それでも俺は、閉ざされた扉を何度も叩きながら、遠くにいる二人へ向けて声を張り上げた。

「おい！　話を聞け！　こらぁ！」

一生懸命騒いでいるのだけれど、やたらと静かに感じてしまうのは何故だろう。

「ひろしさん……………」

神様の声を聞いても、どんなに俺が叫んでも、扉を叩いても、部屋の中は空虚のままだった。

やがて声を出すことにも疲れた俺は、ベッドの上で寝転がったまま目を閉じていた。

なんだかもやもやとした気持ちに嫌で、いつそのこと眠ってしまいたかったのだが、どうにも寝付けない。

フェイトは今頃どうしているのだろうか。リンディ提督とクロノに尋問でもされているのかな。まあ、今のフェイトは事情を素直に話すとは思えないけどな。

神様もさつきからずっと黙ったままだ。何か退屈しのぎに話しかけてくれないかと思っているのだが、彼の表情は何故かどんよりと暗くて、そんな雰囲気ではなかった。

退屈で死にそう。何度も寝返りを打ちながら、時間が過ぎていくのをじっと待っていた。

そんな時だった。

部屋の扉が開く音がして、誰かの足音が聞こえてきた。

またクロノカリンディ提督だろうか。

「なんだぁ？　さっきの続きでもしようってか？」

そう思って目を開けながら体を起き上がらせると、そこには意外な人物がいたのだ。

「エ、エイミィさん!？」

「あっははは……なんか、お久しい」

ちよつとだけ緊張したような硬い笑顔を浮かべて、エイミィさんは俺を見ながら手を上げた。

俺にも緊張が走る。なんてこった。この狭い部屋、しかもベッドしかないこの部屋に、若い男女が二人きり。

だめだ。理性を保てよ、俺。いくら今の体勢が、

「ヘイヘイカモン」

な状態だからと言って、手順も踏まずにそんなハレンチな。

「何? ヘイヘイカモンって?」

バカだ。声に出てるよ、俺。

「あ、あの! エイミィさんは、い、いか、いか! いかがなさつてここに参られました!？」

「あ、うん。えっとね……クロノ君からさっき話を聞いてさ」話と言うと、さっきのことしかないと思うんだが。

「ひろし君が、管理局を信じられないって言っていたことなんだけど」

やっぱりそれか。

その話は、たとえエイミィさんに訊かれても変わらない考えだ。

まあ、確かにさっきみたいないな激しい感情はだいぶ収まったけれど、でもやっぱり俺の中にある考えは、変わっていない。

やっぱり管理局は、外道組織だと思う。

「もちろんそう思っています……エイミィさんもそう思いませんか? クロノとリンディ提督は俺に痛いところを突かれたからって、反論もしないままどっかに逃げて行っちゃいましたけど」

そこまで言うのと、エイミィさんが少しだけ悲しそうな顔を浮かべた。

何だよ、その顔は。自分の居場所が悪く言われるのは確かに嫌か

も知れないけれど、本当のことなんだから仕方が無いじゃないか。
こういう時って女の子はズルいよな。そんな顔して男の心をも
すぐく不安定にするんだから。

「クロノ君、すぐく不機嫌だった」

「そりゃあそうでしょう。俺に事実を激しく批判されて、その上そ
れは自業自得なものなんだから、怒りのやり場がなくてイラついて
るんだ」

しかし、エイミーさんは小さく頷きながらそつと言った。

「そんなんじゃないよ。クロノ君が不機嫌なのは、ひろし君に裏切
られたから」

「だからそれは、あいつの勝手な言い分であって、俺を貶めたいだ
けの理由で」

「違うよ。クロノ君は、ひろし君ならきつと悪いことをしないだろ
うって思っていたから………シヨックだったんだと思うよ」

何だそれ？ 俺のことを信じていたって？

そんなはずあるわけじゃないか。

あいつは、クロノ・ハラオウンは、真面目な性格だから迂闊に信
じることなんてしないだろうし、頭が良いからあらゆる事態にも対
応すべく入念な手配を怠らないだろう。

そんな奴が、出会ってまだ間もない俺の言うことなんて信じてい
るわけがないじゃないか。

ましてや俺は、クロノやリンディ提督の前で、魔導師の存在や次
元震の発生予告など、いろいろと注目されてしまう発言を繰り返し
てきている。

あいつ等からしてみたら、間違いなく俺は危険人物だ。

そんな奴を信じるだなんて、クロノにしてはあまりにもお粗末な
心情だ。

「時空管理局って、次元世界を管理するためにあるんじゃないんだ
よ………って言ったら、嘘だと思う？」

「え？」

突然のエイミィさんの言葉に、俺は目を丸くした。

「『管理世界』とか『管理外世界』っていうのは、あくまでも区別するための呼称ってだけ。私達は、各々の次元世界が皆仲良くやっていけるようにって言う体制を管理しているから、『時空管理局』って言うの。それが本来の意味」

そんな。それじゃあ、あいつ等が管理外世界に首を突っ込むのも認められちゃうじゃないか。

「だから次元世界を消し去りかねないロストログアは、私達がきちんと見張りましようってわけ」

「で、でも！　なのはやユーノみたいな少年少女を戦わせるような真似は非道でしょう！？」

「文化の違い？　って、それだけじゃ乱暴か……………たぶん、なのはちゃんやユーノ君達の、誰かのために一生懸命頑張りたいっていう熱意に負けちゃったのかもね」

「そんな！　大人のくせに！」

「リンディ提督の旦那さん、つまりクロノ君のお父さんが、そういう志の強い人だったみたいだから。たぶん、無碍には出来ない想いだったのかな」

クロノの父親は、原作第二期で語られる、今は亡き人だ。確かに彼は、自分を省みることなく、他人のために想って命を落としていった。

「フェイトを……………捕まえる必要は？」

「こうでもないかと話が出来ないだろうって。別に処罰が決まっているわけじゃないよ……………なのはちゃんが彼女のことをすごく気に掛けてたから。クロノ君はその想いに協力しようとして、今、彼女達の部屋で一生懸命事情を聞き出そうとしている。何だかんだで優しいんだよ、クロノ君は」

なんだよ。なんだよ、それ。

次第に、額には変な汗が張り付いていた。

心臓がバクバク音を立てている。

なんだろう。この、体が押し潰されそうなほどの空気は。
罪悪感？ ふざけるな。

「俺を…………俺を信じた理由は？」

そうだ。そんな簡単に俺を信じるな。

俺は、お前達にとって危険な人物なんだろう？

俺が間違っているかどうか、半信半疑ではあった。エイミィさんの口車に乗せられているだけなんじゃないかと疑った。

自分が間違っていることを認めたくない。今更認められるか。俺が抱いている原作へのイメージは、間違ってるなんていないだろう。

「だって同じ学校に通ってる友達なんでしょ？」

「や！ あいつは俺を監視するために！」

「でも、学校帰りのクロノ君はいつも楽しそうだったよ？」

なんだ？ クロノってそんなにお子様思考なのか？ いつもすまし顔で大人ぶってる割には、俺と学生ごっこしたのが楽しいってか。そういやあいつにはからかわれて恥を掻かされたもんな。まだまだ年相応ってわけなのかよ。

そして勝手な思い込みで、クロノを捻くれた見方で見ていた俺自身も、なんだか馬鹿馬鹿しく思えた。

打ちのめされた俺の心から、零れた言葉が一つ。

それは、腐れ外道と罵った奴等に向けて。

「……………ご、ごめんなさい」

See you next time.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798y/>

転生NEXT

2012年1月10日00時46分発行